昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和三年四月廿八日印刷
昭和三年五月一日發行

道頓堀

天平文化宣揚紀念

脚本號

二十銭
ガ三年
ガ二十輪

大空高く鯉幟

甲冑凛々しき武者人形
端午の節句が近づいた
五月人形は三越特製品

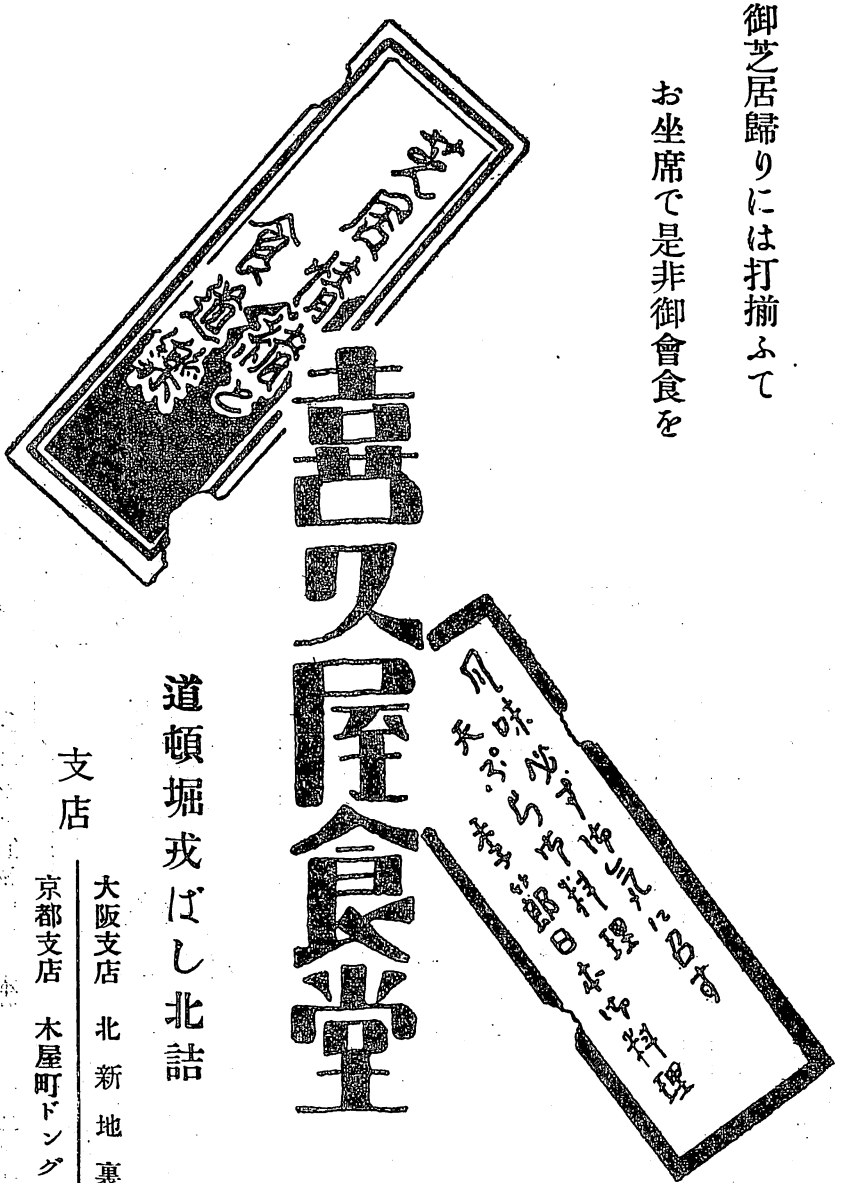
爽やかな更衣

身も輕快なかへごろも
新流行や實用とりぐ
初夏のお仕度は三越へ

大阪

三越呉服店

御芝居歸りには打揃ふて
お坐席で是非御會食を



道頓堀（天平文化宣揚紀念脚本號）第三年・第二十輯

◇表紙……（春色梅暦）……山口草平畫

○『春色梅暦』「尾花屋奥座敷の場」延若の唐琴屋丹次郎・我童の仇吉「向島三圍堤上の場」延若の丹次郎・段仙のお蝶「仲町裏河岸の場」我童の仇吉・魁車の米八○明治十五年八月神戸多聞座の番付○『國分寺戀開眼』我童の石川沙彌麿・延若の大伴國足と第六場の「舞臺面」○『義經千本櫻すしや』の舞臺面・延若の權太○『國分寺戀開眼』壽三郎の玄昉・『戀巴』魁車の太郎冠者・長三郎の次郎冠者・『平家の人々』魁車の宗盛○『うるさき人々』野村の村井文三・澤田の大澤大休・『浪人の群』澤田の浪人細川・『掏摸の家』根岸の翠色や・久松の庄吉女房・澤田の掏摸の庄吉・丸茂の弟金次・『金平化生討』澤田の金平と舞臺面○『奈岐女郎』と久米仙」の舞臺面・岡田嘉子の奈岐女郎　梅島昇の久米仙人○『安倍仲麿』の舞臺面・『悲願千人斬』中田正造の土佐青九郎

◇口繪寫眞

扉……（義經千本櫻）……三浦おいろ氏藏

中座

回平家の人々……（芝居物語）……素木宗一（二）
回義經千本櫻……（解說）……さしゑ……大塚克三（八）
回新曲戀巴……（あふむ石）……さしゑ……食滿南北（一〇）
回春色梅暦……（芝居物語）……松鼻莊主人（一三）
◎立體的史劇として……永田衡吉（二二）
◎佛教文明と天平時代……大森痴雪（二三）
◎いがみの權太……川尻清潭（二四）
◎すしや雜考……京極利行（二五）
◎權太の性根……實川延若（二三）
◎戀巴に就いて……食滿南北（二四）
◎深川の藝者……鳶魚（二六）
◎梅暦一夕話……尾崎久彌（二六）
◎粹所狂言「梅暦」……石割松太郎（四〇）
◎「梅ごよみ」漫談……富田泰彦（四七）
◎江戸情調と深川唄女……中村魁車（四九）
◎情調の芝居……木村錦花（五〇）

□道頓堀行進曲（2）……作歌　日比繁治郎（六七）
□角座と松竹座・（五月興行配役一覽）……編輯部（五二）

□喫煙室……高橋蓼雨（西）
□東京だより……S生（六〇）
□辰巳すがた十首……木村富子（五六）
□戀巴稽古場漫談……杵屋正一郎（五七）
□喜劇新人座の出陣……内山惣十郎（五八）
□鹿兒島より……片岡我童（四三）

□幕内閑話…（3）……大川澱江 日比繁三 共編（九二）

□俳句……（煤蓑選）（九六）
□劇評……（編輯部選）（九八）
□讀者文藝募集……（九八）
□樂書帖募集……（九八）
□芝居短歌……（山上貞一選）（九七）
□寄贈雜誌紹介……（三一）
□劇評募集……（九八）
□樂書帖の一……鐵の爪生（五九）

浪花座

◎痛快無比な芝居……川村花菱（六二）
◎「浪人の群」上演について……金子洋文（六三）
◎「掏摸の家」から語る……長谷川伸（六五）
◎金平を描き度くなつた氣持……鎌谷來水（六六）
◎現代大衆の欲求を代表する二潮流……澤田正二郎（七〇）
□うるさき人々…（芝居見たまゝ）……内山惣十郎（七二）
□浪人の群…（芝居見たまゝ）……北村九泉子（七九）
□掏摸の家…（芝居物語）……石原泉二（八五）

□安倍仲麿（角座上演脚本）……中井泰孝（一〇〇）
□金平化生討（浪花座上演脚本）……立案 鎌谷來水 作章 鎌谷慶次（一一〇）
□國分寺戀開眼（中座上演脚本）……大森痴雪（一二六）

□編輯後記……朝郎生
□挿畫・カット……大塚克三

お芝居の幕間と
お歸りにはお揃で
新鮮な初夏のお献立が
お待ち申してゐます

梅園

お芝居でのお食事は食堂にて……
お歸りには白鷹にて一寸一ぷく江戸すしを……

中座食堂

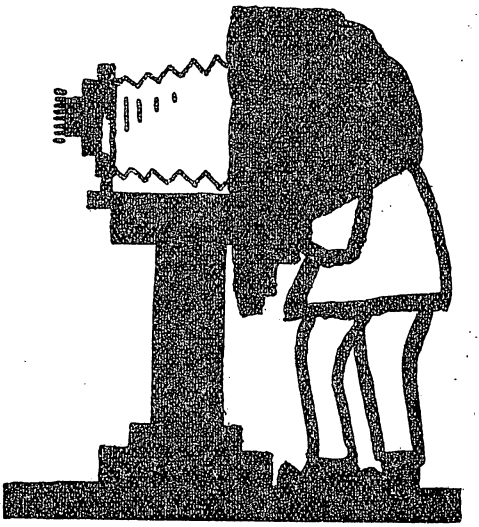
本店 太左衛門橋北一丁
電話南六二二七番

各族優勝旗
制帽
幕
幾帳
フラフ

梅原商店

神戸市
楠社西門

電話
元町一六一五番



青葉、若葉の候!!

潑溂のお姿を!

優秀の技術と迅速が
當館の有つ定評です
只今の一葉は後の深き
印象を歡起する。ぜひ。

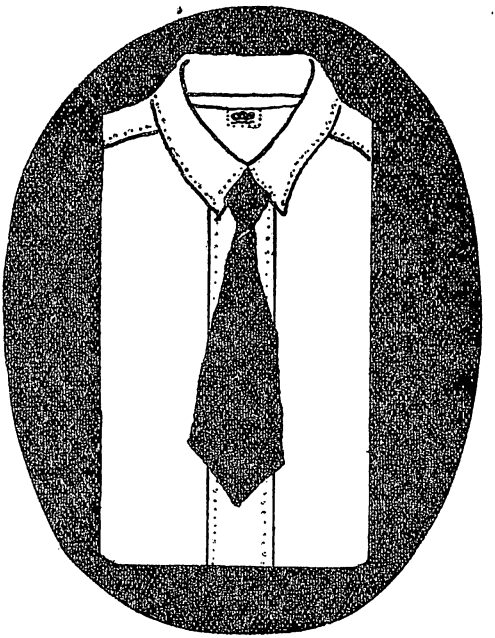
高津郵便局東

山崎寫眞館

電話南四二四四番

清々しい初夏に

井上のワイシャツ



お誂へのワイシャツ

お好みの柄・ピタッと合った快心

段値おい安ぬら變と品製既もかし

すまし致伺お様直ばれすまいさ下報御

布綿絹

ツヤシイワ

ーラカ

井上勝美

本店　大阪市天王寺區筆ヶ崎町七七

工場　東成區中道町四八九

妻三郎が一世一代の傑作として、茲に映畫化す明治維新の英傑、坂本龍馬先生の雄々しき劍俠史は單なる興味一遍の映畫に非ず。飽く迄史實に基き撮影せる大作品なり。

松竹キネマ提供

大阪趣味と川柳

◇大阪趣味と川柳のコーラスを知るには是非川柳誌「番傘を」お讀み下さい

◇「番傘」は輕快な川柳家の雜文が面白いので川柳家以外にも喜ばれるます

◇「番傘」は一冊三十錢(見本も同斷)半年分一圓七十錢。

大阪市此花區野田驛前

番傘川柳社

〈大阪をたちのいて……

唄に知られた趣味のカフエー

『梅忠』は

(大阪市南區笠屋町三十四番地
宗右衛門町太左衛門橋北詰北入
電話南八三九六番)

今やモダーン化されて皆さんの御ひゐきを頂いて居ります。かりかごがなければ飛行器でも自働車でもあるひは又テクシーでも、どし〳〵お越しの程お待ち申して居ります。

小道具・小裁

貸衣裳

素人演藝會
宴會の催物
春秋温習會
婚禮の衣裳

松竹衣裳部

本店 大阪市南區久左衛門町八
長電話 南四七一一番
一一八八番

東京支店 東京市淺草區並木町十五
長電話 淺草五五九九番

（其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます）

スキナ脂取紙（あぶら）

本舗
スキナ屋號
中田商店
大阪

道頓堀△△曲

芝居、雜誌、
『道頓堀』は
讀者、未曾有の、
歡迎雜誌
何んで……
……
スキナあぶら取　もう買にゆこ
化粧品や、又は、賣店へ……。

道頓堀の各座、及び各地化粧品店に販賣せり
お買求めの節は『スキナ』と御指定を乞ふ

現品縮圖
スキナあぶら取紙

スキナ　TRADE ✪ MARK　スキナ
REGENTLY INVENTED
GREASY SWEAT ABSORBER.
《スキナ》 NAKATA & CO.

"GREASY SWEAT ABSORBER"
Take off a leaf of Greasy Sweat Absorber and pass over the face. The effect is that all greasy sweat will be soon absorbed and extremely light broom will be left.

獨逸國醫學博士ウインナ氏新發見

男女 色を白くし 毛の發生を止める

最高級美身劑 **ホルン**

昭和二年官許

ホルンは眞の生地から根本的に色を白くしキメ細かに滑かに綺麗に致します。そしてムダ毛ウブ毛など何れの所の毛も生ぬよう止めることが出來ます。

かような他に見られない特色がありますから是非一度お試し下さい。

定價參圓半、倍量五圓半、前金御注文送料不要

關西唯一 **現代式脫毛劑**

三分間で美男美女となる

奇績的驚異 **エデル**

昭和二年官許

エデルは大阪府官廳に於て初めて弊社に許可せられた名譽ある脫毛劑でアリフレタ化粧品的のものではありません。

毛深き方は御安心の上思ふ儘に手輕に脫毛が出來て見違へる程スベスベとした美肌となり爽快味を覺えます。

定價參圓、倍量五圓、前金御注文は送料不要

最新發見不思議劑

男女 **わきが** 腋臭 **專門劑**

革命的偉効 **アイン**

昭和二年官許

アインは在來の不信用な類似藥と全く異なり唯だ一劑分以上は用ふる要なき不思議劑であります、これまで百方手を盡し効なき方は一刻も早く試みられよ。

アインは**クリーム**性で秘密に用ひ易く手術や服藥の必要はありません奇効を御實驗下さい

定價壹圓、貳圓、參圓前金御注文は送料不要

●御注文の便法◎はがきで御注文次第スグ引換小包で密送致します。

以上何れも効力絶大御愛用各位の感謝狀は机上堆積の現象で有ます

總て詳しい說明と使用書は、現品に添へてお送り致します。說明書のみ御入用の方は藥名とこの雜誌御覽の旨御記入御申込み次第無代御送附致します。

御注文について

當社は米國式斬新なるメールオーダービジニスの方法を遵守致して居りますから御注文は直接當社宛に

振替又は郵便爲替で願ひます引換小包は郵券廿三錢御送附を願ひます

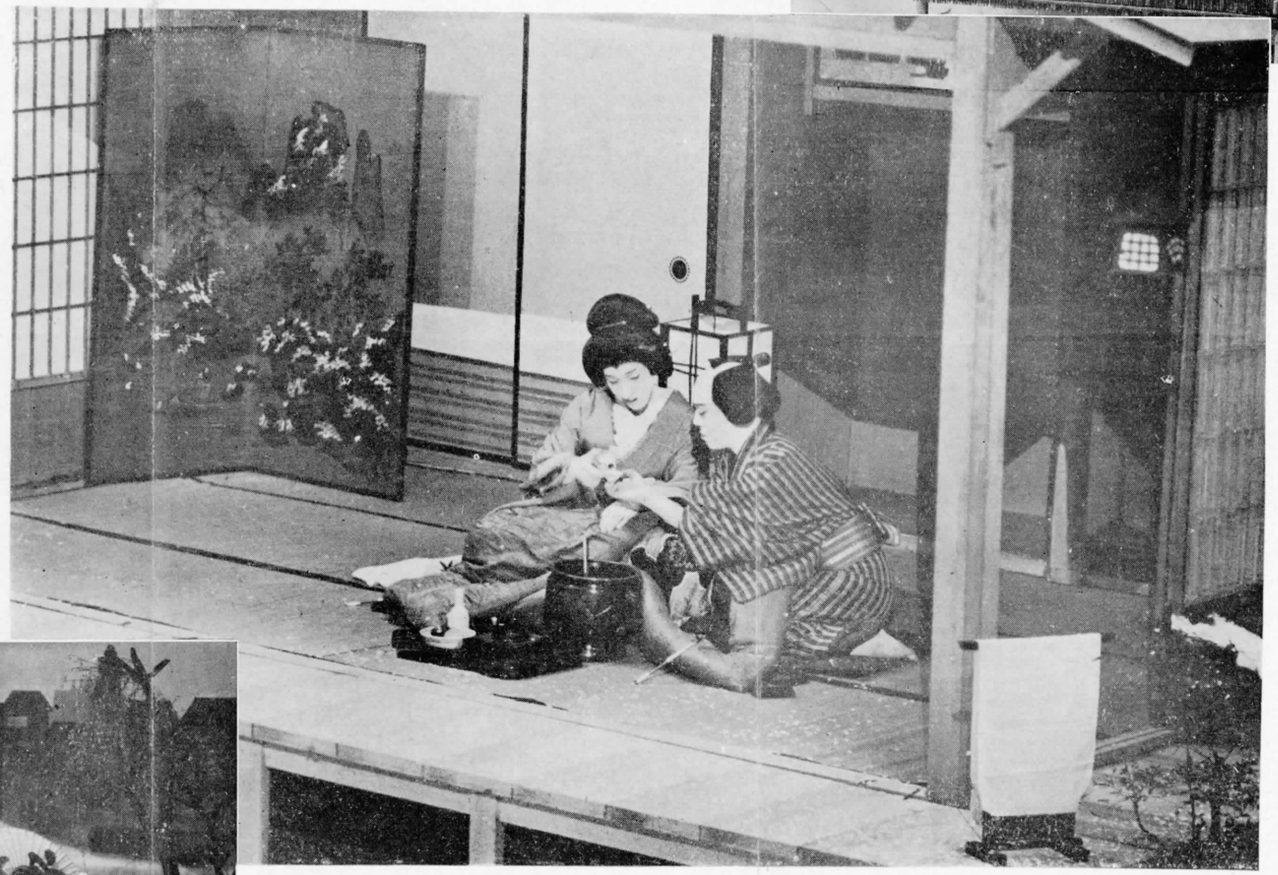
大阪市東成區生野國分町三〇八地

製劑發賣元 **デーオー社**

振替大阪七九八九二番

「春色梅暦」中興五月興行

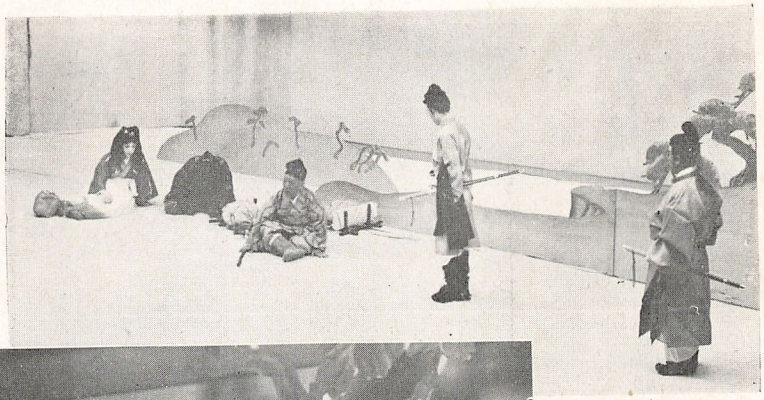
延若の唐琴屋丹次郎
我童の仇吉　場の敷座奥屋花尾



蝶おの仙霞・郎次丹の若延　場の上堤圃三島向幕序……上

八米の車魁・吉仇の童我　場の岸河裏町仲詰大……下

明治十五年午の八月神戸多聞座「春色梅開暦」の古番附

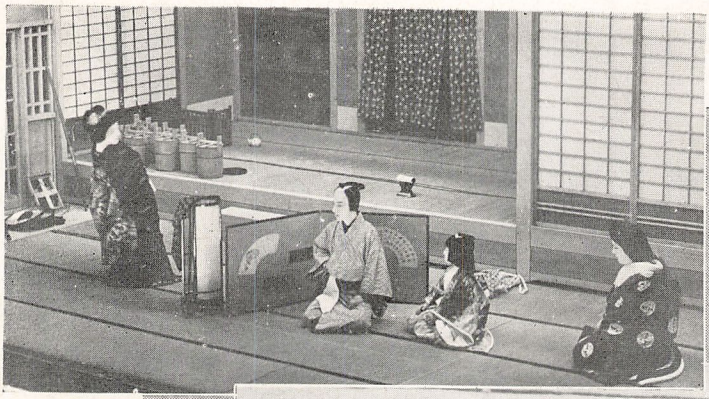


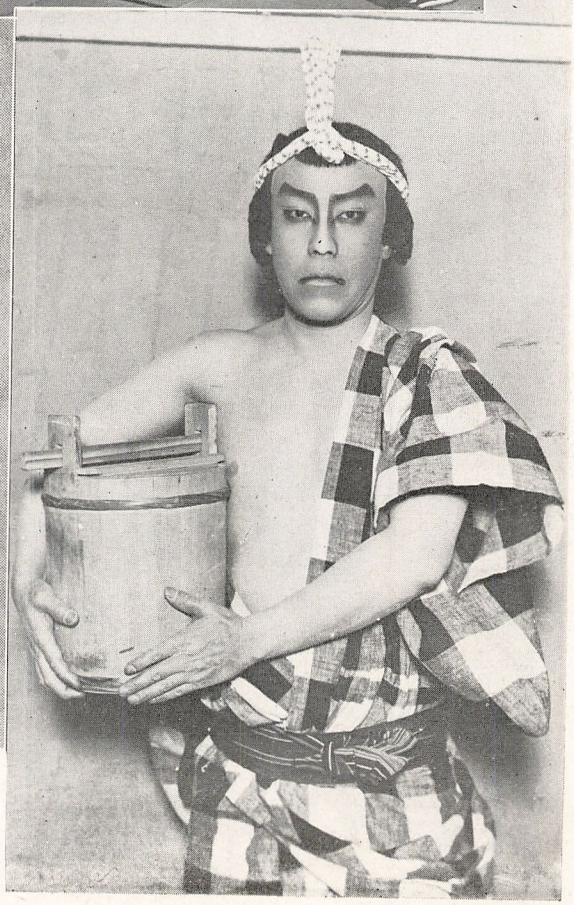
中座五月興行「國分寺戀開眼」

我童の　石川沙彌麿

延若の　大伴國足

上……第六場　國境の山の舞臺面





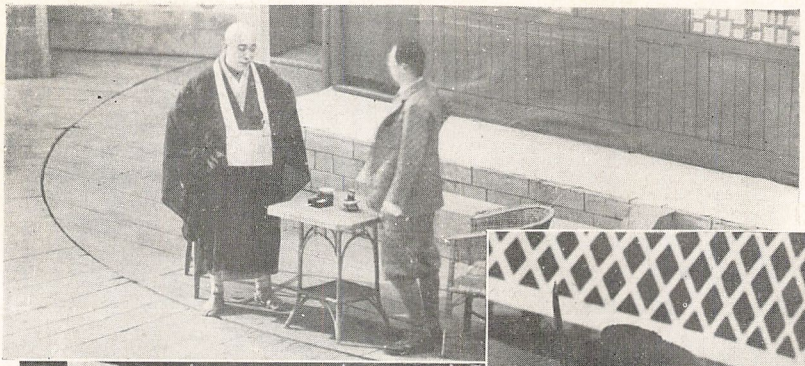
五月の中座興行「義經千本櫻」すしやの場

上……すしやの舞臺面

下……延若の權太

五月の中座の舞臺から

上……壽三郎の玄昉
「國分寺戀開眼」
中……魁車の太郎冠者
長三郎の次郎冠者
「戀　巴」
下……魁車の宗盛
「平家の人々」



「うるさき人々」野村の村井文三　澤田の大澤大休

「浪人の群」澤田の浪人細川

「掏摸の家」根岸の擘色や　澤田の掏摸庄吉　久松の庄吉女房　丸茂の弟金次

「金平化生討」澤田の金平と舞臺面

五月の松竹座

天平劇

「奈岐女郎と久米仙」

……岡田嘉子の奈岐女郎

梅島昇の久米仙人

上……は舞臺面

五月の角座「悲願千人斬」

中田正造の土佐青九郎

上……天平劇「安倍仲磨」の舞臺面

第三年

月刊・演劇研究・雑誌

演藝會

第二十輯

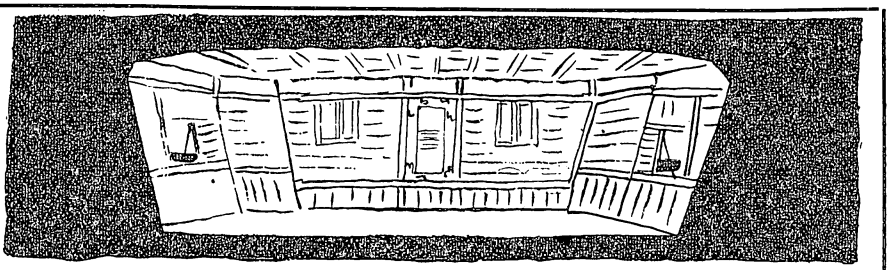
塩のやしす〔櫻本千經畫〕

中座五月興行上演

芝居物語

平家の人々

素木宗一



船室は息詰りさうに不安が蒸せ返つてゐる。その上に安部晴延が鈍重に口籠つて、意味の知れぬ呪文をブツブツ先刻から唸つてゐるのが、蒸せ腐りさうな空氣を薄氣味惡く澱ませるばかりである。宗盛は益々苛立つて來た。

小さな窓から潮風の强烈な海面を絶えまなく覗いてゐるけれど、平家の旗色は、陽が暮れはじめる空の色に跟いて行くやうに褪せる一方である。

「敵の先陣が二百艘の援軍を得ましたッ」

烈しく外から戸を叩き破らんばかりに狼狽へた聲がする。

「最後の印を早く……それから御呪文を。」

宗盛は陰陽博士の晴延に嚙りつきさうな顫ひ聲で急き立てる。この場に臨んでは唯呪文の響が何よりの心賴みである。知つてゐるものなら自分も一緒にそれを試みたさうな手附で焦々さする。

「二位尼さまが御卒倒あそばされて大變でございます。」

今度の聲は女だ——重衡の妻である。

「放つて置きなさい。すぐに息を吹き返すでせう……わしは今、そこごころでない。」

「放つて置けとは、餘りに非道いお詞でございます。」

少しも構へつけない氣配なので、涙含みながら立去る足音が微かに聞えて、そして、消えた。

必死の顏を窓に押着けて海を凝視した居た宗盛は、やがて悲鳴のやうに叫んだ「おゝッ一齋に海中へ潛つてしまつた」

と、深い太息と一緒にメリ込むやうに、その場へ尻餅をついてしまふ。もう晴延も諦めたやうに呪文をプツリと切つた。二人は顔を見合すのみで聲が出ない。又、一倍色濃い不安が眼に見えぬ渦を卷いて居るやうである。

焦燥が絶頂まで昂じて、絶望に襲はれて、それから少時すると、もう確固とした覺悟を極めたらしく、宗盛は平然たる尋常の態度を取戻して、心もち晴延の前で低く頭を下げた。

「種々と御苦勞やら、御心配やらを、お懸けいたしました深く御禮申上げます。たゞ、恁うして言葉でお禮を申すばかりで、先劑お約束しましたやうに、朝廷の陰陽頭にお取立てすることの出來なくなつたのを、心から遺憾に思つて居ります。」

取亂した今までの姿を振返つて冷汗を滲ませた。が、既に覺悟を決めた以上、もう動じる惧れは塵ほども殘つて居ない流石に平家の總師としての器量はあつた。

平家の今日の、この壇の浦の敗亡——は、都落ちの當時から、宗盛の胸には思ひ當るものがあつたのだ。その忌はしい豫感を態と忘却することに努めた。華やかな生活に執着が蟠まつて居たたらだ。

時節のまぐれ當り、偶然の勝利、そんな夢を描いて、夢より儚ない望みにのぞみを懸けて居た。居たものゝ今日と言ふ今日こそ、一門の悲運の如何とも遁れ難いことを、鮮明に見せつけられたのである。

「一門の絶望は已むを得ぬことゝして、この個人、宗盛の運命はどうなるのでしやうか。今一應、博士の御占斷を煩はしたいと存じます。」

靜かに退かうとする晴延の袖を引き戻して、宗盛は眼を輝かせた。

今は唯、武運よりも一箇の生命である。

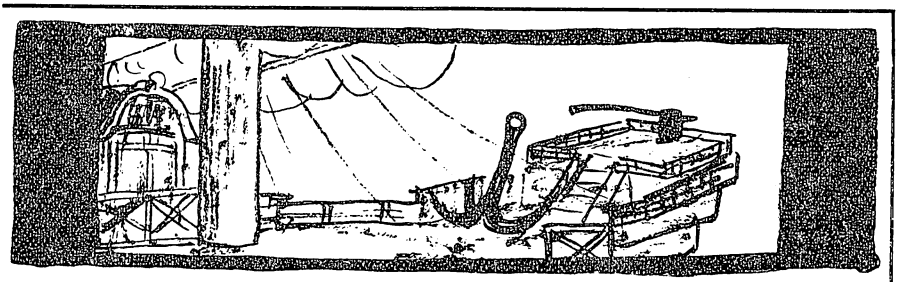
死ぬるか生きて居られるかゞ豫知したかつた。そして生きられるものなら野人と落魄しても構はない——どうでも生きて居たいのである。野心などはこのまゝ振すてゝも、惜しくはない、と、密かに肚の底で繰返しながら、陰陽博士の眉の色を窺つた。そして、其處には迷惑さうに返辭を逡巡してゐる顔がある許だ。

宗盛は再び袖に縋つて、今度は離しさうにない。その態度は既に涙含むだ哀訴に化つてゐる。

「何とか——何とか一命だけは取留めるやうにお祈り下さらぬか。私はもう、生きてゐるやうな氣がしないのです。」

死の恐怖が背後から跫音を忍ばせて、ジリジリ肉迫してくるやうで居耐れない。

「開けろ、早く、戸を開けないかッ」



焦れた怒聲が破れるやうに響いて軈て、這入つて來たのは敎盛と、其の一族郎黨女房達の群衆だつた。白髪の敎盛を除けば、誰一人として元氣のある顏色はなかつた。決定的な非運の前に、默つて首を垂れてゐるかのやうに萎れた人達ばかりである。

敎盛は下らない占ひをした詫びを御座所へ謝罪して來いと息捲いた。

「一體、合戰最中に占ひなど、言ふことは大禁物だ。それに大凶の噂なぞ立つから不可ないのだ。」

「お前に妖言を吹き込んだのは何處の何奴だ。」

獅子のやうに吼へちらして知盛も加つた。抱へて居た包みを抛り出すと轉がつたのは安部晴延の生首である。それを眺めると宗盛は、不氣味な存在が一つ、消失したやうに輕い安堵をかんじるのだつた。

「さ、先づ俺の前へ出を支いて謝れッ」

「何を謝るのぢや」

「迷便沙汰から全軍の士氣を沮喪させたことをだ。」

敎盛も詞を挾んだ。

「お前はこの合戰の結末を、どう、着けやうと言ふのだ。」

「斷然——合戰を打切つて、天の呪ひを解くのぢや。」

宗盛は柔和を貴族氣質と强直な武士氣質の二つばかりが瀰漫する今日の時代に、新手な反逆の氣勢が根强く擡頭してゐるのを感知せずに居られなかつた。平家一門の弊風に軈て呪はるべき破滅を知つて居たのである。源氏の配景には其の眼に見えぬ新時代の熾烈な潜勢力が恰も魔法のやうに具備されて居るのだ。その理法を諄々と說いたが、氣の荒い知盛等は一蹴して、今猶、戰ばかりをひたぶる唱へるのである。

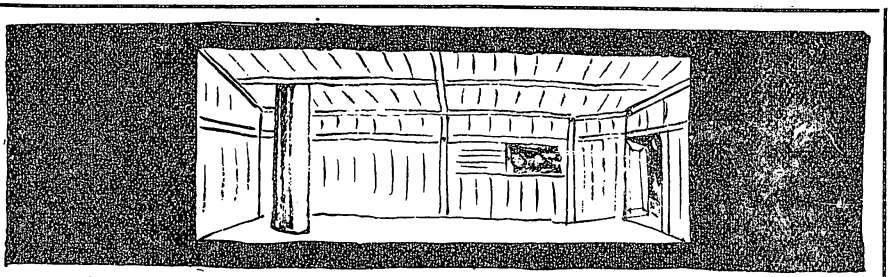
味方に反いた民部重能がこの說法のさなかへ、後手に縛されて重さうな歩みで連れられて來た。當然、裏切者は處刑されねばならぬ、人々の眼は互ひにそう呪詛したけれど、宗盛は冷然と見流して手を下しさうにも無かつた。

「この上は主上の御安泰を計つて、合戰を打ち切り賴朝に天下を渡すのぢや。」

執るべき途をまざまざしく眺めるやうに、宗盛は靜かに呟いたのを、知盛は一倍荒々して息捲いてその意圖をヘシ折り

さうな勢で吐鳴りつけた。
「そんなバカなことがあるかッ、もう一度言つて見ろ。」
恐ろしい顔色で宗盛に肉迫した。若しまちがへば忽ちに振浴せさうな烈しい權幕だつた。
「能登守殿には急に、松浦黨に攻寄せられ、頗る御苦戰の態にござります。」
又——不利な戰報が這入つて來る。
「何苦戰——立てッ。皆、戰場へ行けッ。」
知盛は阿修羅の如く猛り立つ。けれども二三を除く人々はもう立上ろうともしない、教盛さへも宗盛の說に動かされたと見えて、この御座船に踏留まつて最後の主上を警護する。と言ひ出した。知盛はこの氣勢に辛捧がしきれない、腹が煮え返つた。
「おのれ、宗盛、これでも一門の總大將かッ」
と、腹立ちまぎれに兄の胸倉を引摑んで撲り据えた。
「按察御局には主上を抱かせ奉り、御一同只今御入水の御裝束を召されて居りまする。」
悲愴な聲を絞つて重衡の妻が轉び込んだ。
突端に、此の兄弟喧嘩の荒々しい騷ぎも何も彼も、吹き飛ばされたやうに鎭つて、唯、跡に重鈍な絕望が總立になつた人々の眼を濁して居た。

陽はとつぷり沈んだ。
甲板へ出ると海上に流れる兵船の灯が、燈籠流しの迷ひ子のやうに、心細く二つ三つと、儚なく消えて行くばかりである。
大碇の側で二つの人影が蠢いて居る。夜氣の靜寂を盜んでヒソヒソと囁いて居た。それは越中次郎兵衛と上總五郎兵で周圍に頻りと氣を配つて碇の綱を解いてゐる。と、その綱を艫で船べりを傳はせて海面に垂らした。
未練らしく今際になつて遁亡を企てゝゐるのだ。其處へ縛されたまゝの阿波重能も走つてくる。思ひは同じの落人は恁うして人知れず船を離れて行つたが、知盛に發見された上總五郎兵衛は遁げ遲れて叩き伏せられた。
血煙が立つてその體は海へもんどりを打つて墜落した。
生氣のない宗盛、教盛、資盛、清宗の面々が段々と現はれて出る。
「一門の將卒も或は倒れ、或は逃亡して、所詮、合戰はこれまでと覺える……わが一門が最後を決する時は、いま目前に逼つたのだ。
教盛は悲痛な口調で首を垂れる。淚がそこに濺んで居た。
清宗は父の宗盛を捉へて頑是なく出家を强請でゐる。それに惹かされたのか急に有盛や資盛等も「出家」を口々に願ふ



のであつた。知盛は其容子を眺めるこ苦々しくて耐らない。二人は小松内府の忘れ形見でないか。」決して父の名を辱かしめるな。武士らしい覺悟をしろ。」こ叱り飛ばして、一門が舳先に枕を並べて討死する事を說いた。

それが又、宗盛には苦々しい。

「美しい衣裝をズラリこ並べて、一門の榮華を見せびらかさうこ言う他愛ない見榮から出た考へぢや。」

こ、冷笑したので、兄弟がこもすれば爭ひさうになる。

知盛は嫌がる子供を忽ち綱で縛り上げる。

教盛は點つて此塲を去つた。沒落の底で唖み合つてゐる兄弟の淺猿しさが見るに忍びないなしい。

知盛は更に庇ふ宗盛の手を突き退けて淸宗の襟首を握つた。悲しさうに聲を揚げる子供の泣聲が、暗い海の暗を搔破るやうに滑つて行く。知盛の形相が餘りに凄まじいので遁に宗盛も手を出し兼ねた。

「おまへは、それほどまでに見榮が張りたいのか。」

辛うじて言ふ宗盛の聲は乾干びて居た。

「さ、次はお前の番だ。早く覺悟をなさい。介錯はわしがする。」聞えない振して構はずに詰寄つてくる。

「眞平御免ぢや、わしは俺で勝手にする。死にたい者は勝手に死ね。」

その面へヒラめかすのは知盛が拔き離つ刄である。

「人殺しッ」

宗盛は氣勢を挫かれて醜く遁げ廻つた。が、猛り狂ふ弟に足を薙がれるこ踏滑らして海に落ちてしまつた。が、水に溺れても未だ泳いで遁げて行かうこする宗盛である。

「おのれ、逃がすものか。まだ泳いでゐる。弓だ、弓だ、なぜ弓を持たぬ。畜生ッ」

その言葉の間で哀れにも有盛こ資盛の魂は宙に消えた。血刀がその慘酷な始末を涙流して語つてゐるのである。

それから半時經つた女院等の部屋は空家のやうにガランこして居た。その淋しい船室で教盛は只一人、念持佛を前に置いて默然こ端座して居るこ、宗盛の行方を探し飽ぐんだ知盛が血刀こ弓矢を抱へて荒々しく這入つて來た。

「到頭、この御座船にも三人なつてしまつたな。」
教盛は泌々と呟いた。傍に知盛と右馬允家村が呆然と座つて居るのを眺めながら……。
家村は船の底板は大穴を明けることになつた。二人は赤旗で胴體をくゝり合つて刺し違へる手配に決まつた。
「最後に臨んで何か素晴らしい御述懐を聞かせて下さい。」
流石に荒れ狂つて居た知盛も此の時ばかりは泌々人懐しさうに顔を見込んだ。
言はれるまゝに教盛は通盛の妻小宰相の最期を語つて聞かされるのであつた。折から宗盛が敵に救はれて長門の浦に揚がつたと家村の報告の聲がする。地團太踏んで知盛は口惜しがつた。死にきれなかつた。だから、刺し違へると見せかけて教盛だけを突いて自分は遁れ、改めて合掌しながら靜かに自刄したのである。
月が登つたと見えて、蒼白い光の條が射し込んで來た。
人影——それは安部重能に伴はれた宗盛である。知盛の死骸を見詰めて快さうにセヽラ笑ひをすると、船底に大音響が發したのである。底板が拔かれたのだ。烈しく船體は動搖する。狼狽てる隙に先づ重能は宗盛を振棄てゝ一散に遁げ出した。
「助けて呉れッ……助けて」
遁げ惑ふ宗盛を天井から手が伸びて引上げやうとしたのは源氏の伊勢三郎義盛である。
「しかとさうか？まさか知盛ではあるまいな。」
生死の境をウロついて居ながら、未だに疑ひ深く念を押して、只、生きて居たい一念で、身を任せて引摺上げられて行く……「わしは決して死なぬぞ。殺されても生きて見せるぞ」
嬉しさうに兩足を宙でピンピン跳ねながら、知盛の屍の上へ忌々さうにペッペッと唾を吐いた。（終）

配役

平宗盛	魁車
平知盛	壽三郎
陰陽博士 阿部晴延	橘三郎
平資盛	政治郎
阿部民部重能	德三郎

中座五月興行上演

義經千本櫻（すしやの場）

さしゑ　大塚克三

（說解）小松の内府重盛の一子維盛は平家沒落の後、詮議嚴しい都を避け、吉野山に程近い下市村の釣瓶鮓屋彌左衛門に慝はれ、名も彌助と改めて町人姿となつてゐます。

釣瓶すしやの娘お里は、肩襟、裾に前垂ほや〳〵と、緋鹿子の燃え立つやうな結綿して、甲斐々々しく立働いてゐます。彌助を維盛卿とは露知らず今宵に迫る女夫の契り、氣もそわ〳〵とときめく胸、其處へこの家の悴いがみの權太が這入つてくるのでお里は吃驚して、ようお出では心の内、揉手しながら挨拶する。權太は尖り聲で妹を奥へ追遣り、母親に逢ふと遽に聲も哀れ氣に、愁傷らしく、三十貫を欺し取り、戻りかけ門口へる父親彌左衛門の姿を見るので、權太は驚いて金を鮨の明桶に隱し奥へ逃げ込む、軈て彌左衛門は息せき切つて馳け退戻り、先刻椎の木の籔際で小金吾の死骸を見てふつと維盛の代首にと思付き、そ

れとも知らず斬つて來た首を鮨桶の中へ隱す。父親が奥へ這入ると、お里は最う夜も更けた故寢んだがよいと彌助に薦めるが、彌助は何やら思案顔お里は先へ寢たものゝ、氣にかゝるのは彌助の樣子。

維盛の內室若葉の內侍は六代の若君と共に夫維盛を尋ねて一夜の宿を求めにすしやの方へ訪れて計ずも維盛と邂逅して、小太は七轉八倒の苦しみのうちに、維盛の首と見せたは僞首で內侍と若君と見せたはお身替りの女房小せんと忰の善太であると物語り、始めて眞實を明します。一文笛を吹かせて、隱し置いた維盛妻子を呼び出して、一同涙の內に權太は落入る

配役

いがみの權太	延若
梶原平三	壽三郎
彌助實は三位中將維盛	我童
娘お里	扇雀

金吾の討死を語り、寄邊ない身を嘆くので、お里は屏風の中に始終を聞き、今更に焦れた身を恥しく泣き伏して詫び入ります。梶原樣がお越しとの村人の注進に吃驚して、維盛夫婦を上市村へ落してやります。樣子を聞いた、いがみの權太は勝手口より躍り出で、二人をせしめてくれんと取付くお里を突き退けて首の入つた桶を小脇に馳け出します。

梶原景時の後から權太は維盛の首と內侍若君を繩付にして差出します。梶原が引上げると彌左衛門は齒嚙をして憤り、刀引拔き樣に權太の脇腹へ突き差す。權

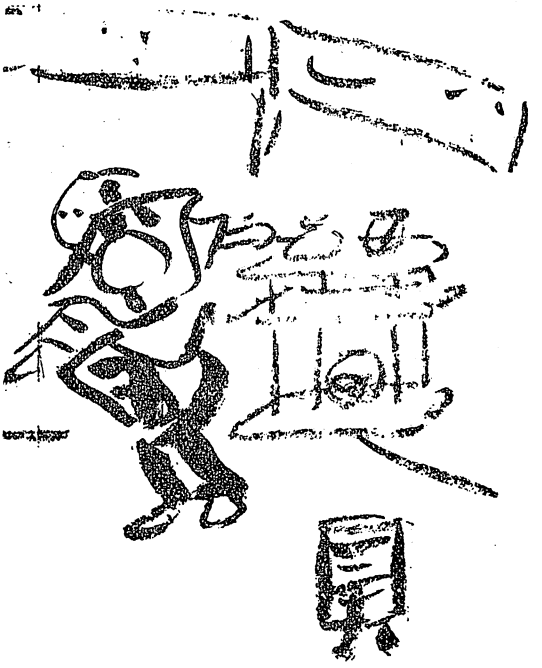
中座五月興行上演（食滿南北新作）

新曲 戀巴（あふむ石）

●竹本連中●長唄連中●常盤津連中●

さしゑ　食滿南北

役	配
太郎冠者	魁車
次郎冠者	長三郎
三郎吾	政治郎
娘卯月	扇雀
大名霞仙	



長　北斗をさゝふこがねにもまさりしたから、手づくりの、實に百藥の調子よく、外にたぐひもあら樂し、

竹　不動のさつくに冥罰を思ひしらせてやくざ者、手足叶はぬ其時は、秘藏に虫も月の夜の、雲にかゝらぬよい分別

常　まかり出しは、やぶさかのやしきづとめに朝夕の調度にまゝもかけ茶わん、すゝき尾花の道行に、あらぬや荻の上風に兩手を月の雲のかけ、

長　そも〳〵附子と申するものは、世にもふしぎの毒藥に、すきもる風に當てゝさへ、身は滅却の悲しみに、五體のこさぬ惡石にしかぬ美灰のたとへなり、

常　鼻の下さへ長き夜に、戀は曲者加茂山の岩根しまける我をかも、まつかまたぬか我いもの、卯月の手に手とりかねの

長　そも花なれば、梅櫻、にらにんにくもたとならぬ、いづれが牛か馬ぢややら、

竹〈許してたべさすりぬくる、さうはさせじと袖たもと、

常〈聞へぬぞへ卯月ごの、かの物しりの法師さへ、玉の盃そ
この事、こゞめ難きはかのまごひ、老ひも若きも無智有智
も、かねるところも泣きあかす、涙は戀のいのちぞと二人
はすそのもつれあふ、

長〈逢ふた其夜はときぐしの、かみも涙もはら〳〵と、かねに
櫻の散りかゝる、思ひはつげのくし〳〵と、結ふにいわれ
ぬ我くろかみの

竹〈さうはさせじとつきのけて、

常〈二人一しよにくらすならたとへ野たれて死のうとまゝよ冥
途の鬼も借家をかりの、九尺二間の裏だな住居、三途の川
のせんだくも、何のおぬしの手をかろものか、水仕のわざ
も水入らず、はなれはせじと寄り添へば、

竹〈エヽ畜生めとつきのけて、もうかうなつたら駈落ぢやと逃
げいだすを引とゞめ

常〈さうはならの葉この手と手とり、左へ行けば右へ引く

長〈愚痴ぢや、口説ぢや、痴話けんくわ、ヤツサモツサは犬さ
へくわぬ、

竹〈亂れ〳〵て力脚、互ひにエイヤと引く汐に、ドウ〳〵〳〵
と打よする、波にはあらぬ大潮に、

竹〈棚も屏風もガツタガタ

配役	
丹次郎	延若
仇吉	我童
米八	魁車
半次郎	長三郎
藤兵衛	壽三郎

（中座五月興行上演）

春色梅暦（三幕）

松鼻莊主人

爲永春水の麗筆になつて人情本では知らぬ人なき『梅暦』を、木村錦花氏が歌舞伎劇に書卸したものだ。默阿彌に『梅暦辰己園』といふのがあつて明治三年中村座で五代目菊五郎が演じた。また大正の初めには岡本綺堂氏が改作して明治座で上演した。處がこれは昨年七月東京歌舞伎座にて上演され丹次郎（羽左衛門）、藝者仇吉（梅幸）、同米八（宗十郎）、それに中車の藤兵衛、左團次の近常、友右衛門の左文太、訥子の半次郎の名優ぞろひで演じたといふ金箔付のものである。……こ通は余人におたのみして俺は見たまゝ屋の新店として勉強すべいか。

向島三圍さまといへばお馴染の舞臺である。石の大鳥居が

見えて掛茶屋の簾が川風に動いてゐやうといふ、堤の向ふは竹屋の渡しだ。風薫る五月も末、夕陽が赤い。その夜は梶原様のお抱へ屋敷でお茶會がある、お客も多いが藝人衆も澤山で中町の羽織は粒揃ひだし踊りの師匠、噺し家、義太夫、新内と中々大がゝりなものらしい。箱持の豐吉と喜助は供部屋でゆつくり飲めると喜んで急ぐ。茶店の娘のお仙が日がかげつたので簾をまきあげると唐琴屋の養子丹次郎が、男髷に結つた許嫁のお蝶と差向ひに座つてゐる。二人は久振りに逢つたのだ。お蝶はいまでは堀のお由のもとへ引取られて月に六齋銀座の宮芝へ節を直しに、常は小梅の師匠へと通つてゐる

お蝶は米八が丹次郎が家を出ると間もなく住替へをしたといふ。唐琴屋に居た時は許嫁とは言へ後見の鬼兵衛や番頭の松兵衛と同類になつて意地悪くするので二人はろく〳〵逢へなかつたが、これからは氣樂に逢へるこゝなつた。お蝶は毎日丹次郎の家へ行くといふのを丹次郎は家は本所中の郷だが獨身者の家へ娘が來ると近所で惡く言ふとさばいた。堤の向ふで『當りやすぜ』と船頭の聲がして藝者の米八と梅次が深川風の出衣裳で、太皷持の善孝と箱持の與助を連れてあがつて來た。

『あれ、丹さんぢやないか』

『おゝ、米八か』

丹次郎は驚いた。米八はお蝶の美しさに瞋恚を燃した。丹次郎はお蝶と遇然に出逢つたことを米八に辯解した。お蝶も遲れながらに挨拶をした。米八は廓のお蝶の家を出て今では深川で押しも押されもしない藝者の數に入つて丹次郎とは客の座敷へ出てゐる間も心放れぬ夫婦仲だと言つた。お蝶も負けてゐない。自分の家に居た藝者に二人も厄介になつては氣の毒だから私もこれから兄さんの手助けをすると言ふので米八は氣をいらだて足許から鳥が立つ如く家を持つ相談をもち出した。梅次は聞き兼ねて素人らしい妬心をいましめた。丹次郎はお蝶を送るべく船に乘らうと急ぐ足を米八はそつと抓

つた。彼女はすつかり上氣してゐた。丹次郎はあとを梅次に頼んで堤をおりて行く。

『お前もふだんの氣に似合はねえ。丹印にかゝること誠に愚痴だよ。てえげにしねえな』

梅次は呆れて言つた。四邊はうすく暮れてゐた。善孝に追はれて米八達は座敷に急いだ。

今戸待乳山の夕景色、隅田川を二つの屋形船が行き違つた丹次郎とお蝶を乘せた船へ年増藝者の政次は『何處へ』と聲をかけた。丹次郎はにつこり笑つて答えた。船首でじつと丹次郎を見まもつてゐるのは藝者の仇吉だ。

『ちよいとまの字、今の若旦那は……』

『よの字のレコだよ』

『そんならあれが……』

『おつとあぶねえよ』

『ほんとに好い男だねえ』

仇吉はうつとりと丹次郎に見惚れてしまつた。

深川の尾花屋は風雅な家根付の門に建仁寺垣がぐるりと圍んでゐて、垣越しに枝振りのいゝ松が見えてゐた。六月も末だといふので門前には床几が二三脚置かれてゐる。古鳥左文太が女中のお花に送り出された。そこへ唐琴屋の番頭がやつて來た。いつぞ預づた例の茶入を高價に買ひたいといふ人が出來たといふ。左文太は寶拂ひたいのは山々だが彼の殘月の茶入は畠山家の大切な重寶で種々詮議をしてゐるので迂濶には賣れないといふ。その茶入を盜まれた科で勘當受けた千葉の半次郎は松兵衛の元の主人丹次郎の家に引取られて内々茶入の詮議をしてゐるこも聞えてゐた。左文太は松兵衛に見當り次第にばらして失へと言つて別れて行く。その二人の立話を聞いてゐたのは藝者の小はまで、仇吉姐さんに報してやら

うと門の内へ急いだ。時の鐘が鳴る。唐琴屋の丹次郎が天紅の文を讀みながら出て來る。

『いつぞヤ俺が唐琴屋を追出されたその後で、あの米八も廓を抜け此深川へ住替して、俺を引取り世帶を持たせ日蔭の身とは言ひながら、不自由なく暮してゐるのはみんな彼奴の工面づく。その義理ある米八の目褄を忍んで仇吉と、斯うして出合ふも氣が咎める。いつそ今夜は歸らうか』

戻りつ行きつ、『ちよいと顔を見せて來やうか』と歩くなり小按摩と突當る。丹次郎は吃驚して飛退いた。

『あんま針い……』

尾花屋の奥座敷、庭には風流な石の手水鉢や石燈籠があり棟つゞきに青簾のおりた中二階が見える。女中のお花、お金お清の三人が丹次郎を中にして米八と仇吉の三角戀愛のことで氣を揉んでゐる。清元の師匠のお浚ひが聞えて來る。

〈大江戸の意氣と張とこの中町を、三筋の糸の世渡りに、水際辰己風俗は、姿涼しく氣も高く粹な素顔の夏の富士。

仇吉が緣傳ひに出て來る。丹次郎を待つ間ももぢかしく懷中鏡を出して燭臺の灯で鬢をかきあげたりする。そこへ庭先から丹次郎が跡先を見廻して出て來る。

『おい、あの字、あの字』

『おや丹さん。何時まで待たして置くんだよ』

うすく雨の音が聞えて來た。仇吉は今夜丹次郎の家に厄介になつてゐる半次郎が大切な茶入を失くして勘當されたことを聞いたといふ。その半次郎の親御には丹次郎わ昔世話になつたことがある。此の四月出入先の畠山樣から茶入を預づて歸る途中永代橋の上で何者かに引攫はれたので事がむづかしくなり、親類には千葉の藤兵衛といふ立派な人もあるが表向きにかぱはれないので丹次郎の家に居るが、茶入を探し出して目出度歸參させたいと丹次郎も心配してゐるのだ。仇吉はその茶入の所在を知つてゐるといふ。それを取戻すのは昔か

らの紋切型で男を欺す色仕掛よりない。何事もお前の爲だと仇吉は散々に丹次郎を焦らした上で決心した。そこへ女中が酒肴を運んで來た。仇吉は女中のお金に囁いた。二人はいと圓滿に盃を重ねる。お金は紙に包んだ羽織を持つて來た。約束した羽織だとて仇吉は丹次郎に着せる。梅の紋がよく染つてゐた。清元ののぐがいよ〳〵冴えて美しい。米八が緣づたひに出て來たのを仇吉は見つけて驚いた。雨もやんだのでまたの逢瀨を約して仇吉は襖の奥へ丹次郎は庭先へ降りるとそこへ米八が現はれた。

『もし丹さん。お前何しに此處へ來たの』

『え、なに、ちよいとその……人に誘はれて來たのよ』

『誘つた人と云ふのは、誰だえ。おや、この羽織は』

と米八は無理に丹次郎の羽織をぬがせて飛石の上へ投つけて下駄で踏みつけた。丹次郎は氣色を變えて米八を緣に引据へたが、米八は自分の顏へなすられた泥から見れば仇吉の羽織を泥にしても埋らないと怒つた。丹次郎は櫻川の由次郎から借つたものだと言つたが駄目だ。奥で聞いてゐた仇吉は堪えかねて襖を開けて出て來た。丹次郎は驚いて庭口から逃げ出した。

『揉めた揚句は意地と意地。離れ難ない兼言の積る仇吉丹次郎と命をかけた二人の仲。お氣の毒だが米八さん、ごうでお前は無い緣だと思ひ切つて貰ひたい』

と言ふ。米八は口惜がつて盜み食ひを慎めといふが仇吉は盜んだのでない。亭主でなく色となりや五分と五分、二人は尙も羽織を中に破る、破らさぬと爭つた。そこへ千葉の藤兵衛が出て來た。

『おい仇吉に米八。出過ぎた野郎と思ふかも知れねえが、お互に知らねえ顏でもなし、まあ此喧嘩は俺にくんねえ』

だが女の二人はこう恥をかいては土地に居られないとわめく。では藤兵藤の顏を潰す氣かと言はれてみればそれでもと言ひかねた。藤兵衛は喧嘩の種の羽織を預ることにした。では仲直りに一杯と言つたが二人は斷つてなほも睨み合つた。

丹次郎の家は川深中裏にある。床の間には短冊を挾んだ細軸をかけ花が活けてある。七月の初めだといふので青簾風鈴、鉢植、團扇と夏らしい。小机の上に硯箱と發句の卷をのせてある。太皷持由次郎が訪ねて來たが誰も居ないので机の上の發句をひろげて讀んでゐると、奥から千葉半次郎が出て來た。殘月の茶入の詮議に心を痛めてゐるので久しく廓へ行かぬから此糸が恨んでゐやうと聞く。そこへ丹次郎の許嫁のお蝶が若衆髷を結つて燕口を持つて這入つて來る。もう丹次

郎と夫婦になつてもいゝ頃だとからかはれて赫くなる。向ふより船頭伊之助が讀賣權兵衛の胸倉を取つて引張つて來る。その後から湯歸りの丹次郎が出て來る。『これは此度深川に色を爭ふ羽織衆が近年稀なる大喧嘩、事の次第は四文で解る』と讀賣を賣つてゐたのを伊之助が口止めしやうとしての爭ひと解つて仲裁する。お蝶は何も知らなかつた。伊之助と由次郎が連立つて歸つて行くと半次郎も永代橋際の道具屋まで出掛けるといふ。殘月の茶入を奪ひ取られてより家は勘當お屋敷は不首尾、本田樣のお情けで百日の間の猶豫を願つて詮議してゐるが手に入らねば死ぬより外はないといつて出て行く。

あとは水入らずの二人である米八のことは承知してゐるが、又ぞろ仇吉と浮氣して私に苦勞をかける氣かとお蝶は涙ぐんだ。着物の綻びを縫つてくれと奥へ二人が這入つた後へ、仇吉が藝者の政次と出て來た。深川中を讀賣にされて口惜しいと仇吉はわめいた。奥より出て來た丹次郎を見るなり口惜し泣きに泣いた。藤兵衛の扱ひで羽織の件は奇麗にすんだやうで濟んでゐなかつた。まして讀賣に出ては意氣地を張らねばならない。そこで丹次郎に料見を定めて欲しいと言ふ。それに仇吉は例の茶入を手に入れたさに壽命を縮める思ひをしてゐる。その手に入るのも今夜だ。その代りに仇吉を見捨てないことはもとより、丹次郎の二の腕に米八命と入れ黑子がしてあるのをこゝで消してくれと簪を拔いて火鉢に差込んだ。丹次郎は腕を差出した。仇吉は火鉢の簪を拔いて入黑子を燒いた。それで安心して仇吉は茶入のことを引受けて政次と共に歸つて行く。

入違つて米八が訪ねて來た。仇吉が引返して來たのだとのみ思つて机に對つてゐた丹次郎は愚痴がつのり口說が過ぎる。米八は丹次郎の無情を責めた。丹次郎は出入の多い尾花屋で羽織をはがれて踏みつけられても默つてゐたのに米八に嫌味辛味を言はれては困る。いつそ切れて失ほふときつぱり言つた米八は泣いた。丹次郎には仇吉もありお蝶もあるが米八は一

人法師となる。『私は覺悟を極めた』と出て行かうとするので奥よりお蝶は走つて出て止めた。米八はお蝶を押退けて行かうとするのを丹次郎も宥めた。米八は死ぬと叫ぶ。そこへ本田次郎近常が笠を深くしてたづねて來た。丹次郎はお歷々の訪問に恐縮した。お家の重寶殘月の茶入を紛失させた半次郎を重き仕置になるべき處を近常の計ひで百日の猶豫を願つて詮議を命じておいたのに、聞けば詮議を外にして吉原の遊女此糸の許へ通ひつめ不身持が募るといふ。慈悲も情もこれまで直ぐ屋敷へ引立てゝ法を行ふと立腹の體である。丹次郎は他人ごとならず恐縮して詫び入つた。百日の殘る日數も僅かであるから一度逢ひたいといふので丹次郎は永代橋の道具屋へと連れ立つて行く。それを見送つてしめたといふ思入で政次が這入つて來た。お蝶が出迎へると丹次郎の莨入をくれといふ。これから山の松本で丹次郎が仇吉と逢ふべく急いだと政次がいふのを聞いてお蝶は齒をくひしめた。そこへ米八が飛び出した。これから松本で二人並べておいて恨みを言ふとお蝶の止るのを振切つて出て行くのを、お蝶も追つて走つた

『へん、馬鹿め、馬鹿やあい』

政次は見送つて笑ひこけた。

深川の松本の離座敷の沓ぬぎの上には仇吉の駒下駄がぬいである。米八とお蝶とが葭戸の下へ窺ひ寄つた。お蝶の止めるのを振切つて米八が葭戸を手荒く明けると中には古鳥左文太が燭臺の下で仇吉に酌をさしてちび〳〵とやつてゐる。お蝶と米八は驚いた。丹次郎と思つてゐたのがこの仕末だ。左文太は憤慨した。他人の座敷へ挨拶もなしに踏込んでその儘では濟まされないと勢ひ込んだ。仇吉もその後に續いて狐にでも化かされたのかと嘲笑つた。米八と聞いて左文太は今更に美しさに恍惚となつた。仇吉はその浮氣を責めて丹次郎といふ亭主のあることを、その男の姿が些と見えないと狂人のやうに探し歩くのが此の女の病だと言ふ。米八は一層丹次郎を出してくれと仇吉に迫つた。仇吉は知らぬといふ。お蝶は政次の告げ口でこうして探して來たと言つてゐる處へ垣の影から政次が現れてそんな事は言つた覺えがないと言ふ。左文太は丹次郎の來て居らぬことを駄目を押して聞いた。素町人のくせに武士に楯ついて茶入の詮議をする奴見つけ次第に打つ放してくれると肩を怒らし、酒席へ亂入した詫に土に手を突いて謝罪せよと命じた。米八は左文太には詫びやうが仇吉にはいやだと言ふ。左文太は武士に對つて無禮な奴と刀に手をかけた。お蝶は驚いてその手にすがりつき米八に詫びよと勸めたが、義理と情の深川、譬へ命を取られても辰巳藝者の意地を見せると言つて米八は聞かない。そこへ千葉の藤兵衛が

出て來て仲裁したが左文太はごうしても聞かない。藤兵衛は仇吉に米八を此處へ釣よせ恥を搔した上で及物三味までしやうとは狂言が惡ぐいと言ふ。米八の代りにこの藤兵衛をすつぱり遣つてくれと羽織をぬいだ。深川佐賀町で人に知られた千葉藤兵衛、

『河岸へ上げた材木のやうに萬更丸太ん棒でもごぜえません木口がいいか惡いかは鉋を當てゝ見りや解る事だ』

と座り込んだ。左文太は刀を振り上げた。米八は自分のために藤兵衛にもしもの事があつてはと止める。藤兵衛は從兄弟同士の半次郎が種々と米八に世話になつてゐるので見殺しには出來ない。米八は左文太はもとより仇吉にも意地を捨てて詫びるといふ。仇吉は米八を緣端へ呼び寄せた。

『お前は此間の晩、あの尾花屋で能くも私に恥をかゝしておくれだね。私は生帳面な質だから、下駄のお禮は下駄で返すよ』

と沓ぬぎにある自分の下駄で米八の頭を打つた。

『私の頭を駒下駄で……』

『あい、飛んだ敵役の臺詞だが、ぶつたが如何した、なんとしたえ』

米八は泣いた。いつそと落ちた下駄で打ち返そうかとも思つた。お蝶はあまりに無法な折檻で見てゐて泣いた。藤兵衛はお蝶に米八を介抱さして連れて歸らす。後では仇吉が胸が晴れたと左文太や政次と笑ひ合つた。左文太は仇吉の滿足を見て常々の野望を滿たそうといふ。仇吉は賴んだ品をと床の間に置いてある服紗包みの箱を出して殘月の茶入かと喜んだ。此時藤兵衛にこもなはれて半次郎が頰かぶり姿に一本差して現はれた。そして左文太に呼びかけた。左文太は半次郎を見て驚いた。

『や。其の方は』

『忘れもせぬ今年の四月、畠山樣のお屋敷から殘月の茶入を預つて、日暮れて歸る永代橋、すれ違ふたる曲者は』

夕闇ながら面體格好をよく見覺えてゐた。左文太も最うこれまでと斬つてかゝるのを、半次郎も刀を拔いて渡り合ひ、藤兵衛もそれに加勢した。

『察しの通り茶入の盜人、覺悟しろ』

と切つてかゝるのを左文太は隙を見て遁げ出すのを二人は

追つて行く。仇吉は殘月の茶入を箱から出して懷中へと入れた。

洲崎の土堤である。海を見晴した夜景だ。漁船の灯が二つ三つ見える。空には三日月が出てゐて浪の音が靜かに聞える

船頭伊之助が駈けて來た。『丹さん、丹さん』と低聲で呼ぶと石の置場の陰から丹次郎が現はれた。伊之助は唐琴屋の番頭松兵衛を小池へ行つて一杯飲ませ酒で殺して泥を吐かせ、左文太の手にある茶入は僞物で本物は松兵衛が持つてゐると解つたので、百兩で買ひ手があると言つて此處へ誘ひ出したといふ。丹次郎は大喜びで早く半次郎にこの樣子を報してくれと伊之助を立去らした。暫くして料理屋の提灯をぶらさげて松兵衛が酒に醉つて出て來た。伊之助を探してゐるので丹次郎は手拭で頰冠りをして出た。松兵衛は買ひ手の客だと信じて茶入を懷中より出して渡した。確かに殘月の茶入かと駄目を押してから、引替の金百兩は十日ほど待つてくれと言つた。松兵衛は驚いた。見ず知らずの人にと困る鼻先へ、

『いゝや、見ず知らずとは言はれまい。松兵衛、久しく逢はなかつたな』

と丹次郎は手拭をとつた顏を突き出した。

『そういふお前は、やあ若旦那か……』

と酒の醉ひの一時に醒める思ひした。だが前は主從でも今は他人である。此方へ返せ、いや返さぬ、取返さねえでおくものかと棒を取つて打つてかゝるのを丹次郎は無手であしらつて逃げて廻つた。何を言つても松兵衛は酒を飲んでゐる。足許があぶない。とう〳〵尻持をついた勢で後へ逆樣に海へ落込んでしまつた。そこへ櫻川由次郎が駈つけて松本での仇吉と米八の喧嘩を報して來た。それは大變だと丹次郎は松本へ由次郎は米八の行衛を探すべく急いだ。

深川仲町の裏川岸である。柳の立木が處々にある。川を越して向ふ岸の灯が見える。雨が降つてゐる。仇吉は松本と書いた番傘をさして立ち、米八はその腰をこらへてきつときまつた見得である。米八は仕返しに仇吉の歸りを待つてゐた。そればかりか左文太から預つた殘月の茶入が貰ひたさもある仇吉は渡されないと言ふ。意地だ、命にかへてもと米八は合口を拔いて切つてかゝるのを仇吉は傘でさゝえて立廻つた。月が出た。丹次郎は茶入を持つて走つて來て二人の仲に這入る。

『喧嘩のもとは茶入の一條、然しそれは無駄骨だ。仇吉の持つてゐる茶入といふはまつかな僞せ物、正眞正銘の茶入はこれこゝにある』

と茶入の箱を見せた。仇吉は計る〳〵と思つて計られたのが口惜しいと自分のもつてゐた茶入を大地に叩きつけた。

『命にかけての爭ひも怪我のないのが互ひの仕合せ。仇吉さんの心も讓めた。丹さんに盡す誠は私と一つ』

と米八は始めて理解した。

『米八さん。考へて見ると私が惡かつたねえ』

と仇吉も後悔した。

『そう二人が打解けてくれりや、俺も大安心と云ふもの、おいこの恩は一生忘れねえぜ』

と丹次郎は二人の手を執つた。そこへ千葉の藤兵衛と半次郎とが、古鳥左文太を討とめたと言つて來た。丹次郎は茶入を半次郎に渡した。

『これぞ正しく殘月の茶入、丹次郎、かたじけないぞ』

と半次郎が喜べば丹次郎も、

『私もこれで漸う御恩返しが出來るといふもの、こんな嬉しい事はございません』

と喜んだ。仇吉も米八も祝言を述べた。

『三方四方が丸く納まり、いや、こんな目出度い事はない』

藤兵衛の言葉にみなの顏が美しく晴れて見えた。

春色梅暦（あふむ石）

米八　魁車
藤兵衛　壽三郎
左文太　橘三郎

藤兵衛。口幅つたい事を云ふやうだが、私も深川佐賀町では人に知られた千葉の藤兵衛。河岸へ上げた材木のやうに、萬更丸太ん棒でもごぜえません。木口が好いか惡いかは、鉋を當てゝ見りや解る事だ。此の頃は八幡樣の境内に、お神樂堂が出來たと云ふから、劍の舞でもテンテコ舞でも、景氣をつけてお遣んなせぇまし。

左文太。能くべラ〳〵こしやべる奴だ。千葉の藤兵衛でも木塲の藤兵衛でも、望みとあらば鉋をあてゝ、荒つ削りにしてやらうか。

米八。まあ〳〵お待ち下さいまし。私故に千葉の旦那に、もしもの事が有りましては……。

藤兵衛。はて好いから俺に任して置きねえ。

立體的史劇として

永田衡吉

私の『平家の人々』（最後の人々改題）は、昨年八月の女性に載せたもので、これは且て中央公論に發表した『維盛』の前篇とも云ふべく、維盛以外の平家の人々の最後を描いて見た。

從來の史劇といふものが總て客觀的で、繪卷を繰展げたやうな平面的なものが多いので私はこの『平家の人々』を飽くまで主觀的に立體的に取扱つて見た。その爲マンネリズムに墮してゐるとの非難もあるが、私として一意藝術に對して熱と力を注いだ迄である。

平家の一族は永い間の榮華の夢に馴らされて、全く自己といふものを沒却してゐた。只月に花に生活の流れに添つて、自分を顧みることも敢てしなかつたものが、壇の浦に於て死の怖しい姿を見せつけられて、初めて自分に對する眼が開かれた。そして彼等が平常想像したこともない怖しい死から遁れやうと狂氣の如く焦つた。そして骨肉相食むで迄も生きんとする、凄慘な平家一族の末路はこの傷ましい必然的の破滅に際しても、一握の藁に縋つて尙生きんとする煩惱を私は諷刺したつもりだ。劇全體の効果としては何うかと思ふが、この戯曲は悲劇であると共に、一面喜劇としての要素を含ませて見た。

この度の演出は田中總一郎氏が凡てやつて下さることになつた。劇作家として演出家として、既に定評ある氏を煩したことは、私としては望外の仕合せである。

上演に際してこの蕪雜な戯曲の外科的手術は凡て田中氏のメスに一任した故、相當纏まつた效果を見ることが出來るだらうと思ふ。

出演俳優は魁車壽三郎なぞの大阪の新人諸氏が、演じられることも、一段と光彩を添へて呉れることゝ信ずる。

佛教文明と天平時代

大森痴雪

天平文化は一面佛教文明の全盛時代とも云ふべきで、因果律や戒律淨行などが、隨分喧ましく論じられたものだ。

廣嗣を筑紫に誅して以來、身は佛門にありながら、國政を擅にした玄昉は、政權を盾に、色々な惡事を働いた、彼は文字通りの破戒僧で、さうした惡困の惡果として、後年筑紫國分寺の開眼に導師として下向し、その歸途遂に難波の春米寺で、佛火の柱が天から下つて、一命を落したといふ、さうした傳說中にも、當時の宗教的な思潮がうかゞはれる。

又、玄昉に限らず常に破倫惡政の結果、人心は爲政者から離れ、社會は漸やく混亂の狀態に陷入らんとする時、政府當事者達が唯一の策としたのは大佛建立、國分寺開眼等々、何れも素晴しく大規模な宗教的催し？をして、人心の緩和と鎭壓につとめてゐた事である。

今一つ、天平時代文化考證に就いて忘れてならない事は、紀元一千二百十二年佛教傳來を始め、唐の文物輸入から遣唐使の新制、唐留學等を經て、天平文化の完成を見た千二百餘年前の昔と、明治の泰西文化輸入期から大正の過渡期を過ぎて、昭和の今日に於て、社會諸般のモダーン振りと、何うやら日本化された現在と、社會風敎上多くの共通を見出すといふ事である。殊に面白いのは、天平時代の男女關係で、現代のそれと思想內容は勿論形式に於ても酷似してゐるといふ事だ。私はこの劇に於て二人の男性の間を彷徨する一女性の心理解剖を試みた、二人の男性とは即ち僧の玄昉と、今一人は玄昉よりは少し後の時代の話であるが、當時の怪盜として有名な傳說中の人物石川沙彌麿である、この二の事件を、一ト纒として、時代の裏面から華やかな天平文化をのぞかんとしたものだ。朝日新聞社主催の「天平文化宣揚會」の趣旨から云へば、斯うした惡の場面の展開は當を得ないかも知れないが、至上の文化の行はれる社會の半面には、常に最も醜惡なるものゝ育まれるといふ事も閑却出來ない事實だと思つたから……。

いがみの權太

川尻清潭

延若子の『すしや』は、東京の舞臺で再三見た事があります大體に於て鴈治郎子の所演と大同小異であるやうに聞いて居ますが、私はまだ鴈治郎子の『すしや』を見た事がありませんから、此段は判然と申兼ますが、隨所は頗る細心な技巧があつてそれが時に狂言の底を割り過ぎるやうに思ひましたけれど、今回は更に工夫を凝した點もありませうし、加ふるに延若子の藝の達者で、一倍完全なものに磨き上げられて、いよ〳〵好評を博し得る物と成つて現はれるであらう事を信じます。

就ては『權太の型』のお求めに對し、東京の舞臺で手本さされて居る、五代目尾上菊五郎所演の『すしや』の手順の畧型を述べて、好劇家の比較研究資料に供しますと同時に、その批判は一切讀者諸氏にお任せ申します。

右五代目菊五郎の型は、五代目松本幸四郎の型を寫して、更に自家の工夫を加へた代物で、大體に於て幸四郎の型と稱すべきものなのです、但し幸四郎は前場の『木の實』から通して、女物に紫縮緬の肩入の着物を着たものですが、菊五郎の好みは、肩入があつては凄味が無くなると云つて、單に銘仙の女物を着ましたのと、又『すしや』の場へは茶辨慶の着附に小辨慶の下馬附で出ます。三尺は藍地の十玉盤珠つなぎ、白の晒の腹卷に褌、履物は冷飯草履、持物は維盛の繪姿と豆絞りの手拭、かます莨入にナタ豆煙管と一文笛を入れた物を遣ひます、髪は言ふ迄もなくムシリですが、此ムシリの毛の寸が長からず短からずと云ふ誂です。

初め『此家の惣領哇の權太』のチョボで、花道の揚幕から左の裾を高く捲り上げ、右の手は袖の中でヤゾウを拵へた形ち、豆絞りの手拭を左の肩に掛けて出て來て、すぐに本舞臺へ入り手拭を右の肩に掛替へ、世話木戸の格子を開けると、彌助とお里が寄添つて居るので、鳴物の止りと共にボンと格子を締めて

一寸門口を離れ、『オッな眞似をして居やアがるな』と云ふやうな捨白を云ひ、改めて咳拂ひをして足音を立てゝ門口へ來て格子を開ける、彌助とお里が離れる、權太は彌助を呼び、『そつちを向いて見せろ』と云つて後ろ向きに立たせて置き、其間に內懷中から維盛の人相書を取出して見比べる（六代目菊五郎は繪姿の書いてある卷物を使用する）、其處で彌助が振向く目が、權太の目と見合ふ事に成つて、權太は手早く人相書きを隱し乍ら疊んで元の懷中へ納め乍ら、テレ隱しに『いゝ男だなア』と云つて格子の中へ入り、親仁の留守を確かめてから、始めて草履を脫いで疊の方へ上り、立つた儘の姿で居て、お袋に逢ひたいから呼んで呉れと賴み、『金のありさうな旦那が來たと云へ』と惡智惠を附ける、お里と彌助が上下から互ひに手の指を差し合つて仕方話をする、其指が兩方から權太の肩へ當るので、權太が吃驚して、『えゝ何をしやアがるのだ、早く行かねえか』と叱るので、彌助が正面の暖簾口へ入る、お里も續いて行きかけて、『兄さんど、、、、』と云つて入る、權太は捨白を云ひ乍ら二重の上にある黑塗の盆の上の土瓶を取り、同じ盆に乘つて居る茶碗へ茶を注いで一ト口飲んで平舞臺へ置く、正面の暖簾口から母親が出て二重の上に住ひ、權太を戒める臺詞があつて、權太が『無心では御座りませぬ、お暇乞ひに參りました』と、溜息を吐き、四つ折にシゴイた手拭を前へ置いて、打しほれてお辭儀をすると、母親がそれを心配して、『そりや何處へ、どうした譯で、何しに行く』と尋ねる、チョボの『根問では親のだまされ小口、サア』で權太は兩手をポンと打ち、『してやつた』で右の手の示指と共に首を母の方に向け、『と目をしばたゝき』で其右の手で前に置いてある手拭を取り、これを兩手を並べて手の甲を見物の方へ見せた形で持ち、首を一つ廻してシャクリ泣いて手拭で涙を拭き、年貢の銀を盜み取られたと云ふ臺詞を殊勝らしく言つて、チョボの『しやくり上げても』で右の手で右の膝を二度ツメリ、それでも涙が出て來ないのに弱り、『出ぬ涙』で右の示指で自分の目を指し、その手で頰ぺたをポンと打つて、困つた思入れにグタリとなだれ、『叺神をば顏に當て』で左の袖で顏を隱し、『鼻が邪魔して目の緣へ、屆かぬ舌ぞ恨めしき』で、前方に置いてある茶碗に殘つた茶を、右の手で目の緣へなすり付けて濡らし、其顏を母親の方へ見せ、右の示指で目を指して、『おつかさん此通り』云々と、改めて再び以前の形の如くに手拭を持ち、首をシャクつて大聲を上げて泣き落し、『どうで死なねばなりませぬ』の臺詞を言ひ、母親が『コリャやい』と云ふのに冠せて『ハイ／／』と大きく受け、母親が金をやらうと云ふ件に成つて、チョボの『甘い錠さへ明け兼る』で、母が戶棚を明けて小簞笥の抽出しの明かぬ科を、權太が『ツイこち／／でよう御座ります』と、貰入からナタ豆煙管を取出して、簞笥の傍へ行き手早くコチ／／と叩いて錠を明け、『おつかさん、明きました』を子供に返つて言ひ、其錠を左

の手で母親に渡すので、母親が『器用な子ぢやなア』と褒めるのに對してお辭儀をする、母親が銀の入物を心配するので、權太は懷中から以前の手拭を出して廣げ、此中へ銀をつゝみ、急いで立上り二重を下り乍ら舌を出し、門口へ行つて草履を突掛け、表へ出かけて向ふから父彌左衛門の歸つて來るのを見た思入、慌しふためいて一つ廻り、二重へ上つて銀を天井へ隱さうとする科なぎあり、又銀の入つて居る手拭包を、股へくぐらせる事二度程あつて、二重の端に並べてあるすし桶へ目をつけ蓋を明けて、手拭を見物の方へ向け、中の銀をすし桶の中へ入れて蓋をして、其手拭を右の肩に掛け、母親の耳に口を寄せてボシヤ〳〵と私語き、又手拭を左の肩に掛け替へ、尻を捲り上げて後ぢさりに絃に合せて暖簾口へ入るのです、此暖簾は後見が上げる事に成つて居ます、これで權太の前段が濟むのです。

二度目は、チョボの『是非なく其場を落玉ふ、御運の程ぞ危ふけれ』で、後見が出て平舞臺に敷てある疊蓆と門口の世話木戸を片付けるのですが、これを手際よく手早くする爲に、特に弟子の音五郎と斧藏が此役目を引受けて、笑で舞臺の氣を替へると云ふ誂でした、二度目の權太の拵へは白地に黒の辨慶縞の浴衣を着て出るのですが、勤める人の註文に依つて、前に針箱を出して其上に此浴衣を乘せて置き、初めの權太の入りにこれを抱へて行く仕込みなぎを見せるのもありますが、一切さう云ふ理屈は抜きにした歌舞伎芝居として取扱つて居るのです、さうして此辨慶の角が竪一寸二分、横一寸と云ふ好みで、つまり眞四角では權太が巾つたくなるので、それをすらりと見せる工夫で、三尺帶も前の木の實の場は二重廻りに締め、『すしや』の後に一重廻りに締める定めで、且つ捻り結びでなく時代に箱結びにするのが幸四郎の型です、又豆絞りの鉢巻も、ねぢりを餘り堅くなく、眉間のまん中で結んで先きを稍左曲げに立てる、これは毎日新らしい一反手拭を使用して、結んでから鋏で切つたもので、此手拭の結び方の巧者であつたのが、五代目菊五郎附の男衆の留爺やで、菊五郎はいつでも權太を勤める度毎に、留爺やに結ばせて留爺やに切らせて居ました。

チョボの『樣子を聞たか唯の權太、勝手口より踊出で』で、後見が正面の暖簾の左側を明ける、權太が半身を現はして其暖簾を持つ、これは臺の刷毛先きを亂さない爲に斯うするのです『聞いた〳〵』の臺詞を言つて二重の鼻まで出て、『尻引からげ駈出す』で高く飛んで平舞臺へ音のしないやうに下りて束に立ち、七三に端折つた尻からげの所へ手をかけて見得をする、お里がとめるのを『大金になる仕事、邪魔立をしやアがるな』と右の肌をぬぎ、尙もお里が取縋るのを一つ二つと拂つて、三つ目で振返つてポント蹴り、其儘キリ〳〵と廻つて、蹴つた浮き足を無駄にせずに踏出して花道へ行き、チョボの『行かんとせしが』で一つおこついて、銀の事を思出した心に、手を一つポンと打つて、其兩手が兩方へ下り、足を箱にしてナンバンに調子

を取つて、絃のツン〳〵〳〵に合せて本舞臺へ戻つて二重へ上り、すし桶の後ろに立つて、先づ初め銀の入つて居る桶を持つて目方を引いて見て、次に首の入つて居る桶を持つて目方を引いて見て、重いのでそれを持ち、桶を取つた空地から平舞臺へポンと下り、桶を右へ抱えて花道まで行き、幸四郎を當込んだ反り身の大見得、右の足から蹴るやうに踏出して絃に合せて揚幕へ入るのです。

三度目の出が、揚幕の中で權太が、『内侍六代維盛彌助、唯の權太が生捕つた』と聲を掛けて、左の小脇に以前のすし桶を抱え、女房と小せんと悴の善太を、内侍六代に仕立てた繩付の繩を右手に取つて右の片肌膜ぎで立出で、本舞臺の下手まで來て『下に居ろ』と引据え、下手の前へ來てすし桶を置き、右の手で鉢巻の先きを拔いて解き、これを四つ折にして懷中へ入れ肌を入れ中腰に股を開いた形ちで、膝頭へ手を乘せて控へ『親父の賣僧が熊野浦から連れて歸り、道にて天窓を剃りこぼち、彌助と云つて青二才、此間もほてくろしい智許鑿（此所特に幸四郎の聲色で云ふ）、憎くさも憎くし生捕つて面耻、とは存じましたが、思ひの外に手强い奴、村の者の手を借りて、首にして持つて參りました、御實驗をなすつて下せえやし』と、すし桶の下へ左手を掛け、右手で桶の手を持つて梶原の前へ差出して置き、跡ずさりで元の位置へ戻る、梶原が『内侍六代生捕つたな』と云ふ、權太は輕く『へイ』、又梶原が『面を上げい』と云ふので權太『へーい』と立上り、着物の襟などを直して、小せんと善太の後ろの眞ん中へ立ち、上に居る小せんに『面上げろ』と云ひ、次に下に居る善太に『面上げろ』と云ひ、一寸間を持つて、右の手で善太の髷を掴み、左の手を尻端折のうしろへ形容に掛けて、左足を伸して小せんの顎に掛け、右兩人の顏を梶原に見せる形ちで極る、梶原が『ハテよい器量』と云ふ時に、ニューと足を下げ手を離して、其儘の位置に中腰の股を開いた形ちで控へ、兩手を前で重ね合せて居る、梶原が『褒美には親彌左衛門奴が命赦してくれう』と云ふのに冠せ、權太が『アモシ〳〵』と云ひ乍らツカ〳〵と前へ出て、『親の命位を赦して貰はうと、此働きは致しません、矢つ張俺アレコ』と云ひ、指で丸を作つて見せ、『の方がよろしう御座います』と云ふ、梶原が『褒美呉れう』で、臺へ乘せた陣羽織を家來に運ばせる、權太はこれを手に取つて見て、チョボの『脫いで渡せば佛頂面』で、『こりやア何でえ〳〵』と引繰返して見て不平の科、梶原が『金銀と鈎替囑託の合紋』と云ふのを聞いて、權太『成程當世衒が流行に依つて、二重取をさせねえ魂膽、お上樣と云ふものは、よくしたもんで御座えますねえ○繩付は』と時代に言つて『お渡し申ます』と世話に碎けて言ふ、チョボの『繩付渡せば受取つて』で、權太は陣羽織の臺を後ろへ捌き、羽織だけを左に抱えて上手へ來る、梶原が立つて下手へ行かけ、『それハ出い』と云ふ、權太は陣羽織を前へ置き、膝を舞臺へ突いて手を

重ねた中腰の形ちに成る、梶原が『面を上げい』と云ふので、梶原は兩手を膝頭まで下げて、首だけを上へ上げて顔を見せる梶原が『彌左衛門一家の奴等、暫く汝に預け置くぞ』と云ふのを受けて、權太『お氣遣えなせぇますな、貧乏ゆるぎも』と手で鼻をスヽリ『さすこッちやァ御座えやせん』を幸四郎張りで云ふ、梶原が『こいつ小氣味のよい奴だ』と云つて、家來引連れて一同花道へ入る、跡絃の空二を打たせて縄付を見送り、『褒美の銀を忘れちやァいけませんぜ、お頼み申します』と立上つて、最後の言葉を憂ひで言ふ、彌左衛門が刀を拔いて後ろから右の肩先を切付けるので、權太は持つて居る陣羽織を落し、グルリと一つ廻る時に肌をぬぎ、今度は脇腹を突かれて仰向けに倒れ、爰で髪を捌いて糊紅を腹へ塗り、『さつさん〳〵〳〵』で起上り、『コレ親父樣』と云ふのが合方の變り、母親が正面の暖簾を切つて腹を卷いてやる事があつて、其跡の嘉詞の續きで『ハツと思へば是幸ひ』で合方の調子を高くする事、『矢づ張お前の仕込みの首』で彌左衛門の肩を叩く事、『彌助の面』と云ひ掛けて『あなたのお顔に生寫し』と云ふ所、『女房小せんが帆を連れ親御の勘當古主へ忠義、何狼狽る事があらう、已れと善太をコレ斯うと、手を廻すれば悴めも、嬶樣と一緒にと共に廻して縛り縄、掛けても〳〵手がはづれ、結んだ縄もしやうほどけ』云々の件、『可愛や不便や女房も、わつと一聲其時に、ち、ち、ち、血を吐きました』の所等、すべて言廻しに人情を含める工夫がありました、最後の落入は兩手を合せて拜む形ち、母親がそれを後ろから抱く模樣で幕と云ふのが、大畧の順序です。

尙言落しましたが『袖より出す一文笛』の所は、延若子の權太は、忰善太の巾着の中から一文笛を取出し、自分で息の切れ〳〵に吹くのが一つの當て所に成つて居ますが、幸四郎型では權太が懷中のかます莨入を出して、母親に笛を吹かせると云ふ行き方で、是は前場の『木の實』の場で、善太が一文笛を持つて遊んで居るのを、權太が取上げて莨入の中へ入れ、其時賽粒を出してバクチを敎へる件が仕込みに成つて居るのです。

又小せんと善太を內侍六代に仕立てゝ來る所も、小せんをする俳優の心得として、決して小せんで見せやうとしては成らぬどこまでも內侍の腹で勤めるのだと申渡す事で、小せんの引込みに一寸振向いてよろける仕科位が關の山で、權太の方でも小せんの引込みを見送るのに、膝から手を外したり、泣顔をしたりする事はなく、一同が引込んでから芝居をする段取に成つて居るのです。

本來は此『すしや』より、『木の實』の方に一倍細心の工夫が重ねられてある事で、それが實に行屆いて居る點に就て、名優の心掛けを窺ふ事が出來るのですけれど、今回は御註文に依る『すしや』だけの御紹介として、又の折に申述べる事にいたしませう。

すしや雜考

京極利行

今度は「すしや」だけで「椎の木」は出ぬやうだが、時間の都合さへつけば「椎の木」は出した方がよい。重複にならぬ範圍で筋も通るし、權太をする役者にしても、こゝの出る方が仕ばへはぐつと大きくなると思ふ。ここに今度の延若君には、あのねつとりとした同君獨特の持味から推して、「すしや」よりも「椎の木」の方で、より多く大和の惡黨らしい惡黨を描いてみせもし、又持味のよいところを發揮しやしなかつたのかとも考へられる。又、演者の實力が實力だけに正直に物を云ふ點からしても「すしや」よりは上にあるやうで、その點からしても延若君の正直掛値なしのこころをうかゞふ爲めに「椎の木」が見せてほしくなかつたでもない。それに「椎の木」では小金吾と云ふ模範的前髪若衆が登場するが、この役に、長三郎君あたり、つゝころばし役では現今あれまでに出來て來た同君をわづらわして斯うした前髪若衆の方面でも、同君の藝境が那邊までに進歩して來て居るかを搜らせてもらひたくなかつたでもない。ここに斯うした若衆役に向く俳優の乏しい現今の關西では、それ向きの俳優を育てる意味でも、長三郎君、扇雀君、ぐつと、お若いところで福滿壽、蘆鴈兩君、等あたりを登用して、大ひに精進させてみせて頂きたくなかつたでもない。

×

人形淨瑠璃だと、この「すしや」一段を彌左衛門で語る人、又お里で語る人さへもある。だが、これは御承知の如く、各人物を一人で語りわける人形淨瑠璃の場合に於いてだけ可能なこと で、芝居では、とても不可能なことであるのは勿論だ。何んとしても芝居では「すしや」と云へば權太役者が中心で、まさか、お里役者の出し物として、ましてや彌左衛門役者の出し物とし

て「すしや」一幕か上演される場合はめつたにない。それだけに權太の役は人形の場合以上に損な上にむつかしい役となり、彌左衛門の役は人形の場合以上に損な上にむつかしい役ともなつてしまふやうだ。お里と維盛、ここにお里は。仕ごころの大部分が權太役者とは舞臺上の交渉がなく、殆んど維盛、内侍相手に、お里役者だけの芝居として終始出來ぬでもないから一寸立ち場は異つて來る。だが、この役としても決して芝居の「すしや」の主人公では決してあり得ないのだ。そんな態度に出る役者がありとしたら、それこそ非常識の甚しいものと云はざるを得ない。今度のお里は扇雀君らしいが、最近、院本劇の女形として大分に筋道の通つて來た同君が、動きを少くして、内に締つてかゝる演出態度で、維盛との色模様、お月さんは寢ねしやさんしたのクダリ、維盛、内侍を相手のサワリ、これ等の仕ごころ、見せごころをどんな風に扱ひおほせるか、興味は一つにこの點にかゝつて居ると云つてもよい。

×

彌左衛門は誰がやるか、今度の顔觸では大吉君ではないかとも思ふが、あの損でむつかしいくせに、最初の花道の出から戸口にかけての首の扱ひ方をはじめとして、二度目の花道、梶原に出あふクダリ、これ等二つ其他に種々と實力の表れやすい仕ごころがあり、又これ等の仕ごころだけでは濟まされないで、舞臺に顔を出せば絶へず一種の心棒におかれた地位にあり、その爲め腹を締めてかゝらぬと、こもすれば舞臺をへたらせてしまはぬでもない――この傾向は權太が腹を刺されて、モドリになつてからとりわけて眼につき易いが――いづれにしても俳優として油斷のならぬこの役も、その俳優の實力一つでは如何やうにでも發揮出來る役柄でもあるから、觀る方としても、大ひに興味をもつて觀賞すべきだと思つて居る。老母の役は誰に廻るのか、これは一寸見當がつかない。然し、斯んな役が出來る人は、今度の一座には殆んど居ないかとも思ふ。今度の一座だけではない、關西引つくるめても、少々勿體なさ過ぎる點もあるが、完全にその人だと思はせるのは莚女君一人位のものかも知れない。重い役ではないのだが誰でも手輕にとはゆけないところがあつて、こんと理想的なのを近頃は見ない。人形遣でも小兵吉、玉七兩君くらひのものだ、この老母がそれらしく見せられるのは。

×

さて權太だが、芝居では、この役が、無條件で主人公に見られて居るので非常にむつかしいものとなつてくる。然し「すしや」では母親へのカタリ、お里、彌助への空威張と無體、梶原との應對、手負後のモドリと種々に氣持を幾分かかへて行ける仕ごころが澤山あるのだから、俳優としては「椎の木」よりも「すしや」の方が扱ひよいのではないかと思はれる。そこで今度の延若君だが、母親へのカタリやお里、彌助への空威張のクダ

りでは一種の必須條件であるあの權太獨特の横着さと、その横着の内に流れる一種のユウモア味と、この二つには同君獨特の持味が有効に働きかけて、非常に面白い舞臺が見られるのではないかと期待して居る。それどころか、廻若君の締つて出やうの加減一つでは、働きかけ過ぎて舞臺が浮つぽいものになりはせぬかとの杞憂さへも抱かぬではない、それ程に、このクダリでは同君の持味がピッタリと役に立つて居るのだ。ところで問題の鮨桶をかゝへての花道引つ込みの例の見得だがスッキリと極るこゝが當然のやうに評價されて居るこのクダリで臀部から腰、兩足にかけて、線も形も餘りスッキリとはして居ない同君が、この短所をどんな工夫で秘しおほすか、又すつかり何にかの新工夫で逃げてしまふか、この點にかなり興味が持てぬでもない。逃げるとしてからが、いつかの「忠臣藏」の二つ玉での定九郎のやうに、一場全部を新しい試みで行くのならともかく、この權太では前半と後半とは從來のまゝで行くより仕方があるまいから、この引つ込みの部分だけを、新演出で逃げると云ふことは、大なる冒險事、同時に失敗事に終りはせぬかと思ひ、賢明なる延若もそんな愚には出まいと考へて居る。次に女房、子供を身代りに連れて出てからのシーンだが、權太の腹の一番に見せどこで、しかも、その腹があらわに表面に出過ぎては味も蓋もない結果に終り、云はゞ權太役者としては第一の難關であり、同時に性根の解釋程度も一番にはつきりわかるところなのだが、さて延若君は、こゝをどんな風にパスするこゝか、最近の同君の舞臺と思ひ合せては一收穫かあるのではないかと思つて居る。最後に手負になつてからだが、誰だつたか、或る知名俳優が「權太はこゝで泣かさねばうそです」と語つてきかせてたことを想ひ出す。あの苦肉の策をこらして親への詫びをする權太の眞情さへが、あの手負の物語中に溢ふれ出てくれば、それで觀客の心も摑めるのだと云ふ心持で語つたのだと思ふがその眞情をこのクダリできつぱりさせる爲めには、それまでの前半の權太の演出方法にも相當の、さうする爲めの豫備手段が試みられてあるべきで、手負までの前半と、手負になつてからの後半と、この二つの部分の演出方法の對稱の妙、が、どの程度にまで、巧みに相ひ活かされてあるか、この點が延若君のこの一幕に對する態度の最後のテストとなつて殘つて居るのかとも思つて居る。

寄贈雜誌

（寄贈雜誌は道頓堀編輯部宛に御送附下さい。）

創作時代　東京市池袋一〇一四　文藝聯盟社
新國劇　東京市下谷區上野櫻木町　新國劇事務所
舞臺評論　大阪市北區木幡町一八　大阪演劇聯盟社
演劇改造　東京市外和田堀町和田五八　演劇改造社
川柳きやり　東京市四谷寺町六番地　川柳きやり社
家庭の教　大阪市南區三津寺町二五　新密教社
みすゞ　大阪市浪速區元町四ノ三三九　「みすゞ」社
富士のや草紙　（魚硯）鳥取縣西伯郡法勝寺村大字道河内一四三ノ二（板愈良編輯）

權太の性根

實川延若

權太は今から十八年前（明治四十四年）京都明治座の三月興行に演じたのが私の初役で御座います。二度目は其の年の十月、大阪の浪花座で演じました。三度目が名古屋の御園座で、此の時初めて素裸でやつてみました。それまでは肉襦袢を着てやつてゐたので御座います。

それ以來この權太は殆んど數限りなく上演して來ました。今回の大阪上演は、大正十一年十一月中座興行より丁度七年振りでムいます。今度は狂言は新作揃ひの事で御座いますので、この權太も大いに新しい演出を試る心算りでムいます。

權太をやつてみたいと思ふやうになつた動機は、千日前の春日座で幇間の素人芝居の『すしや』を觀てからで御座います。私の權太は私獨得のもので、殆ど自分の工夫に、幾らか聞きかじつて居た故人の型を參酌してでつち上げたもので御座います。

先づ着付から申しますと、初の出には襟のついた、野暮くさい銘仙の女の着物（女房の）を着て出ますが、下にはお約束の縦が一寸二分、横が一寸の辨慶縞の單衣を着て白木綿の腹巻、帶は善太の帶でこれには赤い巾着をつけて、中には後に合圖に鳴らす一文笛、これも善太のおもちやの積りで入れてゐます。持物は豆絞りの手拭と、叺煙草入、駄六の煙管であります。

次に權太の性格、殊に悔悟の段取についてはいろ〳〵と諸説があります。菊五郎の權太は最初から改心し、團藏の權太は途中から、鮨桶をもつて引込みより改心しました。院本を見ると權太の改心は三段程に分れてゐるやうです。で私は先づ最初が、何うかして親父の勘當を宥され、あはよくば家へ入込んでもう一度放蕩してやらう位の考へで、それには親父が匿つてゐる落人、何んでも親父の大切な人（維盛と判然り解つてゐるのではない）に違ひないのだから、あれをコツソリ落してやつて親父の機嫌を回復さう、然ういふ考へから阿母に三貫目の金を無心する。無心をして、さてかくれて聞いてゐる間に、親父と彌助との關係が解るそこで愈々落さうと決心して三貫目の旅用の金の積りで、首を入れた鮨桶を持つ

て駈附ける。と、これが金と思つたのが首だつたので、これ幸と月代を剃つて維盛の偽首にして突出す、と同時に女房と伜を、内侍六代に仕立てゝ、維盛親子の難儀を救ふ……とまあ權太の改心の運はざつとこんなものかと思ひますが、誰にも彼にも、唯いがみ、あるひはゆがみゆがみと憎まれ乍ら、この裏の裏を行つた働きをするところに、權太の性根があるのでございませう。

權太の行方に就いて、從來の型より變つた所を申しますと、……以前は花道から舞臺にかゝり、格子をあけやうとして彌助とお里がいちやついてゐるところなので、後にさがつて懐中から畫軸を出して畫像と彌助の顔を見比べ、よく似てゐるといふ心もちでうなづきますが、今度は——お里と彌助の色模樣がある。這入りかけて二足三足行きかけて思ひ出したやうに彌助を見て思入れをします。(これは前幕椎の木の塲で、傘賣姿の小金吾が追手にかゝつて重盛の畫軸をもつて逃げる時に行き合ふて自分の荷と小金吾の荷物をすりかへます。重盛と維盛は親子ですからよく似てゐます。改めて重盛の畫像と維盛の顔とを見比べるのは蛇足です

それから〳〵限りない程、甘い親——のチョボになつて〳〵うまい和郎ぢやと、いがみの權太——から老父の彌左衛門が歸つて來るので、表へ出る時、鮨桶を持つて出る人もありますが、私は此の時は手をつけないことにして居ります。それは忍び入るのですから身體が這入れば桶も這入る筈です。それをわざ〳〵置いて這入るのは不自然と思はれますし、又桶に手をふれないから首を入れた桶と金の這入つた桶を間違へるやうになるので、これが自然だと思はれます。

又〳〵内やゆかしき、内ぞゆかしき……のくだりで、維盛がお約束通り陣羽織を裂きますと、中から袈裟衣と珠數が出るそれで權太が維盛は自分に出家せよとの謎だと悟る。そこへ、今度は淨瑠璃で、〳〵手負ひの權太すりよつて、及ばぬ智恵で梶原をたばかつたと思ひしが、かへつて彼方が皆合點、末はいのちをかたらるゝたねと知らざる淺間しさ……を入れて割白があつてチョボ……となります。チョボは〳〵夫婦の別れに親子の名殘、手負は見送る顔と顔、思ひは何れ大和路や、芳野に殘る名物に、維盛彌助といふ鮨屋今に榮ふる花の里……で權太は落入りかゝります。婆は「お念佛を申しや、お念佛を申しや」といふので「ええ」と力なく聞いて、婆が「南無阿彌陀佛……南無阿彌陀佛と申しや」といふので「な、むま、み、だ……な、む、ま、み、だ……」と二三度、語尾は消えるやうに弱々しく繰返して、チョボの〳〵あはれ……チン、チン……の憂三重になつて、苦しみ乍ら些つと下を搔むしると、善太の巾着が手にふれる、それを取上げて頰に當てるのが木の頭、それを拘くやうにして落入るのが幕になるのでムいます。

戀巴に就て

―及び悲願千人斬―

食滿南北

中座の中幕に『戀ごもえ』といふ新作の所作をやる事になりましたが、これは狂言の『附子』から題材をとつたわけです、三人片輪と違つて、兩冠者が死を覺悟して附子をのむところが面白いと思つたので脚色して見ました。

それは寶物をこわすところは色氣をつける爲め女形を出して見たのです、それが『戀ごもえ』といふ名題を附けた中心になつてしまつたのです。

こんなものは振の附方の如何によつて其脚本の生死の別れ目だと思はれます。

新らしく長唄は杵屋正一郎氏を煩はしました、さうして附いてゐて三人片輪にならないやう〳〵と注意しました、當人も大ひに乘氣になつて大變にかわつた手がつきました。

常盤津は文賀師と文左衛門氏が例によつて工風をこらしてくれるでせうし。

竹本は延の助氏が大分こつてくれます。

かう三拍子揃つたのです。

振は三津五郎氏の高弟、三津の亟氏がわざ〳〵來阪してやつてくれるといふ事になりましたのでいよ〳〵この新曲も面目を施すわけです。

それに魁車氏、長三郎氏、扇雀氏等々で關西の舞踊に重きをなされてゐる人達によつて上演されるだけに、一番原作がつまらないものかもしれません。

つまりあんまり約束に囚らはれすぎてゐると云はれるかもしれませんが、こんな風のものを無闇に新らしくしてしまつては持ちも下げもならぬものになるかもしれませんから其點は極月並にはこんで行きました。

一方取あひといふ事も賑かにするための手段に外なりません背景だけはわざと能舞ひをさけて見ました。

これは松田種次氏がいろ〳〵工風をしてくれました、同氏も『春榮』が浪花座に出てゐるだけにちよつと困つたと申してゐました。

マアこれだけベストをつくしたのですから、あとはどうか皆樣のお目でなほして頂きたいと思ひます。

何んだか、この頃は無闇に踊を描く事になつてゐますので自分でも一つ花柳南北にでもなりたいやうな氣になつてゐます、いづれ保名位は御覽に入れませう。

（角座悲願千人斬）

下村悅夫氏の「悲願千人斬」を脚色する事になつたのですが、例の林不忘氏の「大岡政談」つゞいて悅夫氏の「愛憎亂麻」それから今度と引つゞいてかうした大衆文藝ものの脚色をやつてゐるので氣がします。

それにこれは又大變に長いもので、事實も十何年かに涉つてゐるだけにちよつと纏めるのに骨が折れました。

原作者の描かうとした「悲願千人斬」の中心點を大詰へもつて行つてしまつたのは是非ない事と許して貰いたいと思ひます。

其上に原作はさう活躍してゐない「三一よしのの方」を大分芝居にして見ました、これはちよつと面白い役だと思つたのと女形をしてかうした役が仕甲斐があるだらうと思つて大ひに役にしてしまひました。

龜川の廓は大分に困りましたが、マア〳〵まとめたのです、これは脚色者の苦心といふものを買つて頂きたいと思ひます。

春色梅暦（あふむ石）

唐琴屋丹次郎　延若

いつぞや俺が唐琴屋を、追出された其後で、あの米八も廓を拔け、此の深川へ住替して、俺を引取り世帶を持たせ、日蔭の身とは云ひながら、不自由なく暮して居るのは、みんな彼奴の工面づく。その義理のある米八の、目褄を忍んで仇吉と、斯うして出合ふも氣が咎める。いつそ今夜は歸らうか。然うは云ふものゝ此の文には、是非々々逢はねばならぬとある。えゝまゝよ。ちよつと顏を見せて來やうか。

×

俺も自分が惡いと思へばこそ、出入の多い尾花屋で羽織をはがれて踏みつけられても、だまつて我慢をしてゐるのだ。それでもお前の方ぢや、未だ氣がすまねえで、顏を見るたんびに、嫌味辛味を言はれて見ると、なんぼおいらのやうな意氣地なしでも、少しは蟲と云ふものがある。第一お前に、いつまでも苦勞をさせるのも氣の毒だ、いつそ切れてしまつたら、お互にらく〳〵するだらう。米八、切れてしまはうよ。

深川の藝者

鳶魚

大阪の芝居で梅暦を見せるなら、江戸を忘れた東京を失敬して、是非とも例の佃をお景物したい、交通機關といふ言葉さへなかつた時、八百八町の外であつた深川の往來は、概して水路を取つた、さうして今日では畫に描いたのしか見られない渠の屋根船でなければならなかつた、早いことは猪芽の方だが、遊ばうとでもいふ人なら十人が十人、屋根船に乘つたものださうだ、好いお客になると其の往返共に船の中に辰己藝者が乘つて居る。其の船の遭遇した時に双方の藝者が彈き立てる、佃に送りと迎へと二樣あつて、それが辭儀挨拶であつたと、昔の御通家とやらから承つて居る。然るに芝居のみならず寄席でさへ佃を遣ひはするが、お揃ひで送りだけであつて、迎への方は一向に御用がない、今度あたり米八仇吉が水上で出合ふ處では、我等の所望としては如何にも柄にないものゝ見知り越しの或る老妓の迎へを知つて居るのがあるから、お荷かは知れないけれども、重いか輕いか擔ぎ出しても見たいやうな氣もする。

一體深川藝者なる者は全然特殊なものとされて居たらしい、天保改革の後に土地の掃蕩されて、柳橋へ泳ぎ出し、恰も幕府衰亡の間際で、ゴタクサ紛れに飛んだ評判物になり濟したので梅暦の刊行された時代までは、吉原藝者、江戸藝者、深川藝者と云ふ三所三樣に慥な區列が立つて居た、天保の初までは今日のやうに藝者と云へば一列一體に同じものではなかつた。

藝者と云へば仲の藝者、吉原も八百八町の內でない、同じ町の字でもマチと讀めば江戸藝者のことなり、チャウと讀めば吉原藝者のこと、だがチャウの藝者といふよりも仲の藝者といふ方が、我等なごの耳には慣れて居る、だから仲の町を上略或は下略して呼んだものかとさへ思はれた。三代目一九が丁の藝者については花柳古鑑の中に詳しい話を書いたが、江戸藝者や深川藝者と日を同じくして談ずべきものではない、と云つた處で

吉原藝者の起原も寶暦度にあつて、其の最初は昔の上方にあつた太皷女郎といふ往き方のものであつたが、安永九年白石噺でお馴染の大黒屋庄六が見柄を立てた頃から、内藝者も共々に藝と腕とで鳴らす、奇麗乾淨なものに出直つたのである。

江戸藝者は天和貞享から踊子といふので、江戸の藝者として一番古い歴史を持ち、何にしても娘仕立、初々しい處から始つた、だが何時か旦那を拵えるのは勿論、御親類筋も尠くない、不見點とやらのやうではないにしろ、達者な子は相應な手際を見せるのが珍しくもない、闇のない吉原藝者が素人らしくして明るくないマチ藝者を輕蔑するのも無理はない。

深川藝者は辰己の春色などゝいへば乙な眺めのやうには思はれるが、其處のは殆ど正札附の有樣、無論幾分かの例外はあらうけれども、概して即賣流儀のものであつたらしい、人情本で見たばかりでなく、洒落本にしても、女郎なのか藝者なのか、一向分らない、それは我等が川柳の愛嬌物である淺黄裏といふ所だから分らないとばかり、ではあるまい、風采態度何くれ彼くれ、鳥の雌雄ほどに辨じ難いものがあるからだらう。

深川は早くからの私娼地で、藝者が其處へ寄生したのは寶暦の中頃、三十三間堂再建後のことらしい、塲所が岡塲所だけに遊女も吉原のやうな歴然とした公娼とは違ふ、其處は曖昧に出來上つて居る筈、藝者も御同樣に賣笑した處が、吉原のやうな意味合はない、お互さまに内證と云へば内證なのである、深川では明和度から床藝者といふ名稱さへあつた。

あつぱれ名物にした羽織も、少女を男裝させたからのこと、髪さへ深川本多といふ結ひぶり、實は豐後節の名殘であつて、千代吉だとか、鶴次だとかいふ權兵衛名は深川の特色らしくも聞かれる、それは豐後節の名取から沿革したのであらう、それがピンシャンした樣子が引付けもする、意氣の好い處が賞玩だと云つて見ても直ぐにコロリなのだから、御評判ほど凄じくもない、梅暦と時代を合せて三笑亭可樂の江戸前(落語本)の、

人魚と申まするうほ、一ヂ名渡女郎とも申しておほくは辰己によく住うをなり。

といふ文句を借りて、大體の樣子の示したい、それは深川藝者のことではないと云ふ人があるかも知れぬ、けれども其處の空氣は他の言葉よりも好く開示されて居ると思ふ、彼等はデンボク肌、キャン氣質を賣り物にするだけに、同じ賣り物でも卑品であつた、大盡遊びの代物ではない、彼の十八大通などゝ云つた御藏前の札差を中心にした馬鹿遊びの連中すら深川訪問はしなかつた、だから隱れ遊びを好む、別けて安す手の人間を嫖客として迎へたに過ぎぬ。

此の三藝者の種別は買ひ手の方から見ると面白い、好く分るが、お急ぎには間に合はぬ、それに弘化以後は餘程混雜して、斯うした區別も知れ憎い、まして今日からでは、存分詳しく云はなければならない處だけれども〳〵。

梅暦一夕話

尾崎久彌

我等の國に、さても色男の意味に於て、いはるゝ代名詞的人物名の多きことよ。王朝時代の作者は、二者を作り出した。曰く昔男(伊勢物語)、光源氏(源氏物語)。がさてこれらは、餘りに、古典的であり都雅であり、貴族的でもあつて、我等の生活には親染せられない。

近世文學或は俗曲類の作者は、更に色男の數々を作り出した產み出した。夫等はより多く、我等祖先の生活、實人生に交渉し來つた。王朝時代の古典文學の比ではない。勿論當初は、二三、實在の名のそれもあるにはあつたが、やがて夫等は理想化せられて、假作中の人物名ゝ毫も擇ぶ所なきに至つた。容易に我等の口の端に上るは、先づ近松はじめ所謂義太夫節淨瑠璃作者が拵へあげた色男の數々、曰く、治兵衛、忠兵衛、傳兵衛、半兵衛、半七、……。就中、治兵衛、忠兵衛、傳兵衛の徒は、町人美男情郎の典型ゝして、上方趣味(我等は、これを貶し去るのではない。それは微溫ながらに、執拗の熱を持つたもの。同じ自暴自棄に沈むにしても、江戸つ子のそれゝは違つた。が今は、絮說を略かう。)ゝも相迎合して、其地を中心に、未だに榮えてゐる。がこゝに我等は、同じく俗曲畠ながらも、江戸で生れ榮えた豐後淨瑠璃の一派新內節が、作り上げた色男の名も、東西比較の上に、遺れることは出來ない。曰く、時次郎である。蘭蝶である。殊に、時次郎は、治兵衛や忠兵衛の徒の克く爲し得ざるを爲した。(さいふ程でもないが)即ち、彼は一腰口に咥へて、庭の松が枝踏み越えた。さうして、みぎり諸共、浦里を連れ出した。その勇敢なる、積極的行動は、退嬰的な、動もすれば女性の傀儡かゝ思はるゝ義太夫節系統の色男ゝは、稍格を異にしてゐる。(忠兵衛の封印切をいふ人もあらうが、時次郎の勇敢さには、少々ひけを取らうかゝ思ふ。新內びいきゝ識られたら、それ迄である。)

近世小説でも、これに劣らず、色男を作り出した。町人の憧憬を、途方もない豪華な生活に作りかへて產み出した種彦の「田舍源氏」の光氏は如何に。これは、今の場合、比較にはならぬ。例の十一代將軍家齊の作物化ともいはれてゐるから、何とも謂へないか、然し、これが讀まれ、錦繪に多く摺り出されたのは、當時の民衆の「斯くありたし」を如實に表現してゐたのかと思ふ。が今私は、此の光氏は、姑らく度外に措きたい。殘るは、三馬一九の徒、彼等には、これと名づける程の色男の製作はなかつた。(勿論、作風の相違からも來る)京傳と、その後輩の春水と(というて京傳春水に、師弟の關係ありと匂はせる筆法ではない。無論、春水、京傳を私淑はしたらう。目的の彼岸の對象の一に、京傳を置いてゐたことはあらう。)、この二者は如何。

京傳は、途方もない色男を作り出した。曰く、黃表紙「江戸生浮氣樺燒」(及び洒落本、同じ京傳作の「總籬」)作中の、艶次郎である。此の艶次郎は、實在人物をモデルにしたのであるが、とにかく色男の外形さへ保たれゝばそれでいゝ、といふので離離した男。芝居淨るりと同じやうな筋を、素で行かうとした、たとひそれが嘘であつても、眞實らしく人目に見えればいゝのである。「浮氣樺燒」の話をするのではないから、いゝ加減にしておくが、が此の艶次郎の作名は、己惚色男の代名詞同樣となつて、享和度には、同じく古く自惚の意味に通ひ來た鹽屋と結びつけて、鹽屋艶二、又は艶示樓(私は、これを二者別人と見る)などの、洒落本作の作者名を生むに至つた。とにかく變態的色男の名として、天明、寛政、享和、文化、恐らく文政度にまで榮えたのである。それがまた、自惚色男の意味ではない、自然的色男の、人も羨む程度の色男の名が、天保度に至つて、新進作家の手によつて作られた。新進作家だなどゝいふと彼の地下の靈は怒るかも知れないが、事實文學上の過程に於ては、まだ新進作家たるに過ぎなかつた。即ち爲永春水である。三馬に謁を執つて、三鷺といつたり、初代振鷺亭の名を襲いだり、楚滿人の名を襲いだり、或は、所謂人情本に或は合卷に、まだ彼は、ふら〳〵と方向に迷つてゐた。が素質は、やはり人情本だつたらう。が初代一九だつて、人情本らしい作のあつた世の中に、彼はまだ人情本作家としての大家の域をえ占めなかつた。それが、此の人情本「梅ごよみ」に至つて、鬱然たる大家の地歩を占め得たのである。さうして此作によつて、始めて、近世色男の代表たる「丹次郎」が發祥したことは、謂ふ迄もない

丹次郎は、全く、從來の色男の型とは異つてゐた。强ひて謂はゞ、義太夫節中の治兵衛や傳兵衛と似通うてゐたが、彼等よりも更に消極的である。女性苦悶、焦躁の體よりいへば、女性に對して、特殊的强者であるかも知れないが、唯、女性の歡心を求むるに力め、慕ひよる凡ての女性を、萬遍なく懷けんとする、それがための幇間的態度を女性に惜し氣もなく振舞つた。

弱者にして强者、强者にして弱者、えたいの分らぬ者になつた但し對象を女性に置く場合にのみである。が何こいつても女に飼はれる色男の典型を爲してゐるだけ、(新内の男だつて、この傾向はあるにはあつたが、)善くいへば女性に無抵抗、悪くいへば、意氣地なしである。がこの女性、自分に慕ひよる女性に對し、その合歡の夢は、案外、弱者ならず、强者であつたかも知れない。これは、無論謂ひえよう。

勿論、この丹次郎は、京傳の艶次郎から、名の上だけでは、或はヒントを得てきたのかも知れない。艶も丹も、結局、甘い聯想を伴はさせる。が、京傳が、一方、艶次郎を皮肉にも外形的色男の見本こして取扱ひ、これを自在に操つてゐるのに反し丹次郎は、作者の理想境が、ここに現はれてゐるこ思はれる。が畢竟は、時代空氣のせゐであるかも知れない。艶次郎出現の際は、(「浮氣樺燒」は、天明五年の版である。)たこひ外形だけでもいゝから、お芝居を演つてゐるこ自分は分つてゐても、色男の眞似がしたい。女にちやほやされてみたい。さうした人心の欲求が旺んであつたかも知れない。丹次郎の時代は、艶次郎ほごのお芝居氣はない、否、艶次郎が爲した如く、醜男且つ色男の外形を具へんよりは、(その動力は、艶次郎の金であるが)金はなくこも、たこひ意氣地なしこ譏られても、好きな、或は十目の見る所美人の白粉剝げの肌に浸つてゐたい、惑溺してゐたい、さうした欲求が旺んであつたかも知れない。然りこ見るが當然であらう。黄表紙洒落本の滑稽諷刺、皮肉の世界は、艶次郎の外形的色男を生んだ。人情本情痴、頽廢、女性臭浸潤を唯一男性の欲望こした天保度は、この丹次郎如きを生んだ、こ見るべきであらう。色男、金こ力はなかりけりで、此の色男に資格づけられたものは、當時、唯一の此の代表的色男「丹次郎」である。色男、顔こ力はなかりけりは、過去の「艶次郎」である

×

丹こ艶この比較論は、これぐらゐにして、偖、丹君自身の事に移る。丹次郎氏は、所謂四角關係こいふが、それよりも一角多い。が、簡略にいふこ、男一人に女三人である。女三人は、例の、米八、お長、仇吉の三人。此の三女性お長は、丹次郎のゐた女郎屋の娘。米八は、そこの抱へ藝者で後男ゆゑに深川に住替へ、仇吉は、深川の生粹のはおり。此の三者の中で、私の好きなのは、無論(こ敢ていふ)仇吉の一人である。お長勿論可憐、後、藝者になつて蝶吉、男髷に結つてゐる風なごを見るこ、丹ならざるも、愛撫の手が動く。米八、もこより丹こは、吉原、同じ家に起臥す頃よりの深間である。が米八は、唯、丹を迎へるに千辛萬苦、時には捨てられはしないかこ、惴々こしてゐる。可憐さ、男を懷ふ熱は人並以上に藏へてゐるが——男をたてひくに於ても仇吉に劣るでもないが、新しく出現した仇吉には、男こしての興味が一籌を輸せざるを得

ぬ。仇吉こそは、私の想像してゐる所では、深情、床上手、名前の婀娜の如く、噎されるやうな欲情の花の滿開。態度も、米八の如き比較して內輪ではない。丹次郎を把握せんがためには外聞も義理もへチマも厭はぬ。たとひ犬といはれてもいゝのである。丹次郎一個を全身的に攫んでゐたら、死もまた厭はぬ、がさりとて、人情を解せぬでもない。芝居はどうか知らぬが、最後に米八お長(蝶吉)と圓滿に妥協して、男一人を女三人が仲よく守りする、さうした同情もきく、且つ先是、自分が病ひついたその枕べに、敵の米八が尋ねよつては、涙を零して謝罪るさうした人情味もある。ズバ抜けた娼婦にして、しかも人情一通りは心得てゐる。が正直いへば、丹次郎なくては、一日も生きていけない、(米八も、思ふ情は同樣であらうが)それがためには、ヅケ〳〵、丹に迫るといつた、さうした戀愛に於てより強い本能性を有つたと思はれる、その女性に、丹ならざるも、全身が引ずられて行く。丹も然り、お多分に洩れず、知る事の淺いに拘らず、却つてお長、米八の二人よりは、濃厚なあくどい戀の場面があつたらうと、米八ならずも、無論は想はれるのである。

娼婦的にして、張りつよし、男なくては生きていかれぬ、しかも折れる時は折れる、人情普通は無論解してゐる。さうした一面女性の優しさはありながら、ヅケ〳〵と迫るあの仇吉の、深情には、低頭せざるを得ぬ。私の好む女性の型も、これである。米八の、熱と優しさと相半ばしたものよりもである。

が、私は、「梅暦」及びその叢書を通じて、なほ一つ好ましい關係は、津藤をモデルにした藤兵衛と女俠お由との關係である丹次郎對三女性に比べたら、比較的に老けた、此の中年男女の間柄にである。中年でありながら、丹次郎對三女性に劣らざるあの戀の初心さ、格別お由の若返らうとする姥櫻には、藤兵衛ならずも、愛撫の手が動く。お由の、あの邂逅の夜の、耳朶を赧めた處女らしさは、どうだ。

なぜ、書いて來たら、際限がない。次ぎに、近世小說史の過程から見た、此の「梅暦」論を若干述べておく。

「梅暦」及びその叢書は、春水(初代)の出世作である。出世といふならば、すでに中老作家になつてゐた彼としては、憤慨するかも知れないが、が人情本の元祖と自ら稱ち人も許したのは江戸文壇に華やかな大家としての一廓を優に贏ち得たのは、先輩及び同輩の、鼻山人、鯉丈などの手合を追ひ越したのは、此の作に由る。その初編「春色梅暦」が天保三年春、彼の死を、天保十四年十二月と見て、(普通は、天保十三年七月說)その間僅か十二年ばかり、しかも後輩の金水、門人の春鶯、春雅、春蝶春江等凡て一社の多くを抱へて(あまり名作家は出なかつたが)人情本の宗と呼ばしめたのは、此の作與つて力がある。市井の雜事諸階級までもとり入れた、北廓辰巳とは限らず、町藝者、幇間、遊藝師匠の類にも筆をつけた。洒落本及人情本初期の作

が、一處に停滯、千篇一律なのとは、較べ物にならぬ。そこに強い牽引力があつたのであらう。洒落本は、思へば、作としては無爲、平凡である。――一處中心の深味は、名作によつてはある。――普通、本格の洒落本といへば、色男を描かなかつた唯普通の嫖客、割合に妓に好かれる側と、反對、ふられる側と兩方對照の興味を描いた。即ちかうすれば持てる、かうすればふられる、初心遊びの心得を、結論から說く事になるのである即ち、小說なりとはいへ、一種の色道傳授、遊興敎科書だつたのである。中には、初代一九など、自己の體驗を臆面なしに、覗かせてゐるのもあつた。が末期洒落本に至つて、二三、色男(人情本型)のらしいものを描くのを生んだ。男女の關係も複雜になつて、この妓と向う河岸の妓との、一人の客の張り合ひ。又は、客の女房(又は結緣)と妓との三角關係。(が此の類は、義太夫淨るり物以來の型である。即ち、お園と半七、三勝の如し)といつたものもあるが、此の「梅曆」の如き多角なるは、これ迄になかつたらう。それだけ、作爲の上の墮落、よくいへば更生した變化、技巧といふべきであらう。人情本には、この男一人に女數人が多い。いかにも型になつてゐる。此の「梅曆」あたりが、手本ではあるまいか。即ち最後は、妻妾同棲、又は圓滿かけ持の芽出度し〳〵に終るのである。それの中心となつた息子を、(梅曆では、丹次郎)人々も(世間。讀者も)或は、羨望したのかも知れない。時代空氣が、かゝる男を、男性の最も幸福なる一人としたのかも知れない。とにかく、人情本は、誠に、春水を措いて論ずること出來ない如く、又、此の「梅曆」を措いて論ずることも出來ない。即ち、「梅曆」を讀めば、大體人情本の作風、氣持を窺ひ知ることが出來よう。宜なり、初代春水以降人情本作は、大抵此の「梅曆」の作風の踏襲、追隨である。作中の色男は、大抵、丹次郎、同型、又はその亞流である。否な、初代春水の、作たりとも、此の「梅曆」以降、數々の人情本、(代作も混つてゐよう)その傾向、とりわけて人物の跳躍、氣分、その描寫は、事件の推移の上にも性格の個々の上にも、此の「梅曆」の類似である。色男は、凡て、丹次郎の再現、再生である。

と、先づ、正系「梅曆」の話は、これぐらゐに止めて、秘畫本の――半紙本なるも、作風は人情本風にした、――「梅曆」に就て、若干書足しておかう。凡て正系の文學的作物に、此の傍系の艶作あるが如くに、此の「梅曆」もあるのである。艶本解題を殊更してゐる餘裕も今はなく、またその機會でもないが、事の序でに、ほんのその輪廓だけを傳へておく。幸ひ、拙編未定稿「艶本解題」の中に、この「梅曆」の摸擬艶本に關する記事があるそれを轉載しておく。

秘 梅好閨の移り香　半紙本天地人三冊、極彩色摺　又平(初代國貞)畫

○右、「梅曆」物の一。地と人との二冊を見たり。地の一冊は、半兵衛この糸○新造いと花とたいこ由次○藤兵衛と

梅のおよし○お熊婆、昔を夢に見る。女房と丁稚なぞ。附錄の文は、第二、笑かけし素顏もはでにしら梅の、きぶりかはゆき行の挿花。その一篇。

●人の一册は、箱丁の丹次郎と米八○丹次郎と米八○丹次郎と蝶吉○丹次郎と藤兵衛○下女と下男、藏の中○高砂の尉と姥。附錄の文は、色も香も滿て開る八重梅の、姿つゆけき草の水揚、その一篇。畫、惣體に佳なる方也。編者不詳。畫は、又平の落款あり。即ち初代國貞也。天保度の作。

×

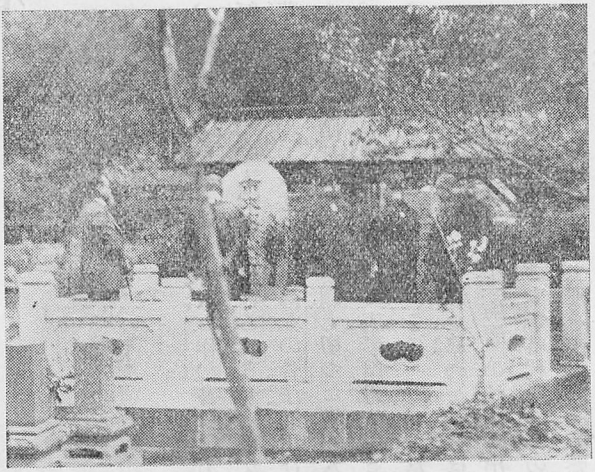
其他では、末期赤本類にちよい〳〵見當るが、國貞英泉階級としては、先づ此の一作である。

「梅暦一夕話」と銘うつたものゝ、一向梅暦の筋そのものには觸れてゐない。がそれ程筋は周知の事と思ふての事。唯、江戸で生れて、上方色男の筋を引く、此の丹次郎、それに絡まる女性との、自分の雜感である。なほ、昨年夏東京歌舞伎座「梅暦」興行の折、小生の執筆した「歌舞伎」別册をも參照せられたい事を述べておく。（四月廿二日）

鹿兒島より……片岡我童

鹿兒島へまゐりました。

鹿兒島ははじめてなので、さだめし荒つぽい氣風のところだと豫想してゐましたのに反して、たいへん人情のこまやかなあたゝかい感じのするところであつたので、嬉しうございました。幸ひに此地へ足をとゞめましたので、白井社長の御先祖の墓所へ參拜することが出來ました一同がそこで記念撮影をすることにいたしました。



リヨ右テツ向

二人目　片岡ひとし
三人目　片岡　我童
五人目　嵐　德三郎

粹所狂言「梅暦」

石割松太郎

合卷もの、草双紙から舞臺に移された狂言は、數多い、相當にあるが、人情本から直に舞臺に移されたもの、代表は、「春色梅暦」と「娘節用」との二つであらう。

この二狂言のうちの「梅暦」が、今度中座の五月狂言に撰ばれた。演者は、延若の丹次郎、我童の仇吉、魁車の米八だといふことである。申すまでもないこの狂言は、二人のいゝ立女形を一座に見つけないと出せない狂言だ、我童と魁車とを得て、今度この狂言が撰ばれたことは尤ものことだ、そして我童、魁車の兩優で、やゝ江戸の深川、羽織の面影が出るだらう、大阪ではこの兩優を除いては、仇吉米八の演者はあるまい。が、延若の丹次郎はどうあらうかと思ふ、當代の色男役は、延若だらうが、この人には餘りに濃い大阪情趣がある、上方カラーがあるこの上方から拔切るところに、延若の舞臺の腕が見えると初日をたのしみにする所以がこゝにある。

原作の「梅暦」は、申すまでもない、爲永春水の作、書賈である春水が合卷草双紙に筆をとつても、名を擧げることが出來なかつた、それを、草双紙合卷物の筆法で、洒落本の骨法を用ひて、洒落本の世界を描いた、墮落し切つた糜爛し切つた世態人情が、欲した理想、色男の代表的人物を稱けて唐琴屋丹次郎といひ、これを揑ちあげたのが、この「梅暦」で、この一點が、當時の人情のツボにはまつて、春水の名聲はとみに擧つた。彼は人情本の開祖と誇り、脂がのつて、つゞけて「梅暦」の續篇を出版した。――私が「當時」といふのは、天保の糜爛時代をいふのである。即ち天保元年に「春色梅暦」十二册を出し、「梅暦余興春色辰己圖」十二册を天保四年に、更らに天保七年に「春色惡之花」六册を出した。これを一系として「梅暦」と總稱するが、天保十三年の水野越前守の極端なる改革沙汰で、春水も筆禍を蒙り、手鎖を申付つて、この天保十三年の七月十三日に、

手鎖のまゝで遂に春水は歿した。

春水の時好に投じた丹次郎――色男の代名詞として、今日尙ほその概念を與へてゐる丹次郎は、軈ては劇中の人物であつたらうが、越前守の禁制に引つゞいて、世の中が、騷々しかつゝためか、この人情本中の傑作が、舞臺に移し植えられたのは、世は維新、王政は復古した明治になつてからであつた。

即ち東京では、明治三年三月、中村座で瀨川如皐と河竹默阿彌の合作で「梅暦辰己圖」三幕、丹次郎が五代目、仇吉が廣次、米八が三津五郎といふ顔ぶれ、大阪では勝諺藏の「春色辰己圖」があるが、私は一夜をかけて番付を繰つたが、興行年代が見出せなかつた。その後大阪では鴈治郎が丹次郎をもすれば、明治三十三年の一月には米八にも扮してゐる、これらは諺藏の狂言によつたのであらう。

この諺藏の脚本が、最近には大正四年の二月に、岡本綺堂氏が加筆して、明治座の舞臺にのぼつた、それは丹次郎（故又五郎）米八（松蔦）仇吉（秀調）といふ役割であつた。

これらの舞臺の「梅暦」を別にして、最近木村錦花氏の脚色で歌舞伎座の舞臺に復活したのが、昨年の七月で、丹次郎（羽左衛門）仇吉（梅幸）米八（宗十郎）であつたことは、皆さんの記憶に新たなことであらう、この木村錦花氏の「梅ごよみ」が、今度の中座の根本である。

で、丹次郎と米八との色模樣が、哥澤の合方で、芝金が出演したと申すが、その哥澤が今日の「梅ごよみ」である、あの哥澤が持つ情緒が、――「哥澤の梅暦」が、舞臺の「梅ごよみ」のランビキにかけたやうなものだ。この哥澤情趣か、即ちこの狂言の色であるといへる。

今一つこの「梅ごよみ」で留意を要するのは、深川のはをりの風俗である。當今の藝妓が、西も東も、平氣で羽織をはをつてゐるが、昔の藝妓は、羽織を着なかつた、江戸の藝者は足袋もはかなかつた、この達の姿から脫して、野暮な羽織を着て粹に見せたのが、深川藝者の風俗上の特色であり、軈ては「はをり」と以て、深川藝者を呼ぶに至つた權與であるが、何故深川に限つて羽織をはをつたかといふと、深川の地理上の關係から、海には近く寒い潮風に、又大川を控えた關係から、この衣裳に仇つぽい柄ゆきの羽織を、はをつた風俗が、――この變則な風俗が、却つて嫖客に親しみを、感じさすやうに立至つたもので、それが深川藝者の一つの特種な獨自な風俗を作つたものといはれてゐるが、この至つた仇つぽい風俗が、即ち深川の情趣である。昔の流行語を借りていふと、「粹所本」「粹所髷」の例になつて、この「梅ごよみ」こそ、純の純なる粹所狂言だといへる。舞臺に忘るゝことの出來ないのは、この一點だ。

即ち、言葉を換へていふと、上方系統の浮世草紙、淨るりその他には、丹次郎のやうな色男は、決してなかつた。これを淨るりに見るも、いつも女房――或は許嫁の、枕を交はさぬ女、

素人女と茶屋女との三角關係から悲劇も喜劇も出發してゐるが「粹所」情趣は、男は女の脚布の保護を受けてゐる、そして男を立引く意地が、「粹所」の意地とも見得ともなつてゐる。

この「粹所」氣質が、上方の物でなくして、江戸のものだ。上方の傾城買は、七百貫目の借錢にビクともせないことを見得としてゐるが、江戸の遊治郎は、女の脚布に縋ることを一種の色男として、見得ともしてゐる。箱根を西と東とでは、これだけの相異が、昔はあつたのだ、「梅ごよみ」を舞臺にのぼす以上は西と東とのこの心持が、ハツキリと舞臺に出ることの濃淡が、藝の成否のバロメーターとなる譯合であると思ふ。

春色梅暦（あふむ石）

丹次郎　延若
米八　魁車

米八。何もそんなに吃驚しないでも、可いぢやないか。私だつて來られない家ぢやあるまいし。但し仇吉の外入るべからずと、路次の口へ札でも出して置きや好いに。

丹次郎。何をつまらねえ。何しがた、あのそれ、櫻川の由次郎が來たからよ。

米八。おや、由次郎さんが島田に結つて……茶番ぢやあるまいし、もう澤山だ。

（と言ひつゝ土瓶の茶をつぎ一口のんで）

米八。こりや水だね。いくら暑い時分だからと云つて、馬鹿馬鹿しい。お茶でも入れてお置きなねえ。まるで夢中になつて居るんだよ。

丹次郎。來るさう〳〵、何でそんなに叱言を言ふのだ。

米八。言つても好いのさ。えゝ口惜しい。

丹次郎。これさ靜かにするが好い。外聞が悪いわな。

米八。仇吉さんとは靜かにおしな。私は女房だから遠慮はないよ。ねえ丹さん。毎日顏を見るたんびに、同じ事を云ふやうだが、一番初手は如何したつけ、それから如何してこれまでに、どれ程辛い思ひをしたかと言ふ事を、まあとつくりと考へて見た上で、私が無理か、仇吉さんが道理か……（と言ひかけ考へて）と云ふのも矢つ張こつちが無理と、諦めるより外は有るまい。（とため息をつき）あゝ、仇吉さんは羨ましいねえ。

「梅ごよみ」漫談

贅六の眼に映じた江戸の狹斜生活

富田泰彦

大近松の「重井筒」の羽織落しで、四月の道頓堀を背負ひ立つた延若、魁車の兩君を中心に、我童、長三郎、壽三郎、扇雀の四君を加へた賑やかな世話狂言が爲永春水原作の「梅暦」と云ふ珍らしい掘り出し物でもあり、同じ羽織が絡んで居るのも、妙な因緣とも云へる。一つは上方の心中淨瑠璃、一つは江戸の情痴を描寫した人情本――クッキリと氣分の變つた處も見つけものだ。

×

頽廢した江戸末期の、狹斜生活を描いた「梅暦」には、天保十二年の水野越前の大改革で、絶版まで命じられ、作者春水は手錠の刑にまで處せられたほどのエロチックな、彼のなめらかな筆觸の味は、到底現代の舞臺にも憚り多いことではあるが、木村錦花氏の脚色は、能く原作の味を傳へたのと、所謂「辰巳風」とも云ふ深川情調を巧みに捉へた處が、さすがにと肯ける。

一體「梅暦」が、道頓堀の舞臺に上演されることは、絶えてないのみか、肝腎本場の東京劇壇でも極めて稀なことであつた。「歌舞伎細見」の著者の傳へる處では、明治三年三月に始めて歌舞伎の世界に入つたとある。作者は瀨川如皐と河竹默阿彌で俳優は菊五郎などである。その他には勝諺藏の脚色のものもあり、大正四年二月故中村又五郎、松蔦などで明治座に岡本綺堂氏が改修して上演したと云ふ。――私はたしか六七年前かになる松島八千代座に故多見丸などで、「梅暦」が上演された時に態々出かけたことのある記憶がある。――是れは恐らく諺藏の脚色に依つたものであらう。

×

何れにしても、見せ場は尾花屋での丹次郎を中心に、米八と仇吉との出會ひと、羽織の絡んだ達引にある。――今度は此場で加賀太夫の新内を使ふさうだが、歌舞伎座では、清元、菊五

郎の初演の時は哥澤が欽め込まれてゐたらしい。尤も新内と「梅暦」との穿鑿なぞ野暮であつて「作者春水が開亭好人と云ふ匿名で、新内に材料を取つた艶本「滿倉表紙」天地人三册を物したり、文政七年は鯉丈と合作で春水と名乘りを上げて一明烏後正夢」その他の新内物の人情本を數々書いてゐる。取りわけ新内と深川との因緣も、浦里時次郎の道行にも絡んでゐるから、恐らく錦花君の最初の註文は、淸元よりも寧ろ新内の方ではなかつたのか。

×

兎に角深川の事情に通じた春水が、米八、仇吉の二人の藝妓を拉し來つて、羽織藝妓の現實描寫に成功した點は、見過せない。縮屋新助の美代吉にしろ、「娘節用」の小三金五郎にしろ、彼した悲劇的な結末をつけて、それだけローマンチックな匂ひを多分に盛つてはゐるが、眞の辰巳藝者の氣質は、この「梅暦」に能く出てゐるのではないかと思はれる。

×

江戸時代でも、根元の藝者で知られた深川、吉原を除いてはこゝの世界は一番に、歌舞伎狂言の題材にされたと云ふのにもいろ〳〵な事情もあらうが、仲町藝者は張とか意氣地とかの、江戸生粹の氣質を持つてゐた以外にも、それだけ手練手管に長けてゐた。「何樣命」と云ふ二の腕への「點」の流行つたのも、その心持の動きが判かる。――もう一つの原因は、こゝの藝者に限つて、二枚證文（今の二枚鑑札と云ふ意味）と云つて公然と色を賣ることが認められてゐた爲めだらう。

×

要するに辰巳の狹斜の巷には、いろ〳〵な情緒に富んだ異色が、ある行事や風俗からの色が傳へられてゐる。取りわけ江戸時代の代表的な色男としての丹次郎や、米八、仇吉にしても、それ〴〵如實に演出することは、中々の困難とされたものに違ひない。從來上演の機會の尠かつた原因の一つもこゝにあつたのではなからうかとも思ふ。もう一つは人情本の味とか、深川文化を偲ばす舞臺に氣分を出すことは頗る困難だと思ふ。一例を擧げるならば、三幕目の「松本」の場なぞである。松本は伊勢屋と共に、深川八幡地内の二軒茶屋として、有名な料亭だつた此間の「薩摩歌」の住吉三文茶屋の大道具にすら、南木萍水君から駄目の出た程の遣つつけだつた位だから尠からず危ぶまれる

×

しかし俳優としては、先づ大阪劇壇では、これ以上望まれない顔揃ひである。延若の丹次郎を始め、魁車の米八、我童の仇吉、扇雀のお蝶と何れも欽つてゐると思ふ。何んと云つても、今度での問題の狂言であるのみならず、是れが相當の舞臺効果を上げたとなると、大阪劇壇本年中の唯一の收穫と云ふも、過褒ではあるまい。

×

是れには諸先輩の考證も、豐富にもあらう。場違ひの私から敢えて云はでもの漫談を、如何に編輯子住田君からの御註文とは云へ、鳥渡忸怩たるものがある。こゝ等で我等も羽織の中裏を覗かれぬうち、小脇にまるめて引下がるとする。（三、四、二六）

江戸情調と深川唄女

中村魁車

『梅ごよみ』は、私が六ッ七ッの頃、たしか明治十五年八月神戸の多聞座で師匠鴈治郎の丹次郎、市川右田作の仇吉、嵐みんしの米八、實川家正の千葉の藤兵衛でありました、其時分私は成太郎を名乗つて、子役の千代松を勤めました。歌舞伎劇院本物が全盛で新作物なぞは全然上演されないこの當時に梅ごよみは歌舞伎劇の舊い總ての約束を離れた所謂現在の新派劇のやうな演出で上演しましたので、一般から異常なる人氣を博したやうでした。何分幼少の頃で研究になるやうな記憶もありません私も此度の梅暦では米八を勉めますが、この生粋の辰巳唄女を大阪人である私が何處まで演つて退けるか私自身でも疑問ですあの歯切れの好いてつかな意氣と張で實込んだ羽織唄女……を一寸想像して見ても不案な役です。自分の柄にないやうな氣もします、私のこんごの惱みは其處にあります、ここにこの狂言の大半は情調で見せる芝居ですから、そこに釀し出される江戸の空氣と云つたやうなもので、私等の意氣も浮ばれるのぢやないでしやうか、三田村先生なぞの御考證によりますと、辰巳藝者といふものは、素足に吾妻下駄で羽織を引かけにはをつて啖呵を切るやうな口吻で物を云ふのださうです。私も從來の意氣を脱して、可成そうした調子を出したいと思つてゐます。

その當時の傾斜の社會に得有な言葉もありますが、こんごは女同志の場合だけ遣つて、大體に普通の白詞で演ります、皆さんの御期待に添ふやうと、おさ〳〵研究を怠りなく致して居ります、大體こんな所でごめん下さい。

情調の芝居

木村錦花

去年七月歌舞伎座で上演した拙作の『梅暦』を、こんごも延若魁車我童諸氏に據つて、中座の舞臺へ上すからと通知のあつた時に、宜しいと云つて快諾はしたものゝ、一寸不安にもなつたのです。それと云ふのが此の狂言は筋の芝居でなくて、情調の芝居であるからで、俳優は伎藝より先に、情調を出す研究をしなければならないからです。歌舞伎座の時は、鏑木清方先生が道具帳は勿論、衣裳の好み、髪の結ひ方、持物まで、細心の指圖をして下さいましたのと、永井荷風先生が舞臺監督をして、俳優に深川氣分を吹込み、辰己情調を傳へたので、仇吉に扮した梅幸君、丹次郎の羽左衛門君、米八の宗十郎君、政次を勤めた源之助君までが、舞臺以外に道樂を出して、着物の着方、辰己言葉の抑揚など、夫々に研究してくれた爲に、辰己言葉が新橋の藝妓に使はれて、當時の流行になつて居た位であるから、芝居も大入で、三十日間打通したと云ふ樣な勢でした。こんごも俳優を適所に適材を用ゐて居る事だから、伎藝や配役の上に於いて申分はないが、只情調とか氣分とか云ふ點に就いて、そこまで研究してくれる時間があるか如何か、心酒しずには居られないのです。いつか浪花座で我童君が美代吉殺しをした時、慥か池田大伍氏の『名月八幡祭』であつたかと思ふ、幕毎に出る人の形が深川に成つて居なかつたのと、臺詞の中に町名の讀み樣が違つて居たりして、そんな事が氣になつて、折角面白い芝居を變な心持で見てしまつたのでした。然し『名月八幡祭』は筋も好く、脚本としても上乘のものですから、多少欠點が有つても好い樣なものゝ、こんごの『梅暦』はあれだけのもので、情調でも出なかつたら、到底物になるまいと思ひます。幸ひ舞臺監督の田中總一郎君が、これが爲に上京されて、萬事打合せの上、

この點を充分注意すると、呑込んで歸られた事故、同君を信頼して居る譯です。

夫から序幕尾花家の場で、仇吉と丹次郎の色合の間に、私は清元を遣つて書いたのですが、こんぢは新内にしたいと云ふ注文で、新内は何を遣ふか、舞臺監督にお任せしましたから好い樣なもの、、全體この場は歌澤に限るので、歌舞伎座は場内が廣い爲に、歌澤では聲が徹るまいと云ふ處から清元にしたので事情止むを得ないかも知れないが、梅暦に新内は如何であらうか、或は理窟抜きに成功するかも知れない。兎に角ぢんな結果が生まれるか、見當の附かない處に樂みがある譯です。

春色梅暦（あふむ石）

仇吉　我童
米八　魁車

仇吉。今ちよつと承つたが、私の上げた羽織がお氣にさはつて、土足で踏んでも未だ飽き足らず、大分御詫を並べなさるが、ぢうで縛れて免や角と、揉めた揚句は意地と意地離れ難ない兼言の、積る仇吉丹次郎と命をかけた二人の仲お氣の毒だが米八さん。ぢうでお前は無い縁だと、思ひ切つて貰ひたいね。

米八。御念の入つた御挨拶だが、まあお斷り申しませうよ。人の亭主を盗んで置いて、知れた時には貰はうとは、成るほど虫の好い人だ。旦那やお座敷で食傷をするだらうに、盗み食ひまでこせつかず、ちつとは慎んだが可いぢやないか。

仇吉。おや、私が何を盗んだえ、めつたな事をお言ひでない丹さんはお前の亭主か知らないが、お前さんを丹さんのおかみさんだと、一度だつて引合はされた事もなし……、披露をしたと云ふ話も聞かず、色となりやお前も私も五分と五分……此の後丹さんは、私一、で可愛がるから、然う思つておくれな。

米八。そりやあおかたじけ。ぢうぞ澤山可愛がつて、おくれと云ひたいが、まアよさうよ。滿更やめろと云ふ程な、野暮を云ふ氣はないけれど、お前のやうに無遠慮に、面當がましくされて見ると、なんぼ内氣のうんのろでも、然うさう默つちや居られないよ。

仇吉。默つて居られなきや、如何するんだい。

米八。如何するものか、何時までも此處に居て白い黑いをつけて貰ふのさ。

仇吉。犬の兒でも貰やしまいし。白い黑いもあるものか、然云ふお前の方でこそ、人の羽織を踏みつけて、はい左樣ならちや濟まないから、何とを埒を明けておいでよ。

米八。そりや雜作もない事さ、お望みならばどんなにでも、私が埒を明けて見せよう。

角座と松竹座

（五月興行配役一覽）

（角　座　新派劇一派）

久本　一世作

世紀末の男女　壹　幕（梗概）

男は自分の戀愛史を飾る材料に女の自殺を成功さすための努力だと言つた。

男の心を女は泣いたか？恨んだか？

男のための女は毒婦であつた。女は自殺の狂言を見せたに過ぎない、が然し男の冷淡さはそれをかへり見やうともしなかつた。

女は、男の小つぽけな惡魔振りを罵つた、そして、自分は男より以上の毒婦である事を男にしめした時、男は憤怒のあまり女を刺し殺した。そして自分も過失つて憎惡そのものゝなかに死んで行つた。

下村　悅夫原作
食滿　南北脚色

悲願千人斬　五幕十四場（梗概）

齋藤秀龍は主君山岐賴藝を討つて自ら稻葉城主となり、暴逆の限りを盡してゐた。

賴藝の忘れ形身太郎賴秀は、秀龍のため既に危き命を安國寺の住職白雲上人に救はれた白雲上人はその際西川兵左衞門といふ秀龍の家臣を斬つて捨てた。

これより先、稻葉城中にて能の催しのあつた時、賴藝の忠臣土佐青九郎は城中に忍び入つて能師葉桃左近の般若の面を盜まんとして左近を斬つて去つた。偶々來合せた白雲上人はその場にあつた天狗の面を持ち去つたのであつた。

以上が發端となつて、白雲上人を親の仇とつけねらう、西川兵左衞門の息軍太郎兄妹がありその背後には始終日根野備中守といふ秀龍の重臣があつた。

一方、太郎賴秀を庇ふ白雲上人の上には絶えず日根野備中守の眼が注がれてあつた。

白雲上人の弟の土佐青九郎は奇計をもつて自分の伜多門光春を太郎君の身代りとして、鵜沼の城主大澤治郎左衞門の許に預けた。美貌の多門と侍女の深雪は程なく想思の仲となり治郎左衞門の舍弟主水の嫉妬を買ひ、多門を太郎君と信ずる主水の口から事の仔細が備中守に洩らされる。備中守は西川軍太郎を白雲上人からの僞りの使者として多門をおびき出して殺害し、太郎君は既に亡き人の數に入つたものと安心してゐた。

その頃、賴藝の愛妾であつた三よしのの方は賴藝亡き後、秀龍の愛妾となつて賴藝の胤である秀龍の成育を唯一の樂しみにしてゐたが、土佐青九郎や、義龍の言葉に動かされて遂々義龍を殺してしまつた。

三よしのの方は義龍を稻葉の城主として立てようとして苦しんだ。その苦衷を察してゐる太郎君は我れとわが手に死を計つた。

伜多門既に亡く、今また太郎君に死なれて遂に悲しき願ひを立て、齋藤の家臣を對手に大暴れの末、白雲上人の身代りとして西川兄弟や又、左近の伜右近等の手に天晴れ一命を斷つてしまふのであつた。

―總配役―

土佐多門光春、土岐太郎賴秀（辻野良一）日

根野備中守(新田吉里)小姓三十郎(伊川章二)藤原安惠、竹中半兵衞重治(山本之彥)能師葉桃左近、下男佐助(一條新三郎)稻葉伊豫守(鈴木默堂)安倍仲麿、土佐青九郎兼光(中田正造)西川兵左衞門、僧覺信、大澤次郎左衞門(名越仙左衞門)狂言師重右衞門史思明、齋藤義龍(堀正夫)或る男、齋藤秀龍、大澤主水(芝田新)大伴貴司、能師葉桃右近(小波若郎)老僕林汀花、西川軍太郎(藤本正雄)安曇山、白雲上人(伊川八郎)みよしのの方(和歌浦糸子)花魁花扇軍太郎の妹お類(若柳葛子)侍女菖浦(濱地良子)侍女深雪、或る女(金剛麗子)侍女左枝(吉野靜江)侍女吳竹(中村仲次)花魁白妙(富士野葛枝)

(松竹座　岡田嘉子一座第三回公演)

中井　泰孝作並演出

天平傳說 なのいらつめ 奈岐女郎と久米仙　壹幕(梗概)

時代考證　吉川　觀方
洋樂編曲並指揮　篠原　正雄
舞臺意匠　大森　正男
背景製作　玉置　清
舞臺照明　岡本清次郎

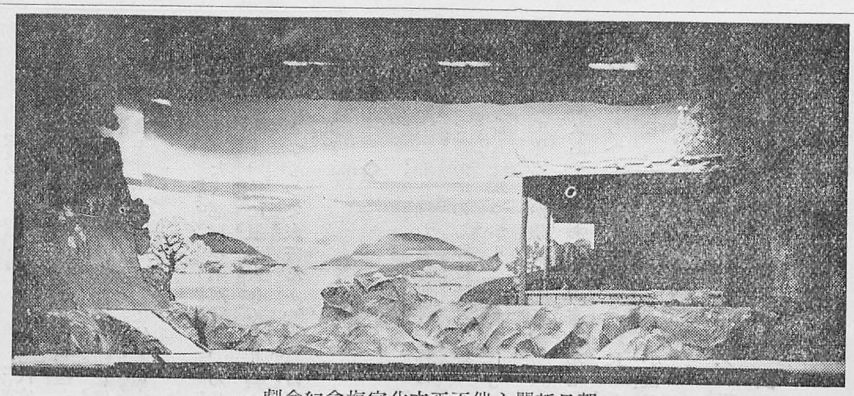
奈良朝時代の有名な傳說の一つである。

久米仙人があらゆる苦行を積んで仙術を得雲を呼んでその雲に乘り下界を見下し乍ら走つてゐると、一人の女が川で洗濯をしてゐた仙人はそれを見て仙術を失ひ下界に落ちてその女と夫婦になつた。そして今は奈良の大佛の建立の夫役として使はれてゐたが、その建立は一向はかどらなかつた。一日、奉行辨なる人が、久米が仙人である事を知つて仙術で何んとか早く建立の出來る樣にして貰ひたいと賴んだけれど久米仙人は『俺は今女に身を穢したから仙術は駄目だ』と斷つた。

友人である安曇仙人は、久米仙人が下界でつまらぬ日を送つてゐる事を知つて、速に仙人に歸れと忠告したが、久米は今は人間愛に生きてゐる、今更歸りたくないと言つた。然し安曇仙人は友人を思ひ、では下界での手柄をさせてやらんものと、自分が仙術で五色の雲を呼び、久米が使つてゐる樣に見せかけ、材木の切立てその他の工事を速にした。それで、久米仙人は高い位と褒賞を貰つた。

—重なる配役—

吉野不身人(松本要次郎)奈岐女郎(岡田嘉子)高の矢素麿(正宗秀夫)阿根(米津左喜子)安曇仙人(竹内良一)石上安出津麿(山中團九郎)



…… 劇念紀會場宣化文平天催主聞新日朝 ……
面臺舞の〔奈岐女郎と久米仙〕
舞臺意匠　大森正男

高橋蓼雨

◇

△ 親の死目にあはいでも、野球だけは缺かさぬ壽三郎、浪花座のがくやへ三球を据えつけて、瞬ぎもせで甲子園の戰報に夢中。

アナウンサーに心なく、危機一髪の刹那に米相塲にかはつたり、いよ〳〵こゝが關ケ原といふところで舞臺へ出る可き切掛がくる。

弟子白面を紅潮させ『いま切掛ですッ』と必死の一言。

『わかつてるワイ』、弟子を尻眼に逸散に舞臺へ。

弟子コソいゝ面の皮。

◇

△ 橋三郎は、まだこれに疋かけてゐる。

煮え湯を呑まさうが、少々金をつかひ込まうが。

『けふは松山と靜中だす、松山の山下は小粒で辛い山椒のやうなピッチャー、……靜岡の築地は、打撃も走塁も守備も』と野球のはなしをもち出したら、眼を細うして御恐悦、加之、つかひ込みの金も即座に帳消し。

霞仙の附き人ヒソ〳〵ばなし『内にもあの手で胡魔化さうか』

◇

△ 鷗外博士の高瀬舟。

赤貧な、魁車役の兄喜助が、死に瀕して死なれぬ長三郎役の弟幸吉にたのまれて殺し、その苦を助けた。

それが人殺しの罪に問はれて、代官所の役人に護られ、闇の川邊を大阪へ送られる高瀬船の船中で、囚人としてうけた僅々二百文の金を唯一の財産として恰も樂園へ向ふ心地。

これをみた大部屋の素寒貧が、乃公の方が金もちと、急に氣が大きくなり『オーイ鰻丼ひとつもつて來てんか』、墓口覗いて涼しい顔。

◇

△ 動物園の春を訪ねた子役連、檻の中で、どくろを卷いてゐる印度産の大蛇へ小石を投げて番人にみつかり『ヒャッー』。

なかで年嵩のが鐵面皮しく、

『叔父ちゃん、あの蛇、布でんな、芝居のこしらへもんみたいに……』に、番人手を拱いて『フーム、なるほど、小役が芝居の蛇と間違ふたのか』で無罪。

芝居へ歸つて惡企『ウフ、ッ、巧い巧い、今度は、虎のお尻を突いて、張り子の虎やいふたろ』、コレ〳〵。

◇

△ 海軍省の、石原北夫大佐が東京から來て『戰艦三笠』のけいこに立會うた。

なにがさて、戰場古參のつはものなり、日本海々戰の勇者とあるからには、鬼を欺く面構への武人とおもひのほか、これはまた溫厚篤實、歌舞伎役者の和事師にせまほしき優さ男。

下タ廻り、眼ひき袖ひき。

『不如歸の川島武夫は、あの人をモデルにしたもので？』

石原閣下、一ぱゐおごれ。

◇

△ 舞臺稽古中、切掛にて、敵彈が三笠の司令塔にあたつたといふつもりで、洪鐘のやうな音がする。

大勢の將士のうち、伊知地艦長ともあらう役の鴈藏は、悲鳴をあげてマストにしがみつき、秋山參謀に扮してゐる市昇は、尻餅ついて腰をぬかした。

この人たちに、水禽の羽音に驚いて逃げた平家の大將の役をさせたら天下一品。

◇

△ 長官はじめ、數多の將校が双眼鏡をあてゝ、水も泄らさじと敵艦を眺め、しばらくは外見もできぬ。

猾いのが、見當ちがひの西棧敷の藝妓のかたへ眼鏡を向けてニタ〳〵。

田中舞臺監督兩眼ギロリ『コレ〳〵、そちらの水雷母艦をみるやつがあるかッ』。

◇

△ 石原大佐の海戰ばなし。

『……、若しロ提督の率ゐるバルチック艦隊の半數でも、彼の浦鹽へはいつたら、海制權は彼にとられて沿岸は脅かされ、わが滿州軍百萬の糧食は斷たれます。

意恨に意恨を重ねて、寢た間も忘れず十年間研いで起つた戈を伏せて怨敵の軍門に降らねばなりません。

その敵艦は何時くるか、朝鮮海峽か、津輕か宗谷か、一體聯合艦隊は、どこで待つてゐるのか、彼我の消息が杳として判らぬため、日本中の老若男女、寢食を忘れて西の空をにらみ、寧き日とてはありませんでした』

老優右左次、衿を正して沈痛の面もち。

『ウーム、皆心配だしたな、わて等知らへんけど　』ウダ〳〵と。

◇

△ 市川右團次、熊本の巡業先から、加藤清正が家康のために一服盛られて、今に傳はるとかいふ毒消丸を母のみやげにもつてかへつた。

弟子の右若、大ヨタ飛ばし。

『わてが泊つた家には八陣の八ツ目へ出るやうな、鼠がたんと出ましたで……』

この鼠は、蝶々やハイカラに結ふてゐる

◇

△ このほど、曾我廼家蝶六の妻女おせつの方が死去した。

蝶六は、顏に似合はぬ愛妻家。

『べつに、そんなはづではなかつたのですが、ツイ物の機會から、嘘が嵩じて實となり、せうことなしに世間體だけの嫁孝行で……』

おせつさん、化けて出なはれや。

辰巳すがた十首

木村富子

二番目の木の音すれば佃なる船の唄さへきこゑくるかな

仇吉が隅田川堤の見初めなご昔めきたる幕もなつかし

巻き返す天紅の文ゑ丹次郎の胸にもつるゝ春の風かな

庭もせに踏みしだかれし羽織よりもつれし戀の悲しみはくる

薄藍に米八命ゑ書かれたる二の腕こそはなまめかしけれ

幕間の五月の風も心地よし辰己言葉の耳に殘れば

桟敷にもあの字まの字ゑ呼びかはす仇人の居てうつゝなき宵

仇吉がつゑ振上げて見がまへし象牙の撥にからむ緋ぶくさ

松本のからかさに降り仇吉の水髪匂ふ深川の雨

中裏の闇ほの白う米八の素足を濡らす夜の雨かな

戀巴稽古場漫談……

……杵屋正一郎

新曲所作事「戀巴」と書いた臺本が、私の家へ突然も突然、前ぶれなしに飛び込んで來た。其の次ぎの日に社長の命令で、作曲せよと通知が來た。これは大變だと思つて、改めて本を讀んだ。其の次ぎの日食滿さんが來て「ドヤ、戀巴の作曲はもう出來たか、一ぺん聞かしてんか」と。ワアツ、急がしい！〳〵、たすけてくれッ。

常盤津文賀太夫曰く「何しろ臺本を受取るとすぐ、まだ讀まない間に、南北さんに逢つたら、長唄の方はもうちやんと出來上がつてるから早くしろだとサ、べらんめエ天狗の孫ぢやア有るめエし、どうも食滿さんは意地が惡いや、御自分が脚本を書くのと同じ樣に思つて急き立てられるんだから、仕末におへねエや」

田中總一郎、文賀太夫、食滿南北、松田種次、杵屋正一郎と、こんな連中が稽古場の隅でさかんに雜談中、大川奥役が這入つて來て「ナンヤ、松竹座の稽古場見たいやナ」

一回も打合せをせずに各自が（義太夫、常盤津、長唄）思ひ〳〵に作曲した物だから、少々心細い處も有るが、そこはお顏の皮のお丈夫さで、みんな色にも出さず、河内家、新駒家、成駒家、豐田家の諸氏を聞き手に周して、一段を立派にやつてのけたが、不思議に意氣が合つて面白い。云はず語らず一同やれ〳〵の思ひで、めい〳〵に作曲をほめ合つてゐると、又食滿さんが横から「フン、脚本がエ、サカイヤ」

狂言物で有つて、酒が出て、太郎冠者と次郎冠者がよつぱらつて踊る、大名がおこる、追かけになる、こんな事なら、お茶の子サイ〳〵だと作曲にかゝると、どつこい、いつもの約束を全くすてゝ、ぐつと新らしくやれと云つて來た。三人片輪や、素袍落になつてはならないと、これでは「戀巴」でなくつて「變へたまへ」だ。

長三郎氏が、他の役が急がしくて、踊りの稽古がずつと後になつた、其間に扇雀さんが自分の振りの處をサツサと習つて終つて、ていねいにおじぎをして、みんなに「エヘ、どなたもおほけ有難う、エライむつかしおまんな、わてら中々どんなサカイ、おぼえられまへんは、エライエ、役だんな、おほけ有難う」あつちをむいて「サア、わてとこはもうすんだと、明日からでも初日明けてや」

太郎冠者と次郎冠者が、主人への申譯に毒藥を呑む處が有るが、魁車、長三郎の兩君が直ぐに呑むのは面白くないから、ジャンケンをして負けた方から先へ呑む事に仕樣じやないか、と話がきまる。それを聞いてゐた三津之丞君がこつちへ來て「流石は役者だね、いゝ處へ氣がついた」と、やたらに感心してゐる、はて、此の人は役者じやないのかしら。

兎に角面白い物が出來上るに違いない、狂言物と云つても、普通の喜劇風な物でないだけに、これは泪の狂言とでも云ふだらうか、チャツプリンの喜劇の樣な云ひかたになつたが、兎に角早く見たくなつて來た。僕の方は芝居の長唄連中の人たちへ、曲はすつかり渡して終つたから、初日は明日でもいゝと思つてゐる。（三・四・二九）

喜劇新人座の出陣

内山惣十郎

何か新しい芝居をしてみたい、劍劇はもう駄目、新派は勿論駄目、と言つて歌舞伎劇はこいつはこつちの方が出來ない、すると、あと殘つてゐるものは喜劇だけだ、そうだ、喜劇！**新しい喜劇**をやらうぢやないか……。

こんな話しが、一月二十八日の午後十一時半頃、神戸から大阪迄の間の列車の中で、庄野さん、小笠原君、そして僕と三人の間に起つた、その日は丁度、新潮劇解散の日のことであつた……新潮劇解散と同時に、僕達の間には、次の芝居の計畫が進められた。

二月三月は、小笠原君も僕も牧野へ行つて撮影に從事した、その間にも、準備は着々進められて、京都の宿で幾夜か徹夜で新しい喜劇の脚本を書いた、そして、どんな風なものが、現代人の要求に適うか？　いつ迄も、藝者や前垂れ掛で白足袋の二枚目の出る曾我廼家喜劇ではあるまい、女が髮の毛を散切りにして洋服を着る時代だ、洋館に住んで洋食を食ふ時代だ、カフエーの赤い青い電燈の下でエプロン姿の女給と、ジャズを聞き乍らコクテルを召上る時代だ、酒屋の小僧さんや魚屋さんのアンちゃんが、カルメンのハヴアネラを鼻唄に歌ふ時代だ。

だが、現在ある喜劇團で、この**昭和時代**を表現する樣なお芝居をしてゐる座があるだらうか？　相變らず三味線のお囃子で、藝者や妾や世話女房や、若旦那や會社員や印半纏着用の男が主人公のものばかり、いづれも明治時代かせい〳〵大正初期時代の人物登場のお芝居である、ジャズを合方に、モダンガールがチヤーレストンを踊るなんて喜劇は一つもない、これぢやあ駄目だ！　昭和時代には昭和時代を背景としたお芝居をしなくちゃ、喜劇はどん〳〵時勢からおいてきぼりにされてしまう。

諸し！　ジャズバンド合方の喜劇をやらうモボやモガの活躍する喜劇をやらう、曾我廼家も志賀廼家も眞似の出來ない、とても新しい喜劇をやらう！　そこで庄野さんは、東京へわざ〳〵出掛けて、新劇協會と比肩する新劇團である所の、近代劇場金平群之助一座をそつくりそのまゝ呼んで來た、そこへ、音羽六藏のペンネームで、脚本も書けば舞臺にも立つ武田正憲君が驅せ參じた、女優は、**新派**—**劍劇**—**歌劇**—**映畫**などから、若くて美しい連中を二十名近くも網羅した、脚本は**番物**ある明治初期の**散切物**あり、**新派**あり**新劇**ありモダンコメディーあり、**漫畫劇**、**寸劇**、然して、幕間には**漫談**、**舞踊**、**ダンス**などをやつて觀客を退屈せしめまい……と言ふ段取りで第一回興行を、最も大衆的劇場である所の樂天地で、四月三十日より素晴らしい勢込みで開演したのである。

兎に角、如何に喜劇團として從來の喜劇に比較して新しいか！　そして、近代人の求めんとしてゐるものにしつくりと適合してゐるか？　その出し物を見て貰ひたい。

第一門脇陽一郎作「**今鳴いた鳥**」一幕、第二音羽六藏作並に演出佐々紅葉作曲井上起久子合唱指導内山惣十郎舞踊振付專屬オーケストラ演奏「**天平喜劇繼の手古奈**」一幕、幕間「**漫談**」正岡蓉、第三三木葉一郎作社會劇「**空腹**」一幕、第四岡本一平畫伯原作井上德二郎脚色漫畫劇「**氣の拔けた仇討**」四場、幕間「ダンス・**チャーレストン**」、第五德田純宏作内山惣十郎演出ジャズバンド演奏（特にこれには、美人座、赤玉食堂、チャーレストンカフエー等の女給が毎日替りで出演。

素敵ぢやないか!!　第二回興行は、もつと素晴しいプログラムでやることになつてゐる即ち

第一川口尙輝作並に演出學生喜劇「**スポーツマン**」一幕、第二内山惣十郎作鳥江銕也作歌作曲者未定人情喜劇「**紺屋高尾**」三幕三場、幕間「漫談」出演者未定、第三音羽六藏作並に演出社會喜劇「**二つの爭議**」一幕、第四河竹默阿彌翁作小村隆彦演出「**人間萬事金世中**」三場、幕間「**舞踊**」未定、第五内山惣十郎作並に演出ジャズバンド演奏「モダンコメディ**モガ、モボ、モガ〳〵物語**」六景

專屬ジャズバンドを持つてゐるのは、とに角喜劇**新人座**だけだらう、脚本も上演毎五つづゝ必らず目新らしいものを揃えることになつてゐる、それで日下大平野虹、沼田藏六、音羽六藏君等の中老組や、鳥江銕也、川口尙輝、德田純宏君等一騎當千の青年？組も、向鉢巻でアツと吃驚するような、とても素敵な脚本を執筆中である。

僕は、必らず、此の僕達の新しい芝居が、きつと今に世間から、嵐の如き歡呼を以つて迎えられるだらうといふことを、自惚れでなく、確く信じてゐる。まあ如何に愉快で、潑溂たる新鮮さを持つてゐるか、是非一度觀て下さい!!

樂書帖の一

鐵の爪生

明治の泰西文明模倣期より、大正の戀慕文明期を經て形成された昭和日本の消化文明が？天平時代のそれと過程に於て非常な共通點を見出すとでもいふか、わが親愛なる朝日新聞社主催の『天平文化宣揚會』なるもの、人騷がせの世評はあれど、誠に當を得たるものとして目出度し、目出度序でに東西劇壇に於ける『脚色大流行』の脚色なるもの、日本文化のそれと氣脈相通じて甚だ頼母しい、呵々!!

◇

關西劇壇の權威ある作家に依囑されて『天平時代劇』なるものが執筆された、が如何に筆器用な諸作家でも、この唐突的な注文には少々惶て氣味であつた。就いては、軈て近い將來に必ず『天保時代の文化宣揚會』なるものが何虛かの新聞社で主催されさうだ。その時になつてまごつくのも智慧のない話、自信ある作家は今から天保時代の研究を始め給へが、さて、この劇作に白羽の矢の當る作家は誰と誰かこいつは今から樂しみだて

ちゃるめだより

朝郎さん足下。

鴈治郎の乘込んだ歌舞伎座の素晴らしい景氣を見せたいね。二千數百人の大劇場がきらびやかな看客でいつぱいだ。さうしてそれが二十六日の最終日まで賣切れてゐるのだから豪勢さ。なかにはこんな種類の見物がある。結婚披露觀劇宴でもいふのか花嫁花聟を盛裝させて双方の親族達が三十人ばかり紋附羽織袴でぞろ〳〵食堂の方へ繰り込んで行く。なんと獨りぼつちの朝郎さん、甘い奴等だとでも罵つて見るか。

それもい、歌舞伎座の樂屋では大入祝だといふので稻荷祭の準備をはじめた。それがたゞの稻荷さんのことならどこまでもといふやうな大阪式ではなくずんと驕つた奴で、二三日前から樂屋の連中惣がゝりで廊下や天井隅々の處まで紅白の幔幕を新調して櫻のつり枝、紅提灯、ところ〴〵へは狂言に因んだ造り物や趣向の柱掛け裝飾を凝らして當日はひねき筋や友人知己を招待して折詰お供へ摸擬店接待よろしくあらうといふ派手やかさだ此費用驚く勿れ千數百圓。一體この費用が何處から出るといふと幹部俳優その他の懷ろマネー。無論歌舞伎の樂屋らしい昔の習慣である。

大阪ではこつくの昔かうした習慣は廢れてたゝへ如何なることがあらうとも壹圓五拾錢以上は出させぬ法則。すべての文化は東京がなんといつても先だ、その東京にかういつた習慣がのこされて大阪にはもう無い。なんだかあべこべのやうだ。つまりこんな處にも現代の矛盾を發見するわけである。

鴈治郎の上京について二つのおもしろい噂がもち上つた。

鴈治郎が東京へ來ると蝸殼町の相場が下るといふので蝸殼町の仲買連名は鴈治郎に退京を要求する交渉をはじめたといふ噂がその一つである。市中のあちらこちら遊廓などでも盛んにこの問題が論議された。鴈治郎びゐきは何故にそのやうに相場が下るのか鴈治郎はいつの間に相場に手を出すやうになつたのかと旅館の細川へ頻々として電話がかゝる。番頭の清やんこぼして曰ク『さうやなうても用多がいのに、せつしよな噂やな』もうひとつは例の洋行問題、東京朝日には時期費用狂言萬端くはしく報道されてこれまた市中を驚かした。當人の知らぬことまで悉しく書かれてあつてモウ明日にでも出發するやうな記事の書きぶり、ひねき

筋はまた案じて相場で儲けたから洋行をするのかも解らぬと半信半疑ながらまた〳〵電話で問合せがくる。『モシ〳〵二十五萬圓の洋行費用を儲けたとはエライね』『洋行は事實か、いつ出發する』なぞゝいろ〳〵。鴈治郎よろしく例の八方『朝日新聞があない書いてくれはりまつさかい行かんならんと思ふてまんね』といふ返事。『金は大丈夫か』とまた親切な問合せに鴈治郎拔からず『それは朝日新聞が出してくれはりまつしやろ』

東西合同とは云ひながら箱登羅、莚女吉三郎、成太郎おまけに成駒家の番頭で鴈之助の親の天野までが東京生れ。樂屋では案外に大阪辯の勢力がうすゐ。そこで九團次『京で生れて東京で育ち今ぢや大阪……』あとの文句がちよつとつけにくいそうだ。

若い頃の己れを思ひながら芝居をしまつて築地の河岸を旅館の方へ獨りでのこ〳〵歩きながら歸つて行く箱登羅君に二三人の藝妓連が擦れ違つた。三四歩ばかり過ぎると藝妓の一人が大きな聲を出して『田村さん』と箱登羅君の本名を呼んだ。箱登羅君の胸へふわりと温かい物を投げ入れたやうに感じて變にむづ掻ゆかつたがとりあへず箱登羅君は『ハイ』と返答をした。さうして改めてふり返つて見ると、呼びかけたらしい藝妓は箱登羅君の傍の方を通つてゐた旦那風な男を捉へてすでに馴れ〳〵しく喋言つてゐた。

◇

松屋といふ百貨店へ入ると現代のあらゆる女性の容が見られます。

地肌の透けた薄い黑の靴下を膝まで出して腰卷のやうな短かいスカートを履いた巴里の女のやうな娘さんが澤山に入つて來ます。これが休憩室の椅子へふかく腰をかけてゐると大根のやうに太い股まで見えるのです。私はわからない、なぜに生娘がこんな挑發的な姿をしなければならないのでせう。かうして朝郎さんのやうな若い男を惱ませた上でごうしやうといふのでせう。わからない。また食堂では朝郎さんのやうな色男をすでに占領した女が（勿論モダンで）得々としてちら〳〵周圍のテーブルを見廻しては內密のやうに何か男に囁くのです。なんといふ圖々しさでせう。これは圖々しいといふ私が間違つてゐるんでせうか。

手提袋から細いやよいを出して吸つてゐるオールドミスが一つ〳〵夫婦連れや何かの男女の組をいつまでもぐ〳〵眺めてゐるといふやうな現代の悲哀を見ることもあります。人待ち顏の女學生風があるそこへ友達と見える女と學生の男が來る人待顏は『ずいぶん待つたわよ』といふ。友達の女「ごうもすみません」男學生「今日は」人待ち顏「何處かおごつてくれるの」友達の女「えゝ、いゝこと」こんな會話をしてゐる三人がある。ちよつと一時間ばかりの所見が以上のやうな有樣です。

痛快無比な芝居

川村花菱

帝劇に於ける「うるさき人々」の上演はかなりいろ〳〵の問題を起して至る所大好評であつた。ほめられて惡い感じを持つ人はあまり世の中にたんとないが、作品ばかりは賞讃の言葉が必らずしも作者に取つて此の上ない喜びと云ふ事はない。くそみそに云はれてもどこかの底に自分丈で信じて居るものに由つて大きい安心を持つ事もあるが、「うるさき人々」ばかりは、ほめられたと云ふ事よりは、自分の書かうとした事、表現しやうとした意圖が思ふ存分に舞臺の上に表はれて、作者の期待が裏切られないばかりでなくより以上にいゝものになつて表はれて來たと云ふ事に近來にないうれしいものだつた。痛快此の上ないものだつた。

それは大澤大休の表はし方に於て、私はいろ〳〵苦心した結果、高田實の演技、その演出の手順と云ふやうなものを隨所に拜借した事が、極めてよく此の芝居にはまつた事で、調子と云ひ柄と云ひ、高田とは全く反對なものを持つて居る澤田君を、高田に似て居るとか、高田そつくりだとか云はれた批評家もあつた位で、作者としては、全く自分の考が壺にはまつたと云ふ愉快があつた實際杉村さんの原作「うるさき人々を」脚色してくれと朝日の方から頼まれた時には、怎にも手の出しやうのない難脚色だと思つて、幾度御斷りしやうと思つたか分らないが、いろ〳〵の事情でそれもならず、ほんとうに一かバチかの運定めのつもりで、ともかく面白い芝居にして見度いと云ふ考へで脚色した。脚色の技巧は、前に云つた、高田式の應用と恩師紅綠先生の手法をそつくり拜借に及んでの拵へものである。もし演出し高い香りがあれば、それは原作と新國劇の力で、私は全く一勞働者のやうな立場で書いたものである。

然し、結果は好評だつた。望外の幸福であつた。澤田君も大變氣に入つて居たやうだ。

一體私は、變に自分の作の上演を見るのがきらいなたちで、多く見て二度位、それもイヤ〳〵行く事が多いのだが、此度の帝劇

ばかりは、毎日毎日そゝられるやうな心持で「うるさき人々」を見たくなつた。五六回も見に行つたらうと思ふ。見る度に痛快だつた。たまらなく快感を覺えた。他の演出をわるく云ふ事は失禮だが、同じ東京で某劇團の「うるさき人々」を見た時には、それがあんまりきたないので、とても見て居られなくなつて來て、幕がしまるとすぐ圓タクを命じて澤田君の芝居に飛んで行つた事がある。救はれ度いと云ふ心持が一杯で、息せき切つて芝居へ這入ると、丁度大詰がしまつた所で、ほんの一足ちがいで戀人に會へなかつたやうな、さびしいほろ〳〵したやうな氣持になつた事もある。

自作の上演が、私をこんなにまでよろこばしてくれた事は、生れてはじめてと云つてもいゝ。私はまだ見度い。大阪へも行き度いと思ふ。

原作の味が、コセ〳〵した現代に見られない痛快味のある事は勿論で、私はそれにも感謝して居るが、猶一つ此度の演出に多大の効果をもたらした事は、誰れが何と云つても和田さんの舞臺意匠の力である。和田さんの熱心にはしみ〴〵涙の出る程だつた。此のはなしは、又餘談として、いろ〳〵書いて見度い事があるが、大詰私が黑バックと指定したお寺の所を、鶯色の雲形にされた事などは、云ふまでもないが、さすがは日本一の大家の力の恐ろしさを、私は拜み度いやうな心持で見た。

『浪人の群』上演について

金子洋文

三年ばかり前の一夜『舞臺評論』の主催で大阪のある會堂で芝居の話をした事があります。その時私は現代の人々が二つの演劇を要求してゐる：：を話しました、力の演劇とノンセンスの演劇と――この考へは今でも變りありません、そして私は作劇に於てそれ

を實行してゐるつもりです。

これはたんにお客さんに、うける意味に言つてゐるのではありません、結果に於て要求してゐるものを與へる以上うけることになるでせうが、この理論の根據は今日の社會生活から出てきてゐるのです。そしてこの二つの要求はいろ〳〵な姿となつてあらはれ、ます〳〵急速になり、突鋭的になり、單純になり、複雜になつてくるでせうが、今日の社會生活が何等かの意味に於て打開されない以上つゞくことゝ思ひます。漫畫、喜劇、萬歳が喜ばれるのも、劍劇、社會劇、スポーツ劇が流行するのも悉く現代の社會生活の反映です。

だが、今日では利潤と結びついた愚かな笑劇や劍劇のため荒されきつてゐます、大衆はたゞ漠然と笑ひや力を求めてゐます、がその方向を指示し、その意識を高め發展させやうとする點に、大衆的な脚本を書く私の意圖があるのです、だから私の脚本はたゞへ髣物を書いてもその本意は現代の人間生活を表現してゐるのです。そこに從來の舊芝居とそぐはないさま〳〵なものがあつたにしても私は又その矛盾に新らしい喜びを感じてゐるのです。

◇

新國劇にはこれまでに「劍」「髪」「浪人の群」の三つの脚本を書きました。「劍」は新國劇にあてはめて書いたものではありません、愚かな劍劇のばつこに憤りを感じて京都のある宿屋で主題と構想をまとめました。主題は「劍は遂に人間を救ふことは出來ない」それでは大衆の要求してゐる力を、どうすればよいか、それは「髪」にあるやうに結ばれた劍でなければならない、が、正しい理論をもたなければその團結も「髪」に於ける鎖國攘夷連の愚な結果に終ることになる。この二つのものが漸く「浪人の群」に發展して實を結んでゐるのです。だから、以上の三つの大衆劇はそれ〴〵獨立はしてゐるが一貫した傾向にある三部作と云へるでせう。

「劍」は個人を取扱ひ、「髪」は衆團の中の個人を、「浪人の群」は衆團を取扱つてゐる點から見ても、その發展の形は充分了解されることゝ思ひます。

三つの芝居のうち帝國劇場で見た「浪人の群」は作者に最も歡びを與へました、人によつて「劍」を佳しとするもの「髪」を佳しとするものさま〳〵ですが、私は昨夏帝國劇場で見た「劍」よりもはるかに大きな感動をうけました。

結末、細川と女の死が一般に通じないと言ふので改めました。解決の仕方としては双方とも充分理窟があるのですが、前者はからく後者はわかりよく自然かも知れません。

『掏摸の家』から語る

長谷川伸

『掏摸の家』は澤田正二郎氏によつて演ぜられた後に伊井蓉峯氏も演じた。この戯曲は一昨年あたりから本氣になつて始めた幾つかの私の戯曲製作のうちで上演された五度目のものである。

私の戯曲が近代劇の影響を殊更に受けまいとした——歐風回避を可成りに努めた——製作である事は、幾つかの拙作を讀んでくれた方にはわかつてゐる事と思ふ。

別な一つのいひ方をすれば『私の大衆文藝』が舞臺に進出を企てた現はれが『私の戯曲』であるのである。出來るだけ現在の實行約束を踐んでの劇作がどの程度までモノになるか則り知れないが、もし、他の人々がいふ言葉を借りて申せば『大衆文藝的戯曲』へ乘り出したものである。もつとも大衆文藝的戯曲といつても『私の』であつて決して全的な意味での『大衆文藝的戯曲』といひ切る程まだ大膽にはなり切れずにゐる今の場合である。

勿論、他の人がいふやうに劍劇大衆文藝ではなくどこまでも『私の』である。

澤田正二郎氏の演出に就いて友人間には大分不服がある、それは私も甚だその論旨に肯くものであるが澤田氏の演出が作者の意に反してゐるとは斷じて思つてゐない。私の戯曲には往々にして二種の演出餘地が與へてある。一つは澤田氏の演出したやうなやり方、も一つはその反對な手法をとるものである。故に先づ澤田氏がその一つの演出に驀進した事は作者の豫期の如くに針路をと

つた順風に孕める帆である。よろしいのである。

私は市村座に於ける初演の折その舞臺稽古を見た、珍しさうに感心するでもないが澤田氏の舞臺監督振りは痛快でもあり熱心でもあり深切でもあつた。さういふ事を知つてゐては頭から滿足せずにはゐられない。

さいふ事は江戸ッ子にはなりきれまいと初日前に思つてゐたのが明快に江戸ッ子になり切つてゐた、早間な調子で押包み破綻を毫もみせまいとして成功した澤田氏であるのだからいへるのである、感情でものをいふ私ではない。

次手に手前勝手を少しいはせて頂きたい。東京、京都以外では私の戯曲が脚光をあびるのは最初である、東京六回、京都一回、あまり自慢にもならない數で駈出しを物語るものはある。

しかし、私の戯曲は大抵は舞臺にかけられる自信を持つた物ばかりである、手前味噌をいへば實演にあてはまるいい戯曲を書きたい爲めに永らくの下積み時代を閲みし來つた私である。

だから『掏摸の家』だけで私の劇作力量をはかつて貰つては甚だ以つて口惜しいのである、まだ〳〵いいのがある、のみならずまだ〳〵いいのが作られる筈である。かう斷はつて置きたいのである。

「道頓堀」往來

◇永田衡吉氏　作「平家の人々」は中座五月興行上演について同氏は本月二日來阪稽古に立會ふ。

◇山上貞一氏　去月中旬天王寺區松ヶ鼻町八十一番地へ轉居した。

◇川村花菱氏　脚色「うるさき人々」は浪花座五月興行に上演に就き觀劇のため近日來阪の由。

◇中座合評會　「サンデー毎日」主催にかゝる同會の第二回は來る五月四日中座に於て開催さる。來會者は高安吸江、木谷蓬吟、中井浩水、富田泰彦、森ほのほ、高谷伸、石割松太郎、南木萍水、高原慶三、食滿南北山口草平、伊藤金次郎の諸氏出席の筈。

◇樋口幽堂氏　住吉區天王寺町千八百四十一番地に轉居。

◇中村吉藏氏　郷里津和野より歸東の途路寶塚京都等に立寄り二日歸京した。

◇木村錦花氏　脚色「春色梅暦」は中座五月興行に上演のため四日來阪觀劇する由。

◇鳥江鉄也氏　四月初旬南區高津八番丁一番地へ轉居。

◇日比繁治郎氏　は東京歌舞伎座鳩治郎劇のため東上、京橋區木挽町關旅館に滯留中。

道頓堀行進曲

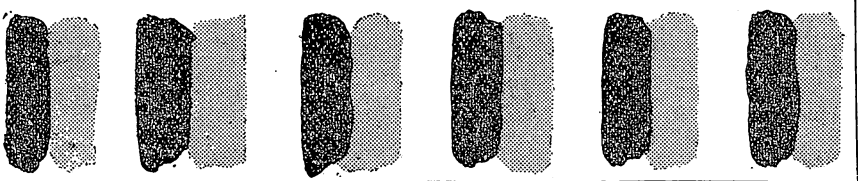
（2）

夜のこばりを
まつ赤にそめて
あこがれつぶふ
劇場のちまた
道頓堀が忘られよか

もつれ行く群れ
あしもとかるい
人は波うつ
心はおぢる
道頓堀が忘られよか

戀はしばゐの
むかしも今も
繪そらごさへ
うつくしものを
おゝなつかしの道頓堀よ

作歌　日比繁治郎



金平を描き度くなつた氣持

鎌谷來水

五月浪花座で澤田君が「金平化生討」を上演して呉れることになつた。

拙作に就いては、今月發行の「新國劇」の創刊號で大體所感を述べ盡して了つたので、今更「そも〳〵金平は」と開き直る丈けの材料もなし、殊に蕪雜な脚本を掲載されたのだから、一讀を願へば夫れ以上何も云ふことも、聞いて貰ふこともない。

前以つてこの一篇に托した作者の主觀は、什うの斯うのと註釋して置かないと、呑込めぬやうな難解なものではなし、唯ホンノ見へた向きの作品だから、什うにも勿體ぶる事が出來ず、愈々窮してペンは徒らに原稿用紙の上で立往生。

だがさうもならないからこの脚本を描き度くなつた氣持や心積りを鳥渡書くことにする。

新國劇に一番堂々と所作事の銘を打たせ、澤田君を主人公にして踊らせたら、世間ではドンナことを演るだらうかと、頗る興味を以つて迎へて呉れ、キット問題になるに違ひないと考へたのが一つ、

夫れには中車や幸四郎あたりが上演する「幡隨院長兵衛」の劇中の劇に『法問諍』で幾月目に一度位蟲干され埃りにまぶれ下積になつて誰れにも顧みられない、隨市川の荒事の其先驅である金平を昭和時代に又候引揩り出すに限ると思ひついたが、其大きな腕白小僧の樣な痛快極まる性格に、澤田君がピッタリ欲つてゐる（と信じてゐる）これには猿之助でも勿論左團次でもない、他の歌舞伎俳優中を漁り廻しても見出せないものが、唯一人澤田君だけが御誂へ向きに持合せた（と信じてゐる）澤田君が金平か？金平クンが澤田か？、友右衛門が元右衛門かの亞流で、其儘即身の金平が出來上ると信じたのが一つ、

近頃芝居が理に入り過ぎ、變態心理を取扱つたり、餘り實世間に即して陰影を觀せたりするものだから、見物が娯樂氣分を失つて、理性は一杯捻じたゼンマイのやうに始終緊張を續けるので肩が凝る。それに一番蠻的な抵抗療法を試み度い、べら棒

な荒唐無稽で理性を煙に巻きブル〳〵〳〵とゼンマイを戻させて唯呆然とした境地へ虜にし度いのが一つ、

夫れには思ひ切つた色調の誇張と、雄勁な線のなぐり書が必要であるが、金平といふ人物を完全に劇の箱詰めにするには、其間隙に鉋屑代りにナンセンスをばぎつちり詰めやうと云ふので、寫實に流れた歌舞伎俳優がトント等閑にしてゐる勿體ないケレンをば逆用して、途分もない空想を描き、見物よりも先づ作者の方が溜飲をば下げ度いといふ誇大妄想狂の現はれが其一つ、

尙作曲、振附、舞臺意匠、演出者まで悉く大阪人士で演つて見たいとの平素の希望も一つである、演出者である新國劇の座員諸君はこの大阪を發祥の地としてゐるのだから、大阪人として扱つても敢へて差支へはないと思ふ。

こんな氣持が醱酵して茲に「金平化生討」の一篇となつて現はれた譯であるが、讀者諸君にも想像がつく通り隨分費用のかゝる所作事でお負けに舞臺効果を作曲、振附、演出者等に殆んど責任を負はせ、こちらは懷手をしてゐるやうな隨分蟲のいゝ脚本である、人一倍脚本選定に神經を惱ます澤田君がこれを上演して呉れることになつたのは何よりも有難い。

脚本は御覽の通り甚だお粗末なデッサンに過ぎないが鶴澤友次郎師の節調、加へて、竹本律太夫師の詞調と大阪傳統藝術である義太夫の總本山文樂座の兩紋下に土着の舞踊の名家楳茂都扇性、陸平兩師の愉快な振附、化物に造詣の深い菅楯彥畵伯の苦心の舞臺意匠、斯く華城藝苑一流の名士がこれに思ふ存分色彩を塗抹して呉れ、最後の仕上が澤田君だから、こりや大丈夫い、價に賣れるわいと今から安心してゐる、がそれでもあすこを斯う變へれば良かつたとの慾が後から專繰沸いて來くので甚だ困つてゐる、こりや作者の共通心理であるが……

この初演は今春浪花座で行はれる筈を遲延し、豫定の三月の帝劇にも出なかつたが、愈々今度舞臺に上せられることになつた、然しこの遲延は反つて好結果を齎してゐるやうに思はれると云ふのは一月以降ズウーと澤田君初め座員の人々が大變興味を持つて呉れて間斷ない猛練習を續けられ、最近の根岸若之助君の音信に謙遜乍ら「今日までの稽古で全部纏りは一應つきました」とあり「一同の熱心さには御期待下さる樣、此點は何卒御安堵下さい」と書いてあるので、その完成振を想像するに難くないからである、同時に不馴れな努力に精進された座員諸君と、その補佐の任に謁された根岸君の盡力に感謝して止まないといふと何だか月並のやうであるが衷心さう思つてゐる。

到頭頭も尻尾もないやうなことを描いて了つて甚だ濟まない作品と同樣だと笑讀を願つて置かう。(三、四、二三)

現代大衆の欲求を代表する二潮流

澤田正二郎

何が果して、昭和三年の劇界を指針する中心潮流であらうか——？かうした疑問に、毎年繰り返すことであつて、今年もまた、この案問はごれくらゐ私を惱ませたであらう。だが、かうした豫想は、恐らく、私達はかりでなく、また私達の演劇社會ばかりでなく、政治界にも、經濟界にも、文壇にも、あらゆる社會に於いて、それ〴〵豫想され議論される一種の年中行事である。が、しかし、その的中は、餘程見識ある卓見者に非るかぎり甚だ困難なことであつて、議論はさま〴〵何れの方向よりも一應は立てられるものである。結句、一寸先は誰にも暗である。

だが、只一つ、かういふことだけは斷言し得ると思ふ。それは、次の時代、次の年を指針するものは、常にその當時の時代生活の欲求に發するといふこと——即ち、時代の大衆が、その時代生活の過程に於て最も切實に要求するものは何であるかを洞察して、これを適確に把握した者が最も正確に近い解答者であるといふことである。

そこで昭和三年の劇界である。今年度の劇界の指針となる中心潮流は何であるか、云ひかへれば新時代の觀衆心理は、果して何物を要求してゐるか？——である。

問題は要するにこれであつて、私はこれが、恐らく左の二潮流によつて代表し得られるであらうと信ずる。

その第一は、强烈なる感覺的刺戟の要求である。それもたゞの刺戟では既に駄目である。求められるものは神經の末梢の末梢まで刺し戰かせるやうな刺戟である。

あらゆる心的なるもの、形而上的なるもの、さうした根據にある一切の理想を見失つて、人生の全てを悉く唯物的機械的立

脚によつて認識し、制度も道德をも、一切をこの範疇内にのみ求めねばならないアナクロニズムの現代にあつては、人は果して何によつて生存の感激を求むべきか。古い理想は光を失ひ、ありふれた人情は燃ゆべき力もない。感じうるものは感覺である。神經である。苦も樂も、今はこれを放れて何處にあらう。

もその感覺は、日ごとに刺戟を失つてゆく、強く〳〵、新しく〳〵求めてやまない感覺の刺戟である。ありふれた濡れ塲なごでは、もう涙も出ない。例へそれが感情の世界にあつても、餘程そこに新しい奇强な神經の作用を含有しない以上もはや人は動かない。要するに針刺すやうな感覺の刺戟で、漸く舞臺美を味ふ時代である。

次は極めてユーモラスの要求である。これはグロテスクな前述の要求と比して甚だ矛盾のやうであるが、實は決してさうではない。もしこれが矛盾であるとしたならば、その矛盾こそ、息苦しい現代生活の持つ、獨特の惱みであらう。

今もいふ通り、現代の生活は、一切を物的基調においた結果その生活には朗らかな餘裕がなくなつた。何もかもが重苦しい暗い物的生活に閉され追はれて、何處を見ても笑ひがない。何處を眺めても明るさがない。そのくせ人は、自分自身のその息苦しい生活、灰色な澁面に自ら堪へられなくなつてきた。何でもいゝ。此世にもつと朗らかな氣持はないものかしら、何か肚から、生活の憂さを忘れて微笑めるやうな世界はないものかしら、この蒸し殺されさうな行き詰つた生活を逃れて、せめて、一と時でも涼しい風に胸をひろげてみたい——自ら墮つた暗い世紀末的な生活の窓から、せめて明るい哄笑ひの光りを求めたい。この要求が、その第二である。

以上の二潮流——これが現代觀衆心理の代表的なるものではあるまいか。だが、かうした見界は一見甚だ否定的悲觀的であつて、一部の人士からは當然非難を免れないことであるかも知れない。しかし、よかれ惡かれ、これは正直なる事實である。そして、この惱ましい時代苦の底をくゞつてこそ、あらゆる次の新しいもの、光りあるものが生れるであらう。云はゞ黎明の前の暗である。生れ出づる前の惱みである。いや、既に、この二つの流れの矛盾そのものが、明らかにこれを物語つてゐると思ふ。即ち强烈な感覺要求の生活は人類生活の絶望的底邊の現れであつて、笑ひを求むる心は、その絶望の寂しさに堪へかねて新たに明るいもの、にこやかなものを求める次の光明への憧憬でなくて何であらう。腫むべきものは腫ましめよ。切開の日は近づくであらう。この二つの最も顯著な欲求を、隨所に具備したものが今度の四大狂言である。敢て私はこれを携げて、今年二度目の御目見得の陣立とした。

試みに投げたこの石が、今年の劇界にどの程度の効果を齎し得るか、樂しみにして目ら待つものである。

浪花座五月興行上演（杉村楚人冠原作 川村花菱脚色）

芝居見たまゝ

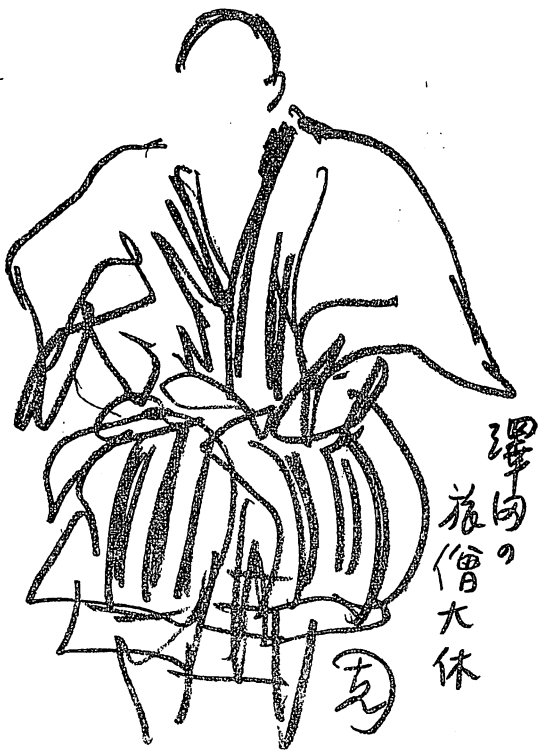
うるさき人々

内山惣十郎

序幕第一場——雑木山

舞臺は一面の冬枯れた雑木山、紅の葉をつけた丈の低い櫨の木、思ひもよらぬ所に、名もない草の葉がさびしい中に青い色を見せてゐます、木立の奥はずつと空になつて、本立の幹や梢に夜の露が立ちこめてゐます——歳末近い寒い夜です。

小百姓の音吉、平藏、林太郎の三人が文三の所有である此の雑木山へこつそり自然薯を掘りに來てゐますと、「村井」と書いた提灯の火が近づいて來るので、吃驚して三人はコソコソと逃げて行く——と、村井家の書生澤村と、下男の要作とが提灯をつけて山の見廻りにやつて來ます、そして、又しても村人が、芋堀りに來ては、山を荒してゆくことを憎らしそうに要作は言ひます、要作は、村の人々が文三を鬼文〳〵と言つて、誰れ一人よく思はないのに、彼れ一人だけは、昔先代文三に救はれた恩義を感じて、決して村井一家が、人達の云ふ樣に、血も涙もない人非人ではなく、それを村人が曲解して、惡く言ひ觸らしてゐるのだ、奥樣が家出なされても誰れ一人同情する者もなく、返つて新聞にくだらない事を書立ててゆすりに來る、これを旦那樣は默つてお金をやりなさる全く旦那樣はお氣の毒だ、どつちが鬼だか分らねえ——と悲



憤します。

熊笹の小徑を、誰れか車を引いて來る者があるので、澤村と要作は、怪しく思つて木立のうしろへ隱れて樣子をうかがつてゐますと、小百姓卯兵衛の娘お夏と倅の正太が、重そうに車を引いて來ます、車の上には新ごもがかかつてゐる、要作は、てつきり山の雜木でも盜んでゆくのだらうと思つて、木立の陰から躍り出して、姉弟をムンズと摑えます、二人は吃驚して、勘辨して下さいとしきりに手を合せて拜む、新ごもを剝ぎとると、車の上には、二人の母の亡骸が冷たく乘つてゐました。

此の雜木山は、その昔卯兵衛の所有であつたのでした、それが僅かの貸金の抵當に先代文三が取つておいたものが、そのまま流れて村井家のものとなつたのですが、山中には卯兵衛の先祖の墓がまだその儘に殘つてゐます、兄弟の母は「どうか私が死んだら、あの山の墓へ埋めてくれ」と遺言して息を引きつたのでした、姉弟は、父卯兵衛が重い病氣で、さても動けないので、けなげにも、母の死骸を車に積んで、遺言通り山の墓へ埋めよふとして、こゝ迄運んで來たのでした、澤村の知らせで馳けつけた文三は、お夏の口からそれを訊いて、姉弟の孝心、卯兵衛の不幸に心から同情して、心よく容し僧侶迄わざ〳〵呼よせて、ねんごろに埋葬をしてやります

お夏は、文三のその厚い情けを、涙ながらに感謝します、靜寂な木立の中に、讀經の聲が流れ、夜の烏が、梢に羽ばたきをして不氣味な聲で二聲三聲鳴く。

序幕第二場—卯兵衛の家

傾きかけた百姓家、卯兵衛の家であります、卯兵衛は重い病に永の病床に横はり、別室で親類の者數名が集つて、爐の火にあたり乍ら話しをしてゐます、お夏と正太は、家の外に立つて母戀ひしさに、昨夜母親を埋めた雜木方の方を眺めてゐますと、そこへ文三が訪ねて來ます。

文三は、昨夜雜木山で卯兵衛一家の貧窮を聞き同情して、無償で山を返してやらふと考へ、卯兵衛に會つてその旨を傳えようとして來たのでしたが、親類の者達は、卯兵衛に會はさず、昨夜文三が、雜木山でお夏に怪しき振舞ひをしたことを口々に罵ります、文三は、身に毛頭覺えのないことなので大いに驚きますが、親類の者達は、山を返そうと言ふのも、これを餌にしてお夏を釣る手段だらうと、惡いように解釋して文三を恥しめます、文三は折角の自分の好意が、返つて惡意あるように取られたことを悲しく感じて、すご〳〵と歸りかけると、病室から卯兵衛が這ひ出して來て、「山さへ返せば、それで何もかも濟むと思ふか」と、その當時の無情な處

置を陳べ、親類の者達も寄つてたかつて、鬼文の無情冷酷を罵り羞しめます、そこへ書生の澤村が飛んで來て、又新聞記者が多勢やつて來たことを知らせます。「嬶に逃られて名前を上げだなア鬼文だけだんべえ！」と、歸つてゆく文三に嘲笑を浴びせかけます、お夏と正太は、文三の淋しい後姿を氣の毒そうに見送るのでした……

二幕目第一場―炭燒小屋

土手を見た小山の蔭――小さな炭燒小屋があります、冬がれの中に常盤木の葉が青く、所々に水彩畫のやうな紅い椿が咲いてゐるこかで、コトンコトンと、水車が廻つてゐます、炭燒爺さんの彌助が、歌を唄ひ乍ら薪を割つてゐます、そこへ小百姓の音吉や鍛冶屋の爲助、大工の吉兵衛、植木屋の伊太郎苗木屋の甚平などが來て、卯兵衛の女房お鶴が、幽靈になつて鬼文一家を呪つてゐること、又お夏が、文三の妾になつた噂などを話し合ひます。

そこへ「農民組合」と書いた巾廣の襷をかけた、二人の若者――勞働服もあればルパシカ着用もある――が來て、園池村に地主對小作人の爭議がある情報に接して、わざ〳〵小作人の應援に來たのであるが、農民代表の本部は何處だ、我〳〵は、目覺めたる思想の下に、古來の因襲を打破して、ここに眠れる人々の上に大警告をうちならし、資本家對勞働者の理想的解決を實行するのが我等の任務である――などと、盛んにまくし立てるが、古い頭の彌助とその一黨は、何んのことだか譯が分らず、只目をパチ〳〵させて阿然としてゐる、爭議團員は、無智蒙昧で話し對手にならん、とも角爭議本部を定めて策戰にかからうと、勞働歌を高唱し乍ら去つて行きます。

村の娘達にまじつて、お夏が枯枝を背負つて通りかかる、彌助達は、お夏が文三の妾になつて、いい着物を着て白粉をベタ〳〵ぬつてゐると噂を聞いてゐたのに、相變らず粗末な身態をしてゐるのを意外に思ひ、お夏が妾になつたことなどは單に噂に過ぎない人の噂なんて、正體はこんなものだ……と苦笑してゐる所へ、雲つくばかりの大きな旅僧が出て、文三の家は何處かと尋ねます、そして敎えられた方角さして去つてゆく後を見送つて、一同は何者だらう？と不審がります

同　第二場―地主會議

村役場の奥の村會の議場――と言つた所で粗末な木造の廣間が、右手の方が一段と高くなつて疊を敷き、まん中に爐が切つてあり湯が沸いてゐます、爐端で五六人の地主達が將棋をさしてゐて、その人達と　全く放れて、村井文三が只一人手

持ぶさたに隅の方に座つてゐます。正六時に開く會議か、時間が過ぎても一向開會しないので、文三はたまりかねて開會を促しますが、地主達はてんで耳を藉さずに相變らず無駄口や將棋に興じてゐます、やがて大地主大野の代人今井がやつて來たので、やう〳〵開會ん運びになつて、今井は議長席について開議を始めます、今夜の地主會議といふのは、農民組合から小作人の代理として、米作が悪くて半分の收穫しかない故、小作料を全免してくれとの要求なのですが、今井は、此際地主側が歩調を揃えて、農民組合の小作料全免の請求は拒絶しよふと提議します、誰れも異存なく大賛成をします、然し只一人文三は、日本に於ける農村問題の由來から現狀を陳述して、小作料全免の要求は至當な要求であると言つて、一同に反對意見を言ひ出したので、議場騒然、遂に決議がまとまらずに流會となつて、地主達は口々に文三を裏切り者と罵つて引上けてゆきます、文三は、自分の正しいと思ふことが益々彼等の反感を增長させることを思つて、一人淋しい心持に打たれます……

同　第三場――鎭　守　の　森

一面の杉木立、その奥に村の社が見えてゐます、夜はいたく更けて、ふくろの聲が寂しく聲えてゐます、手に手に棍棒を持つた若者五六人が、文三の歸りを待伏せてゐます、人の來る足音に、一同は木立の蔭に隱れると、酒に醉つた觀應寺の和尚が出て來ます、それ！と若者達は文三と間違えて飛出し和尚を取圍むので和尚は吃驚、一同も人違ひと知つて、あたふたと逃げ出します、和尚が呆氣にとられてゐると、お夏が手に提灯と傘を持つて走つて來ます、和尚はお夏の姿を見て呼とめ、人氣のないのを幸ひ、怪しからぬ振舞ひをしよふとします、お夏は驚いて人を呼ぶ……と、どこから現はれたともなく、炭燒小屋に鬼文の家を尋ねた旅僧が出て、いきなり和尚を二三間向ふへ投げ飛ばします、和尚はとても敵はずとほう〳〵の態に逃出す、旅僧は顫えてゐるお夏を助け起してやります、お夏は禮を言つて、じつと旅僧の顔を見つめますが、難儀を救はれた感謝が、娘心の中に、一種の慕はしさを憶えます、折柄降り出す雨……お夏は、持つてゐた傘を旅僧に貸さうとします、旅僧はお夏の親切を嬉しく思ふが、お夏の濡れるのを不憐に思つて「傘がぬれるか、坊主がぬれるだけだ、どつちにしても同じ事だ」と笑つて、お夏に早く行くように言ひます、お夏は、妙にそこを去りがたい樣な心持がしますが、とつおいつ、やがて思ひ切つて、雨の中を傘をさして去つて行きます、旅僧は、濡れたまま突立つてお夏を見送ります、雨の音激しく、梟の聲――

三幕目第一場＝村井の家の庭

籐の卓や籐椅子が四五脚、庭に面した露臺になります、庭のすみに白山茶花が淋しく咲いてゐる、右手の方に小さい木戸があります、その木戸を以前の旅僧が、のこ〳〵と入つて來て案内を乞ひます、庭の方から要作が箒を持つて出て來て此の異樣な訪問客を、うさん臭さうにじろ〳〵と見て、これもてつきりいつもの强請者と早合點して、主人は不在だと言つて追歸そうとしますが、旅僧は、それなら戻る迄待たうと無遠慮に籐椅子に腰下ろして上等の茶を持つて來いなぞと贅澤を並べるので、要作はとても一人の手ではおへないと、澤村に加勢を賴まうと庭の方へ入つてゆきます、暫らくして、文三がゴルフの服裝で戻つて來ます、要作と澤村は、怪しい男が來てゐるから警戒なさいと注意をする、文三は、旅僧を見て「ヤア」と意外な訪問客に、走りよつて嬉しそうに旅僧の手を堅く握ります。

旅僧は、大澤大休と言つて、文三が學校時代からの親友で今では京都のある寺の住職をしてゐるのでした、文三は、舊友の來訪を心から喜び、そして今の惱みを、此の親友の力によつて、幾分でも助けられたい――といふような氣持になります。

同　第二場＝文三の居間

品のよい裝置のしてある椽側付の日本座敷――澤村と要作がいろ〳〵の料理を運んで、文三の指圖で卓の上に列べてゐます、やがて大休が風呂から上つて、つんつるてんの丹前を來て出て來ます、そして兩人は、何年ぶりかで酒を汲み交して舊情を溫めます、文三は、現在の惱みを大休に打明けて、ごうしたら「鬼文」の惡名を雪ぐことが出來るだらうかと相談します、大休は、文三から事情を訊いて氣の毒に思ひ、勉めて慈悲善根を施すのは眞情の流露が伴はないから人は顧りみない、僞善も同じことだ。小刀細工は止めて、世間のうるさい人々の爲すままに任せろ――と諭します、そして大休は、當分村井家に逗留して、文三に代つて一切のうるさいことを引受けて、解決をつけてやると誓ひます、文三は、大休の昔し變らぬ厚い古情を、涙をたたえて喜びます。そこへ澤村が靑くなつて馳け込んで、暴力團が押寄せて來たことを知らせます、大休は『よし、俺にまかせておけ』と、怖れる樣子もなく笑ひます。

同　第三場＝村井の家の庭

以前の庭です。澤村が怖々四五人の暴力團を連れて來て大休

に知らせに入ります、團員はそれ〴〵、文三に對する策戰をしてゐる所へ、法衣になつた大休が、庭口からのつそりと出て來ます。

暴力團は、文三が小作料問題から農民組合に好意を寄せ、帝大教授の榮職にあり乍ら、彼等の尻押しをして左傾思想を吹き込むことは不屆である――と言つて、文三に制裁を加えよふと押掛けて來たのであつた、大休は彼等が、ややもすれば「國家の爲め」を看板にするのを片腹痛く思つて、散々彼等を嘲弄します、暴力團は憤慨して大休に暴力を振ひますが、返つて散々大休の爲めにひどい目に合されほう〳〵の態で逃歸つてしまひます、と今度は、百姓の作兵衛が、文三の家の飼犬に、大事な鷄を咬殺されたと言つて、殺された鷄をぶら下げて伴と一緒に因緣をつけて參ります、がこれも大休に散々油を絞られてすごすごと引上げて行きます、文三は心配して樣子を見に來ますが、大休の爲めに皆んな凹まされて歸つてゆくので、文三は大休の來てくれたことを力强く思ふのでした、それにしても、大休がなんの爲めに、京都からわざ〳〵自分を訪ねて來てくれたのか？　それを尋ねると、大休は「女出入で逃げて來たのさ」と言つて笑ひましたが、文三にはその言葉の中に、何か深い謎があるような氣がしてなりませんでした……

大詰＝作兵衛の家

作兵衛の家の奥座敷に、地主達が集つてゐます、妙に重苦しい氣分が漂つて、彼等はイヤに固くなつて座つてゐます、そこへ今井があたふたとかけつけて着座します。

今井は文三が地主側の決議を無視して、小作料を全免したことに對して、その善後策を講じる爲め、文三を除外して、秘密にこゝで會議を開くべく地主達を集めたのであつた、文三が今度の小作料全免を實行したのは、「鬼文」の惡名を取除きたい爲めの卑劣な手段で、眼前の利益に眼がくらむ百姓共をそゝのかして、自分一人がいい子になつて、吾々地主側の利盛を少しも考えない行爲であるから、地主一同は決議をして村井を糺彈せよ！　と、今井の煽動にのせられ決議案に調印しかけてゐる所へ、大休が乘り込んで來て地主對小作の問題は、相互の利益を主眼とするので、會議の主旨を徹底させ圓滿なる解決を計るには、小作人の意見も參酌しなければ不可であると云つて一般小作人をも會議に參集させ、そこで文三は今迄今井が文三に對して狡獪な手段で鬼文といふ惡名を彌が上にも煽動した事實を摘發し、鎭守の夜討を仕掛けたのも、暴力團を文三の家へ仕向けたのも、皆今井の仕業であると證據を突付けて面皮を剝ぎます。

村井文三を悪い者にしておけば、何もかも都合の悪いことは鬼文呼ばりをして罪をかぶせ、地主達は助かり、金の費る時だけ村井に出させる、小作爭議が起れば鬼文のせいぢやといふ、隣村と競爭に負ければ鬼文のせいぢやといふ、一も二も悪いことは鬼文のせいにする、今井が村井文三を糺彈の地主會議を開いたのも、地主の意を迎えて、村井を悪い者にしよふといふ小刀細工に過ぎない、そうして、善人の村井に悪名を着せ、今井自身は善人顔して蔭に廻つて悪事を働いてゐるのだ！と、今井の罪條を摘撥するので、地主達も小作人達も、始めて今井に欺かれてゐたことに目が醒め、今迄文三を憎んでゐたことを心から後悔します、今井は居たたまらずコソ〳〵と逃出してしまつたあとへ村井文三が來て、自分所有の山林田畑を村へ提供して、その收益で村税にあてて、村の發展を計りたいと申出ました、此の思ひ切つた壯擧は、居列ぶ人達に異常な感激を與えたのは勿論でした、他の地主達もこぞつて相當な寄附を申出で、村民は擧つて文三の德を褒めたてゝ歡喜しました、卯兵衛も、自分の前非を悔ひて文三に心から詫びました、そうした最中へ、要作が一通の電報を持つて來ました、それは妻の賤子から、アスアサタツといふ電文でした、文三は、始めて大休が「女出入りで」と言つた言葉の了解がつきました、大休は賤子から頼まれて來たのでありました、所へ今井から頼まれた暴力團十數名が、大休に復讐しに押寄せて來たので、忽ち和氣靄々たる氣分は破られて騒然としますが、いつの間にか大休の姿は沒して、暴力團や村人一同も探しますが、遂に姿はみつかりません……舞臺はだん〳〵と暗くなつて、闇の中で大休を呼ぶ聲のみが聞えます、再び舞臺が明るくなつて全體眞黑の中に書院窓を背にして、大休が立派な法衣を着て厚いしとねの上に端座してゐます、美しい小坊主が靜かに捧げる茶をうけて「もう春だ、い、天氣ぢや……」と微笑みます、窓の障子にパツト朝日がさして、梅の老木に鶯の影が映ります、ホーホケキヨ、ホーホケキヨほがらかな聲で鶯はないてゐます。　―幕―

配役

大澤大休	澤田正二郎
彌助	中井哲
村文井三	野村清一郎
觀應寺和尚	南吉太郎
卯兵衛	根岸若之助
お夏	久松喜世子

（浪花座五月興行上演）

芝居見たまゝ（金子洋文氏作）

浪人の群

北村九泉子

‖A‖

戊辰の頃である。浪人達によつて借りて居る一軒の陋屋があつた。丁度今、晩飯のすんだ後とみえて、掃除をして居るものや、圍碁を打つ者や、煙草を吸つて居る者などがあつた處へ臺所から緋の襷をかけた三田島と云ふ浪人が手を拭き乍ら這入つて來た。すると煙草を吸つてゐた最上がフト緋の襷を見て、「ひどく意氣な襷を掛けてゐね」と問ふた、すると三田島は笑ひ乍ら「これはお數さんのお古ですよ」。お數さんが來ると皆ウキ〳〵するけれど只細川が一人辛さうにして居るに引き代へて利部がお數さんを思つてゐると話して居た。利部が來たので細川にざつくばらんに話しをすればお數さんを讓つて貰へると云ふたが、そんな事をすれば自分の首が飛ぶと利

部が言つて聞かない。細川は小野派の名劍士といふけれども誰も其腕を見た者がないのであつた、しかし乍ら毎晩歩兵を斬り殺すのは細川だと噂をする。細川は同じ浪人友達であつても其考へが異つて居つたので皆も不思議がつてゐる。そうして歩兵を斬るのも正面から一刀の許に斬り下げて而も相手は刀に手もかけてゐないのでよほど早業だつたのに違ひないそして一晩に五人もやられた事があつたそれも歩兵ばかりで上の奴を狙はないのである。それはもと〳〵田舍武士なので權力に對しては漠然とした憎しみを持ち幕府を擁護する凡てのものに反感を抱いて正義も人道もなく、討幕、攘夷、王政復古などは痴人の夢位にしか思つて居らず人生に對しても希望や信賴を少しも持つてゐなかつた。それのみならず、毎晩、血の匂ひを持つて來なければ夜中ぐつすりと眠る事が出來ない爲であつた。浪人の中で最上が最もよく細川の事を知つて居るので皆を相手にして話をして居つた處へ柴田が貧乏德利をぶらさげ、慷慨の詩を吟じ乍ら出て來る、醉ひ乍ら氣焰を上げて、曰、君、我等無産の徒の勝利は益々明白になつたぞ、……將軍は大慈院を拔けて水戸に向つて出奔し官軍は江戸に向つて進軍中ぢや……私は何人も怖れむ、彰義隊が何んぢや、天野八郎が何んぢや、私の腕前はこんなものぢや……とよろけて、坐り込んで笑ひ乍ら貧乏德利をふり上げた時最上と顔が合つた。今日は最上の用事で出て行つたので返事を問はれて、大聲一語——先生、酒に性根を奪はれて、大事を忘れる樣な柴田ぢやありません、——今朝三時か四時頃でせうか、將軍慶喜公は淺野美作守をひきつれ暗い中を大慈院を出られました、出迎へたのは精鋭隊、遊擊隊約百數十名、水戸に向つて出奔されました、其樣子の傷々しさや其面の窶れて居たので幕府を憎む自分も涙がこぼれたと云つた。此黑い目で見た以上間違ひはないと云つたことはよかつたが酒に淫する癖があつたので昨夕出る際借りた百文の錢も酒と德利に代つてしまつたがまだ懷中には三兩近くの大金を持つて居つた。それを最上に見られて町人をあやめて取つた金と云はれたので實は女湯から頂戴して來たものだといつた。それで——話がひどく色つぽくなつて來たと他の人々によつて一と花話が出來た。そこで柴田は其解けを話したのは次の樣であつた。

——丁度、將軍の樣子を見屆けて歸り朝湯へ飛び込んだ。

配役

浪人細川	澤田正二郎
浪人頭最上	中井哲
浪人利部	野村清一郎
按摩	根岸若之助
藝妓お數	久松喜世子
光子	山路千枝子

そうして湯から上つて一寸女湯を覗くと立派な大小が刀架にあつたのだ。こいちや不思議と番臺に聞いてみると町方與力が女湯の方がきれいだから這入つてゐると云ふ、與力自ら掟を破るなんて言語同斷と一策を案じた。早速、其刀を取つて番臺女をおどし附けて奥へ逃げ込んだ其間に盜み出して金に代へたのだ軍用金は己れがふるまふんだ、サ、飲め〳〵。

之を聞いた人々は氣勢頓に昇つて、柴田そんな奴のものはいくら取つてもかまはむ、やれ〳〵。お前の爲に祝盃を上げるぞとみんな輪になつて賑かに酒を飲み始める、利部と三田島は臺所に出たり入つたりする、盃は廻り、賑かな話が暫く了らなかつた。やがて話題は討幕開國、維新革命、特權階級倒壞と盛んに維新革命の烽火の聲が上つた。

——維新革命萬歳、——浪人萬歳。

——討幕、開國萬歳、——我等無産者萬歳。

裏口が現はれると細川は拔身を持つたまゝ登場、すると呼子の笛がする。細川身をかくす。人々の足音がする。酒の坐では盃を持つたまゝ耳を笛の音に傾けて居る處へ突然として細川は「只今」と聲をかけて戻つて來る、人々は驚いて一勢に振り向く。

＝舞臺廻る＝

＝B＝

或る街路の夜景、一方から幕府の歩兵の一行、他方から細川登場して舞臺中央ですれ違ふ、瞬間、細川の秋水腰間にパット閃く、其跡には正面から一刄に斬り倒された歩兵の死骸が夜の街路に捨てられてあつた。

＝舞臺廻る＝

＝C＝

或る街路、Bより間もない時刻。細川が出て來る後より彰義隊の朱鞘の武士が三人追ひかけて來る。武士は細川に煙草の火を借らむとする時、細川に馬鹿と一喝して切り附ける。細川は己れを正面から斬り附ける勇氣はえらいがまだ腕が覺束ないと云つたが、武士は毎夜歩兵をあやめる憎い奴だ、同

志の仇、思ひ知れと鋭く斬り込む。細川は此三人を正面から美事に一刄に斬り倒してしまふ。暫時して、

――今夜はよく眠れやう……――

血の匂に滿足した細川の聲は暗に響いた。

＝幕＝

＝D＝

Aより數日後の浪人の陋屋夜、それ〴〵蒲團にくるまつて寢てゐる。高い鼾の音。

お數は一人懷中鏡を出して髪を直して身じまいをして細川の蒲團に眼をやつて溜息する。お數は細川に逢ひたい一念で座敷を拔けて來て居るので寢て居る細川を起したが細川も今夜は眠られないので起きて居た。お數は泣いて細川の薄情なのをなぢつたが細川も自分の病氣の苦しみやら氣が立つてゐるので今晩は歸つて呉れと云つても聞かないので思はず大刀に手をかけるので、お數はこんな苦しい思ひをするよりも一層戀しい人の手にかかつて殺してくれと、叫ぶのを細川は切ない衰へた聲でお數、私は病氣なのだ、……こいつて倒れる、そうして水を〳〵と呼ぶのでお數は狼狽して水を取つて來て抱きかへて水をふくませて介抱するので、漸々落附いたが細川は眠れない病氣の苦しさには愛も戀も生きて居るこさへ空しい、只眠りたいばかりに焦るのみである、苦しみの間にもお數を愛して居つたので其心持ちや愛するこいふやさしい言葉を聞かされたのもお數には三月か四月ぶりであつたので非常に嬉んで明日は首尾して會つてくれるこいふ言葉

に今更一月ほどは疑ぐつたり信じたりして居つた時は一層細川を殺して自身も死なふかと思つた事も何度もあつたといふ事を思ひ出し之を聞いた細川も――そりやいゝ考へかも知れないね――と心に殘つた。お數も細川に心を聞かされて得心して身を鎮めてよくお眠りなさいよと言葉を殘して利部に送つてもらつて歸つて行つた。靜かな晩で若葉が匂ふ樣であつた其時一人の按摩にすれ違つた後でお數は只の按摩ではないと利部に話して振り返つた時には按摩も狼狽して笛を吹いて去つた。二人も周章て去つた。

家では最上と細川とは話して居つた。

最上は細川の血の匂ひを持たなければ眠られない事も、歩兵を斬り殺すのは細川だといふ事もよく知つて居つた。それで細川も問はるるまゝに身の上話をしてだん〳〵歩兵を斬つた最後のシーンまでも話しつゞけた。然し他の者は鼎の夜中である。此時按摩の笛の音が聞えて來るので話は自然と按摩が話題となつた。兩人が相談して細川が寢て最上が按摩を呼び入れる事にり、て按摩が出て來たので呼び入れた。――おやッ、お前さん眼あきだね――と最上が驚いた。細川の見た眼には只の按摩ではないと思つた。それで按摩も眼を患つた事や、長崎の醫者に癒してもらつた事などを話したが兩人は眼あきを氣にして居つた。按摩の口から歩兵の斬り倒されて居ることや本所小梅の別莊へ彰義隊が斬り込んだと云ふ事を話された。細川は突然起き上つて按摩の手を握つた時按摩の懷中より十手の朱房をチラリット見た。按摩も狼狽して立ち上つて外へ出た。そうして毎夜歩兵を斬るのは彼奴だと言葉をのこして去つた。細川は仕度をして按摩が鳥目を忘れて行つたから届けてやると言つて外へ出て行つた。

＝舞臺廻る＝

＝E＝

ある川端までお數を送つて來た利部は自分の思つて居る女であるので愛して居る心持ちを打ち開けたけれ共お數は聞き流して受けず利部の手を振り放して柳の木に身を避ける。そうして利部から細川は自分の愛して居るのを知つてゐると聞かされたので、お數は自分からあの細川を愛して居るのであるからあの人に殺されたつてあの人なしでは生きて行かれないと云つて利部の言葉を聞かない。此時どこかで斬合が始まつた樣子である。すると花道から按摩が斬られて出て來るがもう人殺しの聲も出ない、其後より細川は劍を擬つて追つて來る。按摩は行きなり利部を盾にすがり附いた、驚いた利部は振り放そうと細川の前に位置した瞬間一閃劍は兩人を刺し通した。お數は震へ乍ら『あなた』と思はず細川に取りすが

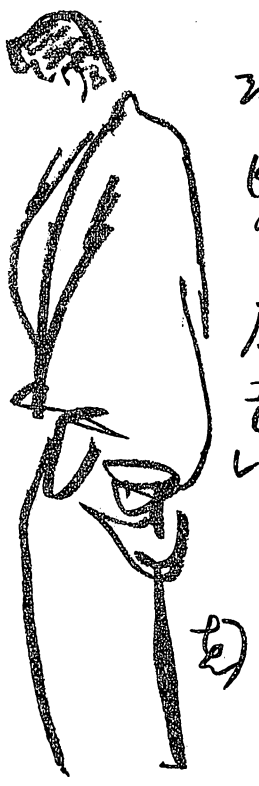
つた。
細川は此時、久し振りで眠れやうと寂しい微笑を浮べたのであつた。

‖ 幕 ‖

‖ F ‖

五月十五日の明け方近く雨が降つて居る。
浪人達の陋屋では浪人はめい〳〵戰の裝をして握飯を嚙つて居るが細川はお數がすすめるのにも飯を喰はず、戰の用意もして居ないので柴田がなぜ出ないのかと問ふので自分は皆と考へが異ふから討幕開國の說には熱情も信念もないと云ふ。然し利部を殺したのは細川だから一片の情けがあるなら利部の代りに戰に行けと柴田が云ふので其情の一片すら殘つて居ない、只眠りたいばかりだと云つて聞かない。此時騷々しく隣家の女房がお數をあやしながら出て來てお數が短刀で死なうとしたと云ふ。それから利部が先晩川端でお數を手込にしやうとして按摩と一緒に殺された事を話すので柴田や他の人も始めて利部が惡いと知つた。然し細川は利部が惡いのでもなく自分が知つて居て送らしたのが惡いのであの瞬間を見のがす事が出來なかつたと云つてしまふ。柴田は我等には過去はない、さあ戰だといつて細川と寂しく別れの盃を交はす。此時最上が二三の浪人と一緒に雨の中を歸つて來る。最上の話によつて愈々時機到來、官軍は上野を圍み江戸全市は砲聲に包まれると皆々聞かされたが細川丈は戰は考へなかつた。最上も細川の氣持を知つて人はそれ〴〵自分を僞つた途を行くより心の命ずる途を行く方が氣持がよいと細川をなぐさめてお數の酌で舊い生活と共に別れの盃と云つて交はした處へ小林が雨を突いて登場。先生、戰端が開かれましたぞと報告に依つて最上の「行けッ」と一聲に人々は維新革命萬歲を唱へて劍を拔き柴田を先頭に雨を突いて馳けて出て行く。
殘つた細川にお數は寂しく泣き崩れた。
何時かお數が云つた細川を殺して死にたいといふ言葉にそれほど自分を愛してゐるのかと云へばお數は「はい」と云つた、細川は今こそお前の望みをかなへてやるぞとすばやく小刀をとつて腹を突いた。其時外には砲聲が殷々と轟き渡つた
細川は、あれを聞け〳〵、今全市に轟くあの砲聲こそ舊きを踏み破る新しい生活の足音だ、舊き日本は顚覆する。そうして新しく更生するのだ。
新しい、新しい生活……
と彼は然う叫び乍ら花道へ走りこんだ。
雨の音、轟く砲聲が頻りに聞えてゐた。

‖ 幕 ‖



（浪花座五月興行上演）

（芝居物語）長谷川伸氏作

掏摸の家

石原泉二

うららかな小春日和。
下谷御徒町のとある露路裏。
商賣往來に無い掏摸を渡世に、世を怖れ忍ぶ八木原庄吉夫婦の假住居。

緣先の日向で女房のお紋が張物をして居る。
庄吉は今朝ぶらりと出た切り、上野の鐘が正午を告げ渡つたのに未だ歸らない。
隣家の橘家竹丸は、夜の廓や傾斜をぞめきの客とともに、鉦鼓の音に昔を偲ぶ、しがない稼業の聲色屋です。午砲の鳴る頃漸くのこのこと起きて來て、お紋と氣輕に冗談を言ひ合つてゐる。

『大將は？』

『出掛けたよ』

『此頃はシケ續きだこね、大將くらいの腕でもシケがあるのが不思議だ。日本に幾人つて人だつてのに』

竹丸は庄吉の稼業は百も承知の別懇、庄吉は竹丸が云つてゐるやうに其道にかけては、天才と言つてもいゝ程巧妙な腕前を持つてゐました。彼の最も得意とするパッチ掛しは高等技術のうちでも、極く至難な業とされてゐる。それを庄吉は最も鮮かにやつてのけ、曾つて一度もごぢを踏んだことのない程堂に入つたものでした。それでも女房の身になつて見ると、少しでも歸りが晩くなる時なぞは『もしや遺り損ねて、捕げられたのではないか知ら？』ちよつと想像して見ても堪らなく胸が痛んで、吐息する瞼に熱い涙が滲んでくるのでした。一層こんな生活を止めてほしてを振つてもいゝ何んな貧

しい生活も厭はない。不安のない心靜かな暮が出來たら何んなに仕合せだか知れない。『止めて下さい』……と、口の端まで出かゝるが何も彼も知り拔いてゐる夫に、今更それと意見がましい事を云つて、痛む心に觸れる必要もないと、遠くの方からその暗い淋しい姿を瞶つてゐるのであつた。

庄吉にして見ても、世間で想像してゐた程、自分自身を蔑んでは居なかつた。寧ろ彼にはこれも立派な商賣だ……と云ふ誇を持つてゐた。一つ間違へば再び起てない答の下で苦患を忍び、再び世に出る時も、罪人といふ先入觀で白眼視れて一生涯その汚名は雪げない。恐らく何んな商賣でも一回の失敗で、こんな痛手を負はされるやうなことはあるまい。自分の生業も考へて見れば自分の一生を釣替の投機のやうなものだ。世間の商賣人等が自分の全財産を懸けて投機をするのと少しも選ぶ所はない。……と、庄吉自身は自分のやつてゐることを世間一般の商賣のやうに考へやうとした。そして其罪に對する自分の惱を隱さうと努めて見たのでした。しかし彼にも人間らしい一面はありました。否、人並以上の人間らしさはあつたのでした。法網の裏をかいて詐欺にも等しい方法で、財産を囮に空博賭のやうなことをやつても、法律に觸れなければ罪にならないやうな數々の罪惡がある。彼と同じ裏店に棲む貧しい人等の、生きやうとしていくら働いても働いても貧しい惠れない、慘めな人等と、空手して居ても自然に財産の增へて行く山手邊の豪家の人々、彼にはこの矛盾が何う考へても正當には受入れられなかつた。彼の根強い世間への反逆はこゝから芽生へてゐた。ですから彼が仕事をするにしても、決して行當りばつたりな、只目的の爲めには手段は選ばないといふやうなことは、決してなかつた。相當餘裕もあり金もあると思ふやうなあたりを着けないうちは、手を下さ

なかつた。それが彼のこの商賈に對してもつ、一つの誇りでもあり、罪に對する苛責の安全瓣でもあつた。くらしが何んなに手詰つて、明日の糧にも差支へるやうな時でも、彼自身の正義觀に反するやうな事はやらなかつた。彼にはそれだけの人間らしい潔癖は充分にあつたのでした。ところが、今日は何うしたことか廣小路で、餘り身裝のよくない親子五人連れの男の財布を掏り取つた。『あ、終つた！』しばらくしてから彼は氣が附いた。『止せばよかつた！』この金の爲めにあのみすぼらしい人等が何んなに困つてゐるか知れないと思ふ時庄吉は強い苛責を覺えた。然しそれも後の祭であつた。その財布の中には彼等の服裝に不粗應な百二十五圓の金が入つてゐました。

竹丸とお紋が話をしてゐる所へ、庄吉の弟の金次は親方から暇を出されて戻つて來た。

『お前、何をして暇を出されてきたの？』

金次はしく〳〵と泣き出した。庄吉には唯一人の肉親であります。庄吉がこんな本道を外れた生活をしてゐるので、せめて弟だけでも、人並の生活が出來るやうと、日頃から口には出さなかつたが心で庄吉は願つてゐたのでした。お紋が理由を糺してゐる所へ庄吉の威勢の好い跫音がするので、金次は押入れへもぐり込んで終つた。

『お紋、それ來た――家賃は今差配さんへ拂つて來た』

とぽんと投げ出した。

『大分あるらしいね？』

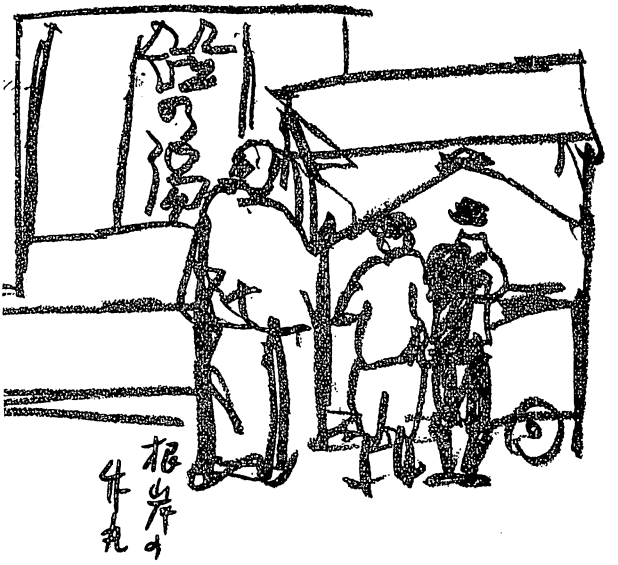
『七八十圓はまだあると思ふのだ。ちよつと勘定してくれ』

『そして今日は何んな人？』

『お客か、けふのごうろくは餘りい、服裝をしてゐなかつた……何時もならあンなのあ相手にしねえのだが、この頃のへマ續きで、さすがの俺も見境なしさ。夫婦者さ、子供三人連つて歩いてゐた』

ふつと暗い影が射して、庄吉は自嘲的にさびしく微笑んだそして、貧しい親子達の姿を想像する時庄吉は返すぐも今

日の仕事が悔まれて、首垂れて終つた。
『兩方合せて九十七圓七十二錢と五厘、いやに半端だね』
『家賃に三十八圓拂つて來た……。さつ、これで當分俺は仕事はしねえ……』
『お紋、久し振りで鰻でも食ふぜ』
『お隣の大將！』



その聲に庄吉は吃驚して金の上へ腹這ひになつた。隣家の竹丸が先刻から樣子を聞いてゐて壁越しに聲をかけたのでした。
『へ、、、、、鰻丼の勘定が違ひやしたね』
『びつくりするぢやねえか……隙さねえ野郎だな』
竹丸が稻川へ鰻の注文に裏から出て行つた後。
『お前さん金ちやんの分も入れて……』
『金の野郎來てゐるのか？』
庄吉は急に氣色ばんだ。見る〳〵怒りが顏に現はれた。
『ごこにゐる？』
其處此處を探してゐるうちに押入れを明けると金次郎は轉げ出した。
大工へ年期を入れた弟の金次は、手癖が惡くて使ひ先の棒を切つたり、金を誤魔化したりするので、親方も持て餘して暇を出したのを、庄吉は歸りがけてそれと聞いて居たのでした。
同じ血を感じてゐる弟までが……『泥棒をした』。彼は涙が出る程悔やしかつたのでした。『やつぱり弟も眞性な道は歩けねえか』一層擲り殺して、……彼はカツト逆上せて終つた。
『お前さん、そんな手荒なことしちやいけないよ？』
殺氣立つた夫を抑へて、金次をかばつた。……併し、その事情を知つたお紋も情けない涙を浮べた。庄吉と同じ思ひはお紋にも通じてゐたのでした。

『兄ちやん御免よ……』泣き叫ぶ金次をお紋は庇つて、無理に庄吉を風呂へ出してやりました。

『金ちやん泣かないで、いゝよ、あたしの饅はお前にあげるから』

其處へ魚屋が掛取りに來るので、お紋は起つて行きました

何時の世にも不景氣と云ふ風の一番身に浸む人々……戰後の餘波を受けて、財界は打續く不況に、破産——失職——自殺と、社會面を血と涙に彩る不幸な出來事——喘ぎ乍らも、その貧しい運命と戰ひ續けて、細々一家の煙をたてゝゐた河部梶太郎も、深酷なる恐慌の旋風に、強か打倒めされて、再び起つことも出來なかつた。

破綻した彼等の生活の瀰縫策として、このせち辛い都を後に北海道の移民勞集に應じることにした。漸くに造り上げた百二十五圓の金は、一家の全生命を以て作り上げた、血と涙の塊でした。その金を資本に新生活の第一歩を踏み出すことに決めて見ると、梶太郎も前途に微か乍らも光明が開けたやうな、欣びを感じました。

その金を、一家が出發する朝、上野廣小路で、庄吉の手にかゝつて捲き上げられた。梶太郎は狂せんばかりに驚いた。魂が抜けたやうに呆然と、歸る家もない一家は涙と共に當もなく歩きに歩いた。

庄吉は湯屋から歸りがけに、竹丸からこの話を聞かされた先刻から心の奥に鬱積してゐた不安の雲が、遽に雨となつて降つて來た。『そうか……』。彼の强い潔癖はむらむらと燃えて、居ても立つても居られなかつた。『あの時、何うして俺は偸んで終つたんだらう？愈々燒が廻つて來たのか』いくら窮してゐると云へ、淺猿しい自分の姿が腹立たしかつた。いくら擲つても蹴つても飽き足らない自分であつた。『勘忍して

くれ……金は直ぐ返すから……』……。竹丸に道具屋を呼びにやつて、一散に露路へ馳けこんだ。

『お紋、先刻の金皆出しな、家中にありたけ皆出せ』

血走つた庄吉の荒々しい態度に、お紋は只おろ〳〵する計りです。其處へ道具屋が竹丸に連れられて這入つて來ました。

『勘定だ、早く勘定だ、いくら足ねえのだ、自烈てい、いくらだ、まだ分らねえのか間抜め！』

『そんなに急ツついちや逆上せるよ……五十三圓五十錢遣つたんだよ』

さう云ふうちにも目覺しい衣類道具を庄吉は一つ處へ持ち出した。品物の値踏みなぞをしてゐる心の餘裕はありませんた。

『古着屋さん、全部で六十圓に買つてくんな、いけねえのか……たのむ、後生だ、何うしたつて六十圓いるんだ。せつぱつまつて要る金なんだ。助けるこ思つて買つてくんな』

お紋は指輪から笄まで投げ出した。道具屋は足許を見て中々肯き入れないので、殺氣立つた庄吉は、合口をギラリこ引抜いて、

配役

八木原庄吉	澤田正二郎
翠色家竹丸	根岸若之助
河邊椙太郎	野村清一郎
魚屋	島田正吾
古道具屋	鬼頭善一郎
古着屋	佐藤一郎
女房お紋	久松喜代子
母親お高	山路千枝子

『六十兩に買つてくんなけりや、人殺しをしても六十圓欲しいんだ……買ふか……』

道具屋が澁々出した六十圓の金を懷中に庄吉が上野の驛へ馳けつけたのはそれから間もなくでした。雜踏する人波を押分けて、庄吉は河邊梧太郎を見付けると、涙の眼で梧太郎の手を取りました。

『よく待つてゐて呉れたな。さあこゝに百三十兩ある。……北海道で旗擧げするのを他所ながら待つてゐるぜ……』

この一家を救ふことが出來た喜びと、自分自身への滿足で庄吉は抑へてゐた感情が一時に堰を切つて意氣地なく涙を浮べて居た。彼も淋しい人間でありました。

梧太郎の呼びかける聲を背後に庄吉は、雜踏の中に姿を消して、初めて自分に歸ると、張り詰めてゐた心も急に緩んで強い疲勞を覺えた。今宵から居る所もない家路へ重い足を向けた。彼は今日といふ今日つく〳〵生活といふものに暗い影を感じて來ました。彼が今迄に強く固持してゐた信念は、あとかたもなく消えうけて、只うら悲しい寂寞で一杯でした。

『あゝ俺は何うなるんだ。何うともなれ！』極度の自己嫌厭に陷づて、この世に自分よりみすぼらしい、不甲斐ない者はないやうに思はれた。そうかと云つて外に生きる方法も無いのです。

竹丸に見送られて、庄吉夫婦と弟の金次は、夜逃げでもするやうに當もない旅へ出掛ける姿が、露路の暗に吸ひ込まれて行きました。

道頓堀の殘本あり

値少ながら殘本があります（但し第一年第二輯及び第四輯はなし）第一輯よりお集めになつてゐる方のためにお頒ちいたします（頒價は郵稅共二十四錢）（第十三輯よりは稅共二十六錢）道頓堀發送部宛御申込み下さい。問合せには凡て返信料をお添へ下さい。

演劇聯盟の近況

本邦最初のドラマリーグとして大正十年創立されたる劇研究團體の大阪演劇聯盟では今や會員數實に壹千七百拾八名を算し機關雜誌舞臺評論第八拾五號出版を了し現在の事務所狹隘のため今春大阪市住吉區天王寺町千八百四拾壹番地へ新築事務所を落成と共に斯界に貢獻せんと幹部諸君の盡力を俟て大飛躍を試み此際全國的に新會員を募集中。規則書入用の方は郵券貳錢（舞臺評論見本は同十錢）同封の上前記の事務所宛に申込るべしと

姉妹雜誌

歌舞伎（定價壹部三十錢）

發行所　東京市京橋區木挽町
歌舞伎座內歌舞伎出版部

幕内閑話（3）

大川澱江
日比繁二　共編

幕内で出來た話

つくつたのではない、ひとりでに出來たのだ、人から人へ云ひ傳へられたのだ。嘘ではない、而しまことでもない。

旅の芝居が中國筋のある町へかゝつた。狹いこの町では、この大一座を泊める旅舍が附近だけではとゝのひ兼ねた。そこで重だつた者は宿屋へ入れて、大部屋の連中や床山、衣裳元、男衆などは邊りの寺へ分宿することになつた。

もう秋も暮れの頃で、たゞさへ物のあわれを感じる淋しい時であつた。寺へ泊められるといふ連中はこぼすまいことか、だら〳〵不平をならべながら、それでも餘義なくその寺へ引上げて行つた。天井の高い煤けた廣い座敷へ小さい臺つきのランプを圍んで五六人が

『あゝ』

と嘆息を漏らしながら坐つた。

その中の氣の利いた一人が發議して、かう云つた。

『どうせこんな寺で寢られへんがな、やろか』

やろかと力を籠めて云つて他の者の顔色をうかゞつた。

『それでも寺やさかいなナ』

氣の弱いのが云つた。

『なに』

と前のが云つた。

皆はごちや〳〵と暫らく云つてゐたが、とう〳〵氣の利いた男へ贊成することになつた。さうして皆は遽かに勢いづいて來た。

一人の男が用意のさいころを二つ取り出した。

皆はぐるりと輪になつて座つた。

聲を忍ばせて、こそ〳〵と遣り取りをはじめ出した。

寺の夜はかうして靜かに更けて行つた。

一刻ばかりも經た時であつた。よごれた薄黑い襖紙を開けて、この寺の住職がそつと足音を偸むやうにして入つて來た。一座はぎよつとなつて驚いた。さうして邊りに散らばつたものを座蒲團の下へ敷いて隱さうとしたが慌てた此座の男達にはさう手際よくは運ばなかつた。すぐに住職はその場の容子を見てとつて

『いゝや〳〵かまひません、おやりなされ、かまわん〳〵』

かうおだやかに、なだめるやうに云つた皆は、ほつと安心した。

先達の男はちよつとお世辭笑ひをして

『急に癢つかれまへんので』

と曖昧な調子で云つた。そのあとへついて他の者たちも

『ぞうもすみません』

とぴよこ〳〵頭を下げた。

『なんの寺ならば他へ聞こえやせん、遠慮なしにやりなされ』

皆は云はれるまゝにいゝ氣になつて又始め出した。住職はそこへ立つてぢつと一座の遣り取りを見てゐたが、興にひき入れられたやうな容子で

『それはなんといふものぢやナ』

と問ふた。

『これは、長、半、と云つて……』

と先達の男が、いろ〳〵説明をして聞かせた。

住職は

『ナル程おもしろそうなものぢや、では私も仲間へ入れてくださらんか』

住職は或男と男との間へ割り込んで座らされた。

住職は氣前よく懷ろから二分金をひとつ掴み出してそこへ投げ出して

『それでは長といきませうか』

と云つた。

隣りに座つてゐる男が云つた。

『和尚さんわれ〳〵はほんの慰みでそんな大きいことをしてるのやおまへんさかい』

とぢろ〳〵二分金を眺めながら云つたが他の者が全部住職の敵になることにしてさうして始めた。先達の男は勢ひよく茶碗をふつて、さいころをそこへころがした男達は聲をそろへて云つた。

『半や』

住職は一向にわかつてゐないらしくきよとんとした顏をして先達に説明をして貰つた。

『それでは私の負けかなあゝさうか』

住職はビクともしなかつた。さうしてまた二分金を取り出した。

『モウいつぺん長といきませうか』

と云つて投げ出した。先達はまた茶碗をふつた、さいころは半が出て住職が負けになつた。

かうして勝負の座はやう〳〵熟して來たが住職は相變らず長をはつた。男達の方へは二分金が小高くなるほどに積まれて行つた。

住職はどうしても自分の思ふ長が出ない

ので
『不思議だ〳〵』
と云ひ出した。
住職が不思議だ〳〵と一言云ふたびに住職の首がのろ〳〵と延びて行つた。住職の首が二尺も延びて行つたころ、男達は始めて氣が付いた。
皆は
『わつ』
と云つて、逃げ出した。頭を打つ者、腰を抜かすもの、這つて逃げたもの、もう前後不覺に悲鳴を上げて庫裡の方へころがり込んだ。
ほんとの住職がそこへ現はれた。
皆は聲をそろへて在りやうを訴へた。
『悪いことは出來んもんでおます』
と皆青くなつてしよげてゐた。
住職は
『ハヽそれならば狸ぢや、この堂の裏に年古う住んでゐる狸があるが、多分それの仕事ぢやらう』
と云つた。
皆はあらためて、住職に詫びを云つた。
住職は
『いゝやそれは在りうちのことぢやかまわん〳〵』
かうおだやかな言葉で云つて、皆を慰めた。
氣の弱い一人、仲間の袖をひゐて
『こんごは、ほんまやろな』

◇

この話が、この後人の口の端をつたつて行くうちには、また形ちを變へ、いろゞりをつけて行く。

× ×

明治二十九年は、まだ日清戰爭の戰勝氣分が、世を擧げてみなぎつてゐたので芝居の方も從つて、戰爭をとり入れたやうなものゝ方へ多く客が吸收された。その年の五月、道頓堀の辨天座へは、鴈治郎、福助(故梅玉)、我童(故仁左衛門)、多見之助(故多見藏)、珊瑚郎、政治郎(現福助)、成太郎(魁車)、璃珏、といふやうな可なりな大一座であつたが、こゝでもやつぱり、その戰時氣分に洩れず一番目には『日本大勝利』といふ戰爭物と二番目に『義經千本櫻』のすしやと道行を出すことに決めた。
すべての準備は順調に進んで、近く稽古にかゝらうとする時頗る納まらぬ一人の俳優が出來あがつた。それは戰爭の大達者ではあつたが世間では『チャン〳〵』と云つて笑つた李鴻章の役をふられた璃珏のことである。これには一座もろとも弱つてしまつた、尋常の役納めならば、それ〴〵口實の百も二百も貯藏してゐる筈の手馴れの奥役達もこの役納めにはまゐつてしまつた。璃珏はどうしても承知をしなかつた。と云つて此まゝ否決にするわけにも行かないので、他の俳優を物色したところが、日ごろ、敵役ならばどんなむつかしい狂言でも出る、と云つて

ゐた中村琥珀郎のことを誰れかゞ思ひ出した。そこで巡業中の琥珀郎を至急に呼び戻すことにして、此人に交渉をすることになつたが、これはまた璃珀とは反對に、この狂言の立て敵だからといふので早速承知をしたので、やつと一座のものは愁眉をひらゐた。さうして袁世凱には柄と形ちがいゝといふので、片岡我藏が選まれた。初日は無事に開いた。非常に評判がよい。

李鴻章と袁世凱の二人をやつた俳優が幸ひにも好評で世間はワイ〳〵もて囃した。

袁世凱をやつた我藏は、ここに平生の柄がさう見えたので、樂屋入りとその歸りには、木戸口に大勢の戰爭ごつこの子供達が待ち受けてゐて、我藏の顔が見えると

『そら袁世凱が來た』

『やれ〳〵』

と喚いて包圍攻擊をくらわした。子供達の中には、ほんとの支那人だと思ひ込んでしまつてゐるやうなのもあつて石を投げつけたりするやうなものも出て來たこんな狀態が日を追ふてます〳〵盛んになつて來た。我藏の袁世凱はすつかりまゐつてしまつた。高い世評の代償が皮肉にも子供達の石礫をもつて酬はれたが、それでも我藏は內心嬉しかつた。そこで家を出る時には以來必ず、子供達に與へる菓子を用意することを怠らなかつた。さうして子供達の顏を見ると、先づ自分から先に立て袂へ菓子を入れてまわつた

さうして、かう云つて聞かした。

『わしは支那人ではない、日本の我藏といふ役者だよ』

子供達はこんどは菓子を貰ふのが嬉しさに我藏を取りまゐた。そんな調子で、芝居は鴈治郎の權太と靜が當るやら、ます〳〵觀客がつめかけるので、さう〳〵日延べを重ねることになる、我藏はます〳〵菓子の仕入れに忙しかつた。

輕便重寶　共通觀覽切手發賣

今回好劇家各位の御便利を圖り、松竹合名社經營各地劇場共通觀覽切手を發賣仕候間續々御用命の程奉希上候

一、觀覽切手は壹圓、貳・參圓、五圓、拾圓、拾五圓、貳拾圓、五拾圓の八種にて切手と包裝は優美にして、四季折々の召上り物や運動場各賣店の御買上品及本家茶屋直營案內所等一切の御支拂に通用致候

一、觀覽切手は本社經營の各地劇場に通用致候

一、觀覽切手の樣式は、例へば拾圓切手なれば壹圓券拾枚、壹圓切手なれば貳拾錢五枚を添付しあれば御入用だけ切取りて御支拂になる仕組に御座候

一、觀覽切手は左記の發賣所にて發賣仕候

電話にて御注文被下候はゞ、何程にても迅速御屆可申上候

大阪市南區久左衛門町八番地　松竹合名社

京都市河原町蛸藥師上ル　松竹合名社

大阪市道頓堀　角座

大阪市東區高麗橋通心齋橋筋南入

ブレイガイド

觀覽切手は松竹合名社經營の各地劇場に於て共通いたします

俳句

煤蓑選

（五月晴）

草の香に疲るゝ旅や五月晴　半介
五月晴工場の音の晝澄みて　汀水
五月晴けさ長々と里の山　花香
蔦舞ふて隈なき空や五月晴　白鶯改め　溪月
五月晴水跳ねかへす魚のあり　敬一郎
遠乘りの知らぬ小里も五月晴　青瓢
引越しの輕き埃や五月晴　同
五月晴田の面にあふる水の音　銀杏
雲間出し月の青さや五月晴　同
洗はれし道の小石や五月晴　同
屋根瓦にかげろふ立ちて五月晴　同

（筍）

竹の子の土に香の立つ小道かな　香園
筍や月は出てゐて小雨降る　花香
筍の重たき土や里歸り　半介
里へ來て筍むくもなつかしき　はな子

賞

五月晴二つの鯉の空を仰ぐ　敬一郎

次回題　『若葉』『螢』

讀者文藝募集

◎短歌、俳句を募集します。
◎原稿締切（毎月十七日のこと）
◎用紙は必ず官製はがきに限ります。
（但し一葉のはがきに三句或は三首以上認めないこと）
◎原稿は出來るだけ判りよく奇麗に認めて下さい。
◎入選者には粗賞を進呈いたします。
◎原稿には必ず住所姓名を忘れては不可ません。
◎應募原稿は左記へお送り下さい。

大阪市南區久左衛門町（松竹合名社内）
道頓堀編輯部

五月の道頓堀は天平文化宣揚會紀念劇一齊上演する

新聲劇一派

毎日晝夜二回開演 晝正午 夜五時半開幕

第一 久本一世氏作
世紀末の男女 一幕
（ホップのモガとセーラーパンツのモボ嬌激なる情痴愛慾の世紀末に於ける男對女、征服か被征服か）

中井泰孝氏作並に演出
（道頓堀所載）
天平史話
安倍仲麿 一幕
大阪朝日新聞社主催
天平文化宣揚會紀念劇
（あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かもの歌で有名な仲麿の唐土に遣せし受難譚）

第三 下村悅夫氏作
食滿南北氏脚色並に演出
悲願千人斬 五幕 十四場
（主君を弑して代る逆臣、遺兒を擁して再興を畫る忠臣、怪刀閃々題して悲願千人斬の戰國祕話）

定評あるお氣輕の
椅子席 金六十錢

角座

前賣切符
話電用事
南六九五六番

大歌舞伎

形花揃ひ
新作極め揃ひ
附院本物

五月三日初日（毎日午後三時開幕）

永田衞吉氏新作
田中總一郎氏演出
（雜誌女性所載）
番目 **平家の人々** 三場
源氏に追はれて壇の浦に亡びし平家一門の末族の人々を描き深刻な人生を觀また絢爛美の大史劇……

大阪朝日新聞社主催
天平文化宣揚會記念劇
大森痴雪氏新作
田中總一郎氏監督
國分寺戀開眼 一幕
（道頓堀所載）
天平時代の一挿話
宗教殷盛に絡る政治の葛藤その渦中に純眞なる乙女あり。つくる處なき天平文化時の繪卷

中幕 **義經千本櫻** すしやの場
戀を犧牲にしてお里の可憐、權太が肉でつくる涙のおしし酢蓋し極めつき

鶴屋南北氏新作
竹本連中
長唄連中
常磐津連中
淨瑠璃 **戀巴**
瓢逸酒脫な舞の袖に描き出される巧緻な線の律動舞に恍惚として善舞に眩惑される……

爲水春氏原作
木村錦花氏脚色
山口草平氏舞臺裝置
二番目 **春色梅暦** 三幕
富士松加賀太夫
吾妻路宮古太夫連中
江戸を極彩色で表する人情本至極の名優が藝を引き藝の粹を極ふ達意の藝術と實意の待遇を期待する五月滿都の劇壇の代表狂言：

片岡我童
林長三郎
尾上菊之助
中村政治郎
片岡我久之助
片岡仁左衛門
岡田義直
嵐徳三郎
片岡敏夫
林長三郎
市川寿海
片岡松升
中村扇雀
中村魁車
阪東壽三郎
中村霞仙
實川延若
實川延三郎
嵐橘三郎
中村福助
萬壽藏
實川八百藏
實川延三郎
澁尾關三郎
澁尾百藏

富士松連中

中座

前賣切符
話電用事
南一二七九番

新國劇

澤田正二郎一座

技演の渕潑てへ揃を作傑の心會

五月一日初日（毎日午後四時開幕）

1 **うるさき人々** 四幕 九場
東京朝日新聞社發行
杉村楚人冠原作
川村花菱脚色
和田英作舞臺裝置
（處生の祕訣は生活の分母を單純化するにあり……大休和尚一流の宗教哲學を具體化した社會劇……）

2 **浪人の群** 三幕 六場
金子洋文作
伊藤晴雨舞臺裝置
「クラク所載」
（黑紋附に朱鞘の大小、吸血鬼の如き彼等浪人の群れの慘虐な恐怖時代劇）

3 **掏摸の家** 一幕 五場
長谷川伸作
濱田右一朗舞臺裝置
「驚人所載」
（大衆文壇の深刻切を極めむる新人情劇吾等は彗と涙を絞る……）

4 **金平化生討** 一幕
鎌谷來水立案
竹本津太夫詞調
鎌谷慶次作章
鶴澤友次郎節調
（道頓堀所載）
（澤田正二郎が始めての奇想天外の新作模樣うちから或る豫感にたれる問題の見遁せぬ逸品……）
楳茂都扇性振付
楳茂都陸平
菅楯彥舞臺裝置

浪花座

前賣切符
話電用事
南六三六一番

▼▼芝居國の案内記！　一目で判る鳥瞰圖！

演劇研究雜誌 道頓堀

年極愛讀者募集

▼▼見れば慰安　讀めば娯樂　持てば羈絆！

第一回締切後申込殺到に鑑み　五月卅一日迄延期

機會は永久に去らんとす直に御申込を乞ふ

▣芝居見ないで芝居が見られる紙上に躍る大舞臺

▣一度手にしたら最後の頁まで讀まずには居られない娯樂を兼ねた演劇雜誌

▣▣内容外觀共に演劇雜誌界の權威である事は既に御承知の事です大衆演劇雜誌の本家本元肩のこらない興趣無限の讀もの豐富！

年極讀者の大特典

▲賞品＝年極め申込者先着壹千名を限り抽籤を以て内壹百名に壹ヶ年間無料愛讀權を與ふ。（但し昭和四年六月號より翌五月號迄）

▲特典＝年極申込者全部には松竹各座に於て發行するパンフレット案内書及優待券を發行毎に贈呈す。申込者を以て『道頓堀』ドラマリーグを組織し演劇觀賞に就て特典を與ふ。

▲申込方法＝壹ヶ年分（參圓四拾八錢に割引）前金お拂込みのこと。

▲申込先＝大阪市南區久左衛門町八『道頓堀』發送部宛　松竹合名社内

日本一の名優鴈治郎の愛讀する雜誌　——　讀む雜誌！　——　見る雜誌！

芝居短歌

山上貞一選

四月の道頓堀

あだ浪の石津ヶ濱に消えてゆく猛者のはてこそ人の世の夢　銀杏

薩摩男はつれなきものと思ひしに身をも惜しまぬ戀を見しかな　銀杏

こらはれの身をば笑ましく流れゆく高瀬舟にぞ花散りかゝる　銀杏

初夏の夜にもえ出でし桔梗葉は石津の濱にあはれ散りけり　吾朗

いつはりの戀にめしひし蔭摩男の心のまことに泣きし君かな　吾朗

皇國の興廢ぞあり此一戰と努めしさまをいまこそ見たり　助太郎

風はなぎ陽はかゞやけり日の御旗を仰ぎついざやあげむ祝杯　助太郎

君のためみ國のためとますらをの盡せし誠に心おごりぬ　春宵

足ることを知りにし身にはやがて行く島をまたなき天地と思ふ　春宵

いたつきの弟想ひてひたすらにいたはる兄の心に泣きけり　春宵

桝男いと面白く踊りけり大鼠ならずともあばれ出でけむ　雄三

花は咲き月は浮かるゝ春の夜に女駕屋と奴はおごる　雄三

高笑ふ聲もあはれや高瀬川罪の小船の流れ行くかな　銀杏

德兵衛は行きつ戻りつとつおいつ落ちし羽織の裏ぞさびしき　銀杏

脫け落ちし羽織に青き冬の月影もさびしき四つ辻のかゞ　銀杏

ならずものと人にいはれしその兄も妹のためには泣きてくゞけり　文雅

戀ゆえに三つの巴とみだれける三人吉三の暗のたてひき　文雅

ひさにして見ればうれしき花柳のおみな姿にみとれてありけり　榮治郎

振り袖の赤きたもとに包みたる男の身をば悔ひてありけり　榮治郎

賞

浪花津に花の霞の立ちこめて色も五つの舞の袖かな　銀杏

次號課題『五月の道頓堀』

（狂言にても俳優にてもよろし、又新派、舊派の別なく隨意隨感のもの）

芝居劇評

編輯部選

中村政治郎禮讃

三朝欣太郎

大阪歌舞伎に珍らしい役者が出來た、萎微振はざる劇界にとつて將に黎明の希望が湧く。

中村政治郎の進出がそれである。伎藝座が開かれて、十指に餘る新進花形、將來を期待し得る年少俳優を得たのは事實である。何れも花やかな櫻であり、梅であり、將た又牡丹であり、菊、紅葉である。が獨り政治郎に到りては隆々たる常盤の松の趣きがある。伎藝に人爲的な巧緻もなく、風姿に自然的な艶麗も現在發輝せざるも、その舞臺振りの偉大さは上手巧者の類に終らざる大家の風格があり應揚迫らざる名人の俤がしのばれる。將に花やかならざるも、拔くべからざる地力を持つて居る。萬花散りても尙ほ覇を握るべき素質がある。最近四月の浪花座に於ける女房鷲の奴矢田平の舞臺振りに閉幕まで一人の觀客を立たしめざりしは彼れが非凡の證である。願くば周圍を廻る先輩並に後援者の師導援助の誤り無からん事を切望す。重ねていふ中村政治郎の進出は大阪劇界への太陽の出現である事を。

憤懣に堪へぬ

——女形讃美者——

花柳章太郎丈のお孃吉三を見て、その妖艶さに惱殺されて了つた。あの美しい柳さく子さへ花柳の前には影を沒つして了つたではないか。

それについて思ふのは、現今の批評家と云つた人々が、女形を輕視する傾向である。

如何にも、歌左衛門とか源之助とか、少し異論はあるか知れぬが惡聲の梅幸あたりの濡れ塲を見せつけられては、色氣も醒めるかは存ぜねど、若く美しく然も美聲の女形を見る時は、女優などより遙かに女性の美しさを感得し得る塲合が多い。

然るに、漸次この女形の影を沒して行くのは何と云ふ惜しいことであらうか。キネマにも最近迄は見られた女形が遂に驅逐されて了つた。演劇も軈て斯くの如き結果を生むのでないかと思ふと忿懣に堪へぬ。

近頃の批評家は、どうして斯る指導をするのを知ら。女優讃美の脫線から、歌舞伎亡論からすること皆改惡だ。

理窟が過ぎるんだね。何卒、昔のしきたりでも良い部分だけは保存して貰ひたいものだ。

批評家達よ。指導の方向を誤らぬやうにして呉れ。さうでないと良い芝居を見る爲には外國迄出掛けぬばならぬ時代が來やうも知れぬから。（無名生）

一、東西成駒顔合せの歌舞伎座

小泉　阿南

一ケ年振りで鴈治郎が上京した。そして兩成駒の顔合せは拾一圓の坐席すら賣切る物凄い人氣である、然し狂言選定が不味い。「岡崎」に於ける歌右衛門のお谷は身體が不自由の爲めチョボに乘らない齒かゆさがあり、鴈治郎の政右衛門には見せんとする山氣が有り過ぎる。結局中車の幸兵衛丈が本格である。去年の「南部坂」が懷しい。玩辭樓十二曲の內「藤十郎の戀」は批評を超越した傑作である

劇中に於て中車及び鴈治郎の口上で吉三郎、九團次の襲名披露があり、魁車の

當り役切浪千壽を吉三郎が演つて居るが未だ／＼駄目である。僕の大好きだつた先代の爲めにも三倍の努力を希望する。其他一番目の「西山物語」では各場面感心させられ乍ら全體としての印象が薄く歌右衛門、左團次に書かれた綺堂先生の「長良の人柱」には今一歩の神秘さが欲しい。大切りの三津五郎と福助の「くらま獅子」は上出來である。

二、菊吉合同の明治座

本年第一回の顔合せを新築の明治座で行つたので連日滿員である。先づ序幕に吉右衛門の翁、時藏の千歳、三津五郎の三番叟が「式三番叟」を踊つて居るのも珍らしい。一番目の「寺小屋」に於ける菊五郎の源藏、多賀之丞の戸浪、吉右衛門の松王、時藏の千代、彦三郎の立番等局部的には缺點も有るが實に良く纒つた寺小屋である。次の歌舞伎十八番の矢の根では柄が小さく、聲は悪いが三津五郎の五郎の型は鮮麗無比だ。之に對し田中良延壽太夫、菊五郎に依り完成された新舞踊「保名」を踊る菊五郎の名技は觀客を永遠の春に遊ばせる。二番目の菊吉の專賣「四千兩」である。盡々枯れて行く兩優の藝と源之助の錦繪的妙味には賞贊の辭が無い。

三、若手幹部の本郷座

何かしら新らしい物を産まんと、常に努力して居る猿之助、松蔦、壽美藏、友右衛門の一座が漱石先生の「猫」を木村錦花氏の脚色で上演したが原作が演劇的要素に缺けて居るので失敗に終つた。第一猿之助は坊ちやんであるが苦沙彌先生では無く、盗人、猫も平凡である。

山嵐の友右衛門には迷亭は無理であり壽美藏の寒月も少し曖昧である。然し松蔦の金田夫人、芝鶴の苦沙彌の妻、源十郎の俥屋の女房、翫右衛門の多々良三平等は傑作に屬すると思ふ。同時に上演して居る「春怨」は巨魔及び仕丁の踊りに面い振付けがあつたのみで作曲は全然失敗猿之助を殺して使つた所作である。「壷坂」に於ける秀調のお里は良いが壽美藏の澤市は動作が大袈裟過ぎるので調和して居ない。「經ヶ島娘生贄」は相當面白く見られた。秀調の小枝及び重盛、友右衛門の清盛、長太夫の法橋等上出來、就中千代之助の進歩には驚いた。

演劇的要素の少い小說の脚色に可惜らエネルギを空費して居る此の一座を本當に生かす脚本を與へる劇作家が居ないかしら？

劇評募集

劇評は、松竹經營各座の名優と言はず新名題と言はずあるひは劍劇、新劇、新派のあらゆる俳優演劇を各自勝手に選んで公開狀なり批評なり、御自由に投稿して頂きたいのです。◎應募原稿は（二十字二十行以内毎輯十七日締切）

大阪市南區久左衛門町（松竹合名社内）
道頓堀編輯部

樂書帳募集

▲樂書帳を募集いたします（所謂讀者通信）

▲樂書帳には好きなことを御自由にお書き下さい。

▲個人攻擊は御遠慮願ひます。

▲出來るだけ澤山採用いたす心算りですが、頁の都合が取捨は當方にお任せ下さい。

▲原稿は二百五十字以内に認めて下さい

▲締切は毎月十七日です。

▲封筒には必ず（樂書帳在中）と朱書して下さい。

▲宛名は、

大阪市南區久左衛門町（松竹合名社内）
道頓堀編輯部

それから讀者諸氏の御便宜を計るために讀者案内欄を設けます。餘り虫のいゝ廣告は困りますが、書藉、古番附、繪番附、錦繪等の賣買交換に御利用下さい。

（文章は簡單明瞭に願ひます）

安倍仲麿

中井泰孝

一まく

時代

日本天平時代

場所

唐國明州の港

時季

春——

登場人物

安部仲麿（五十位）中田正造
僧　鑑　信（四十位）名越仙左衛門
藤原安惠（三十八九）山本之彦
大伴ノ貴司（二十八九）小波若郎
安祿山（三十五六）伊川八郎
史思明（三十前後）堀　正夫
林汀灌（六十位）藤本正雄
其他武將二名、軍丁十名、仲麿の從者二名、祿山の從者二名、思明の從者三名、守衛二名、里人大勢。

情景　背景は渺茫たる海原、稍下手寄に積石若しくは木造の展望臺とも云ふべき高階がある、その海と陸の境に形よき松二本ほど立つてゐる、その側に石の塔が立つて居る上手に高い岩崖があつて上部中部になつてゐる。

開　幕

春の夕陽が眩しいほどに展望臺や、上手の岩崖を斜に照して居る、どこかで雲雀が啼き、極めて遠くに絃琴の音が長閑に聞えて居る。二人の守衛（甲乙）が展望臺の段の兩側に立つてゐる。

上手から里人の男（若老）二人と若い女三人出て來る。

守衛甲　暫くの間此處を通つてはならぬ。

里人　達恐れ入つて土下座をする。

老男　今日は何事があるのでムいますか。

女ノ一　まだ戰爭で御座いますか。

守衛甲　お前達は何も知らぬと見えるな。

若男　はい、何も存じません。

守衛甲　今日はな、此處に處刑があるのだ。

人々口を揃へて。

里人　まあ、御處刑……

老人　昔から此の土地で、御處刑が行はれた

角座五月興行上演脚本

例があるとも聞き及びませぬが、そしてその御處刑になる人は何人で御座いますか。

守衛乙　うるさい爺だな、かばかり世間の高い噂を知らぬとは、何と云ふ世事にうとい奴共だ。

守衛甲　今日はな、此の間の安南國との戰ひに、捕虜にして來た者共の首を刎ねるのぢや。

老人　此の土地ででムいますか。

守衛乙　そうだよ。

女ノ二　その捕虜と云ふのは三人とも日本人だと聞いて居りましたが。

守衛乙　それ見ろ、何も彼も知つてゐる癖に人を嬲り者にして居くさる。

守衛甲　さ、その三人の日本人の首を今茲で刎ねるのぢや。

女ノ一　いかに敵とは云いながら、異國の空で刎首とはなア。

人々『不憐なものぢや』と口々に云ふ

守衛乙　何を云ひくさる、何が不憐だ、東の島の倭人の分才で他國の軍に加擔し、我長安の都に弓をひくとは憎くい奴共だ、殊に俺の親父は昔百濟との戰爭の時に、百濟へ援兵に來た倭人奴の矢に當つて死んだのだ俺に取つて倭人共は不俱戴天の親の仇だ、奴等が今日の刎首は思ふても愉快で堪らぬわ、ハツ〳〵〳〵。

守衛甲下手から人の來る氣配を見て

守衛甲　お前達は此處に居つてはならぬ。早く彼方へ行つてくれ。

守衛乙　御處刑が濟んだら、また遊びに來てもよいぞだが女共お前達ばかりで來いよ。

里人共憤慨上手に入る。

下手から二人の武將出て來て臺の上に待つ。

程なく上手から史思明三名の從者を從ひて出て來る。

臺の上に着席。

武將の一進み出て。

先刻より安郡王閣下がお出になつていたくお待兼の御樣子で御座います。

史思明　なに、安祿山大人が見えて居る？

武將一　はい。

史思明　此處へか。

武將一　はい。

史思明　（立ち上つて）それは意外ぢや、早速お目にかゝり申さう。

武將二　只今此れへお出になります。

下手に安祿山及從者二名現る。

安祿山　お〻史氏待ち兼ねた。

史思明　大人が此れへお越しとは意外で御座いました、何ぞ急な御用でも？——

安祿山　急ぎ談じたい事があつて、海路を先廻りしてお待ち申した、それへ行て話さう

人々慇懃に迎へる。

祿山及從者、臺の上へ來る。

安祿山　今日處刑の捕虜の件に就て、處刑前に一度卿と内々相談したふて參つた（目配せする）

史思明見廻して。

史思明　いづれも腹心の者でムいます。

史思明は武將の一人に囁く。

武將また人々に囁く。

人々遠く離れて見張る。

安祿山　捕虜共の樣子は什麼かな。

史思明　至極愼妙に獄則を守り、聊か取り亂した樣子もなく、各々故鄕を偲ぶ詩歌などを口ずさんで居るそうです、その落着き拂つた態度は、今目の前に、處刑の迫つて居る者とはどうしても見られないと軍丁共が申して居りました。

安祿山　うむ、日本民人は不思議な魂を持つてゐる。

史思明　過ぐる日の戰ひに彼等が鋒を揃えて我が陣中に切り込んで來たあの鋭さ、今思ふて見ても敵ながら凄いほどの勇敢さで御座いました。

安祿山　我軍中の鋭鋒高力士の軍勢を一歩だに進ましめなかつた老仙江の戰ひは、捕虜の中に居る、あの覺信と云ふ僧侶一人の働きだつたと云ふ事ぢや。

史思明　惜しいものですなア。

安祿山　卿もそう思はれるか。

史思明　揃も揃つたあの勇敢な三人の首をみす〳〵刎ねてしまうのは、眞とに惜しいと思ひます。

安祿山　（膝を進めて）史氏相談と云ふのはそこぢや、敵に組みしたればこそ憎くもあれ假りに位置を替えて我軍に左擔したとしたら什麼ぢや、遠れな殊勳者として賞むべきではないか。（少し く聲を潛めて）史氏、茲ぢや、他日我々が事を圖るに、あの樣な勇者達を味方に持つ事は慥かに一方の勢力を養ふと云ふものではないか。

史思明　仰せの通りで御座います。

安祿山　そこで、御書中亟朝衡が頻りに陛下へ命乞をして居るらしかつたが、陛下におかせられては、彼の百濟に於ける白村江の戰ひ以來、日本人が敵方へ援兵する事をひどく癪にさえてゐると見えて、中々御許しは出さうもない樣子であつた。

史思明　成程朝衡主に取つては愛すべき同明の爲め、勿論一と肌拔がなくてはならぬ所で御座いますな。

安祿山　陛下の御許は兎にも角、此際、私はあの三人の命を救つてやらうと思ふがどうだ、方法は、勿論彼等三人の首を刎ねたと發表して、我軍中へ圍まひ置き、否應なしに他日の用に立たせやうと思ふのぢや。

史思明　それは眞に御名案で御座いますな殊に恩義に强く感ずるは日本民人の特質で御座いますからな。

安祿山　いづれ今日は朝衡も此處へ見えるであらうが、如何に朝衡が融通のきかぬ愚直者とて、同胞の命が助かる事を思へば、勿論內心我々の措置を喜ぶ事であらうと思ふ

思明史　勿論の事でムいませう。

安祿山　では兎に角一度此れへあの捕虜共を呼んで下さるまいか。

史思明　承知致しました。劉氏。

武將二　はつ。

史思明下命する。

武將二は直ちに守衞の甲に傳ひる。

守衞甲乙下手へ去る。

武將達は元の所へ着席する。

下手より守衞甲乙先途軍丁十名に圍まれて、僧覺信、藤原安惠、大伴貴司出て來る。

三人を臺の前面に座らしめ、軍丁は五人ツ、別れて左右に嚴然と居並ぶ

安祿山　(打とけた風を見せて)大人達長らくの辛苦御察し申す、私は安祿山ぢや。

三人頭を垂れる。

安祿山　今日卿等の處刑甚だお氣の毒に思ふだが此れも戰國の習ぢや、然し慫慂として處刑に就く卿等の見上げた態度は我が將卒の範として長く傳へる積りです。

三人等しく頭を垂れる。

覺信　苟にも貴國に弓をひいた我々に對して今日まで特に優遇を給はれた事を感謝仕ります。

安祿山は史思明に囁く。

史思明また武將の二に囁く。

武將の二また他の人々に命令する。

卒その他の人々遠く離れて見張りをする。

安祿山膝を進めて。

卿等に相談がある、もう少し近う。

安祿山　三人座を進める。

安祿山　相談と申して余の儀ではないが、卿等の意向に依つては祿山は卿等の命を救つて上げても好いと思ふのぢや。

覺信　では今日の御處刑を御許し下さると仰るのでムいますか。

安祿山　祿山一存で陛下の下命を左右する譯には行かぬ、執行すべきものは飽くまで執行の道を踏まねばならぬ、我が陛下におかせられても卿等の武勇を御存じないではないが、然し已れに向つて反抗する者を飽くまでお憎しみになるのが我陛下の御勘癖ぢや、今我々が卿等の爲に千萬言を費して助命を乞ふて、もそれは勞して功なきに終るのみぢや、されば事甚だ不正に似るが應急の策として卿等の爲に恁う云ふ方策を取らうと思ふのぢや、今日の處刑は勿論滯りなく處決したものと發表して、窃かに卿等三人を我が軍隊內に圍まい、他日用あるに望んで改めて卿等の爲に助命を乞えば、それ等の是非、諒解出來ぬ程の暗君ではないのぢや、で私共は卿等の意志次第に依つて此の方策を取らうと思ふが什麼ぢや。

三人感泣して。

覺信　直ちに斬つても捨つ可き我等三名に對し身に餘る優遇を給ふさへあるに、今また助命の御情、我等三名膽に銘じて永久に忘却いたす事ではムいません。我等とても貴國へ渡つた目的は元より戰に加つて異國の空に榮譽を覇る爲などでは勿論なく、他に聊か望みを持つ者で御座いまして、その望みを果たす間、貴國に留まる術として、安

南の地にしばし身を寄せたに過ぎぬのでムいます。

安祿山　勿論わし達にも卿等が深い意味あつて安南に組したとは思ふては居らぬが然し卿等の他にある望みと云ふは？

覺信　その事は茲暫くお答ひ申兼ねるのでムいます。

安祿山　いや、此りや祿山甚だ潛越であつた許して下さい、で今の方策はどう思はれるか？

覺信　有り難い御諚に存じます。

一人の武將慌て、史思明に囁く。

史思明、安祿山に囁く。

人々開き直る。

安祿山　只今朝衡大人が見えたらしい、此の話は暫く打ち切つて置こう。

一人の武將下手から走つて來る。

武將三　只今光祿太夫閣下のお越しで御座います。

續いて從者二名を從ひて朝衡（實は安倍仲麿）出て來る。

人々出迎へる。

安祿山　おゝ朝衡大人、お待ちして居ました

朝衡　（臺へ上りながら）尊臺が此れへお越しとは意外でした。

安祿山　少し捕虜處刑の件に就て御相談したい事があつて參つて居りました。

朝衡　そうでしたか。

史思明　お早いお着きでムいました。

朝衡　御苦勞でした。

人々着席。

覺信　おゝ仲麿主。

貴司　（驚きと憤激を以て）うむ、已れが安倍仲麿か。

覺信　（强く制して）大伴主、言葉を愼みなさい、場所柄を考へなさい。

安祿山　（大伴を制して）そう一途に興奮してはならぬ。（朝衡に向つて）早速ですが、大人に相談と申すは、此れ等貴國人三名の助命の事に就てです、今も此の人達の意向も聞いて見たのですが、且つ尊臺の苦しい御心中からしても此の際是非助命の策を取りたいと恁う思ふのですがな。

朝衡　御厚意有り難う、幸ひん陛下は此等同胞の極刑を減ぜられ國内追放の有り難い御諚を給はれました。

三人等しく頭を上げる。

安祿山　せめても極刑を許された事は喜悅ですが、が然し、今此の場の極刑を許して此の土地を追放してやる事は、それは結局鎖をといでやつて背後から追ひ打つのと同じ結果に陷りはしますまいか、此れは寧ろ今日の場合追放したものと發表して置いて、或る時期の來たるまでいづれかの陣中へ。

朝衡　（制して）それは以ての外の事です、定められた刑罪に對し若にも陛下の御下命に背く事は出來ません。

安祿山　いや尊臺の御心中はよく御察し申す然し元より此の責任は不肖祿山が持つつもりです、その點御心配なく。

朝衡　一度は私も此等同朋の爲に減刑を願つて、幸にして刎首の極刑を免れたのです、此れ以上を望む事は出來ません。また此れ以上私情に渡る事も私は望みません。

貴司　（憤慨して）うむ、勿論已れ如きの命乞に依つて助りたいと願ふ我等ではないが然

し他國の仁にして斯くも深い情さへあるにいかに他國の君主に身も心も賣つた不貞の己れとは云へ、目の前に苦む同胞を憐れとは思はないのか。

朝衡　默れ、主達こそ他國の軍に身を寄せ、剰へ捕虜にまでなつて大和民人の恥を異國の空に晒した大馬鹿者共、せめてはその恥を自ら雪ごうともせず、また命が惜しうて泣事云ふか。

貴司　うむ、己れッ。

立ち上がるのを覺信と安惠止める。

安祿山　そう興奮してはならぬ、大人もう一度お考を直して頂く餘地はありませんか今陛下の御下命に背き云はゞ事甚だ不正には似ますが、然し他日此の人達が何等かの功を建てた時に、今日の造反を佗ぶれば、その點決して無理解の君主ではないと思ひます、一つには大人が同朋への友情であり一つには我兵力を養ふのです、祿山は此の際我唐國の爲めに規則よりも實際を貴びたいと存じます、大人もう一度御熟考を願いたい。

史思明　思明も同感で御座います、郡王閣下の仰る通り一旦は御下命に背くに似るが廳て現れ來たる結果に於て、陛下は必ずお喜びを以て今日の不正をお許しになると存じます。また此の義に就ては郡王閣下と共に身不肖ながら一切の責任をお引受け致します。

朝衡　我同胞に對して斯ほどまで御同情下さる事は私に取つても誠に感謝に堪えません が然し刎首の極刑が最も適當の刑であるにも拘らず追放と云ふ御寛大の刑をお許し下された事は、此等三人に取つて身に餘る幸福でなければなりません、此の先き死ぬも生きるも、三名の神より下し給はる運不運ぢや、よしまた此等を我軍中に養ふとせんか、おめ／＼と敵の手に捕虜にされた程の弱虫共ぢや、果して何の益がありませう。

（聲荒く）最早言葉の要はない、直ぐに引立てゝ追放の用意せへ。

朝衡悠然として從者二人を連れ下手にかゝる。大伴貴司立ち上つて。

貴司　仲磨待てッ。

仲磨極めて冷淡に僅かにふり返つて見て下手に入る。

覺信と安惠は貴司を慰める。

軍丁十名は直ちに三人を引立てる。

安祿山　（嘆息して）卿等に對して今更甚だお氣の毒に堪へません、然し事茲に至つては最早や祿山の力では如何ともして見る術がない、せめては極刑を免れた事をまだしもの幸として此の土地を放れて貰ひたい。

人々感極まつて平伏する。

覺信　身に餘るお情、我等三人例へ此のまゝ骨を野に晒すとも忘却仕りません。

安祿山指示して軍丁に命じる。

軍丁等は再び三人を引立てゝ下手に去る。

史思明　然し、今に初まつた事ではないが、光祿太夫閣下の一徹にも呆れましたな。

安祿山　うむ、然し意外だつた、如何に頑固な朝衡でも、同朋に對してまであれほど冷酷な男だとは思はなかつた。

史思明　異國の君主に操を賣つて高官をかち得た程の仁、あれ位の冷酷さがなければ出來ぬ事で御座いませう然しあの三人を矢張

り此のまゝ追放なさいますか。

安祿山　うむ（考へ込む、思ひ出した樣に顏を上げて）史氏、私は考へる事がある、あれへ行つて相談しやう。

二人下手に入る。

從者續く。

舞臺空間。

朝衡の老僕林汀瀧、小さな風呂敷包を下げ忍びやかに正面より上つて來る。

四邊を見廻す。

下手から人の氣配に隱れする。

朝衡下手から忍びやかに出て來て石塔の蔭に身を隱し、再び上手に現はれた時、林、進み寄る。

林　大人只今參りました。

朝衡　お苦勞だつた、舟の準備はよいか。

林　下の渚に繫いでございます。

朝衡　着物と食物の用意は出來てゐるか。

林　いづれも舟の中へ整へてございます。

朝衡　御苦勞ぢやつた。

林　（包を出して）これはお申附けの品でございます。

朝衡、うけ取つて懷ろに入れる、再び下手に人の氣配、朝衡は再び塔の蔭に、林は上手に隱れる。

軍丁出て來て左右に別れる。

覺信、貴司、安惠悄然と出て來る。

三人軍丁に向つて禮をする、軍丁答禮して下手に入る。

貴司、軍丁等の姿の消えるのを待つて荒々しく立ち上がる。

貴司　さ、行かう。

安惠　遲れてはならぬ。

覺信　そうお主達のやうに急いではならぬ。

貴司　覺信師、何を言はれるのだ。仲磨の乘物が出てしまうては取り返へしが附かぬ。

安惠　覺信師、今更、なんたる悠長沙汰だ。

二人は覺信を引き立てるやうにして行かうとするとき。

先きより、臺の上に來て居た、朝衡靜かに呼び止める。

朝衡　仲磨はこゝにゐる。

三人驚いてふりかへる。

貴司　おゝ仲磨。

三人ひとしく、走りよる。

貴司　えゝ、賓國奴　座を下れ　座を下れ……

貴司はいきなり、臺の上にかけ上り樣。

貴司　えゝ、座が高いッ……

朝衡を蹴をとす。

朝衡、地上に倒れる。

貴司　奴、賓國奴、よつく聞け、俺達三人は唐に渡つて三年、他國の戰ひに左擔し、捕虜になつて生恥を忍んだのも、奴に會ふまでの命だつたのだ。

安惠　異國に操を賣つた賓國奴、穢れ果てたその老骨、今更故國へ歸へれとは云はぬ、俺達三人の前で、その穢れた命を絕て、せめては奴が自らの罪を自ら處決した死樣を見て故國の恥を雪ぐのだ。

覺信　（二人を制して）仲磨主、異國の君主に使ひ、寵愛に身の程を忘れて、故國の君恩に背き同胞の友情を忘れ、妻子の恩愛までも捨てたほどのお主を、神は何故今日まで許されたか、故國には帝を初め奉りお主の姿を知らぬ庶民までお主の歸へりを待つて居るのだ。

朝衡　（靜かに身を起し）私も今日の來るのを待つてゐた、高の知れた此の老骨が細首、

取らうと思へばいつでも取れる、暫しの間その命を許して仲麿の申すこと、今端の遣言と思ふて聞いて下さい。

貴司　この場に及んでも、まだ我達をたぶらかそうとするのだな。

覺信　さ、云ふ事があらば聞かう。

朝衡　私とても此の唐の國へ來てすでに三十餘年、日出づる空、月出づる空仰ぐ度ん故國を思はない日とては一日もなかつた、拙ない詠ぢやが仲麿の胸中を語つたものぢや見て下さい。

覺信、受取つて讀む。

覺信　青海原ふりさけ見れば春日なる、三笠の山に出でし月かも。

貴司　それほどに祖國を思ふ主だつたら何故故國へ歸へらなかつたのだ、何を好んで異國の君主に操を賣つた。

朝衡　（四邊りを見廻して）爾來數年の間一人異國の土地に在つて我意中を誰れに話らう樣もなく、今日まで悶々の日を送つて來たお主達の間を俟つまでもなく聞いて貰はなければならない事はその事ぢや、いやお主達が傳えてこれを祖國の同胞に示して貰いたい、お主達まづ、怒りを沈めて下さい、安倍仲麿が老骨は異國の野に晒すとも心までくさつては居なかつた。

貴司　うむ、已れ勝手な申譯け、聞きともないわ。

覺信　まあ大伴主、暫く氣を沈めなさい仲麿主、その申譯をきかう。

朝衡　私とて、日出る國に生をうけながら故なくして何とて異國の寵遇に甘んじられやうか、仲麿が意中、思へば我が祖國の昔、帝天智の御代に初まるのだ、曾つて新羅の國が唐の援兵を借りて百濟と兵を交へた時我が大和の國は兵を百濟に貸して援けたが不幸にして利あらず、かくして百濟は遂に亡び、續いて高麗例れ、新羅もまた殆どその存在を危ふくした、かくして三韓の地は全く唐朝廷の掌中に歸してしまつた、既に創業の中ばを完徹して生氣潑溂たる時の唐皇帝高宗が最後の眼はこの時果して何處を睨んだであらうか、問もなく國交親善の名のもとに彼の郭務悰をして我が朝廷に上表したのも、そこに何等かの意味がなくてはならぬ、時の我が帝、天智天皇が都を要害の地大津志賀に移し給ひ、已に三韓の地に全く威力を失つた我が兵力を北國蠻夷の地に求め給ふた御震禁の程、今にしてさこそと御推察申上ぐるだに畏いことぢや、然し唐の高宗中宗睿宗の代を過ぎて今や玄宗の御代に至つて果して皇祖高宗の思想は消えたどらうか、お主達神が不肖仲麿をして永久に此地に止まらしめ給ふた所以は此處にある、その英才と武略に於いて今や四百餘洲に覇を握る、現皇帝玄宗は、祖先高宗の意を續ぐと云ふよりも寧しろ帝玄宗自身の創業として今正に我が祖國大和に向つて腕を托し鋒を磨きつゝあるではないか。

人々は全く驚愕してゐる。

果してこの大唐帝國の勢力に對して我祖國の國防はどうか、兵力はどうか、これを思ふ時、私は祖國への歸心も失せ、妻子の面影を忍ぶ隙もなかつた、身不肖ながら、せめては此の身を故國の爲めに犧牲となし、幸ひ玄宗の寵遇を奇貨として永久に唐朝廷

に止まり力の限りをつくして帝玄宗の我祖國、浸略の企圖を未前に防がんものと我が陛下のお心に背き同胞のそしりに甘じて今日まで此の地に止まつてゐた、老骨が胸中御察し願いたい。

三人は知らず〳〵の間にひれ伏してゐる。

貴司は聲を上げて泣き出す。

貴司　大人の御胸中にそれ程の御意志のある事も知らず、淺はかな心から一途に大人が故國へ歸へりまさぬをお恨み申し、あらうことがお體を土足にかけ申した天罪にあゝ此の身を碎かれてしまいたうございます。

三人、仲麿の膝に縋つて聲をあげて泣く。

朝衡　此の身を土足にかけたは取りも直さず故國を思ふお主達の誠忠、その誠忠のお主達なればこそ大事も打明けたのぢや、氣にされるな、私はそれが頼もしくまた嬉しかつた、が然し先刻は如何に仲麿が無情者と思はれたであらう　それも仲麿が微意、お主達を故國へ免れさせたかつたからだ、彼の安祿山及び史思明の一味は窃かに兵を養ひ機を見て朝廷に弓を彈きかねまじき輩ぢや、お主達に情をかけ圍ふて他日の用に立てやうとした彼等の意中も察しられる、仲麿が心にもない惡口雜言を以つてお主達の追放を主張したのも心はそこに在つたのぢや、許して下さい。

覺信　あまりにも御胸中を察し得なかつた我〳〵共、今更乍ら慚愧に堪へません。

四人取り縋つて泣く。

朝衡、突然顔を上げて。

朝衡　最早云ふべき事のすべてをつくした、獰漢邪智にたけた安祿山の一味、此上何等かの企てないとも限らない、乘て下僕を以つて、この下の渚に小舟を一艘用意させてある、中には衣裳と當座の食料を備へてある筈ぢや、これより一ト先づ安全の地を求めて靜かに歸國の策を取つて下さい。

貴司　では大人にはこの先とも此の地に止まつて？

朝衡　今も云ふ通り、仲麿はすでに屍を異鄉の野に捨てたのぢや、お主達幸ひに本國へ歸へられたら、せめては仲麿の微中を同胞に傳へて今までの汚名を雪いで下さい、さ時を失してはならぬ。

立つて上手を手招きする、林出て來る。

暮色迫る。

朝衡　この方々を舟まで御案内申してくれ。

林　畏りました、皆様どうぞお出で下さいませ。

覺信　ではこれでお別れ申さなければなりませんか。

朝衡　共に大事を持つ體ぢや、お互ひに涙を止めませう。

覺信　では仲麿主……

貴司　大人、お躰を。

安惠　お別れ申上げます。

三人眼を押さへて行かうとする。

朝衡　お主達。

三人ふり返へる。

朝衡　笑ふて下さるな、仲麿が故鄉をたつ折また父の名も呼べない嬰兒を妻の手に渡して父の歸るまでに大きくなつて居よと、別

れて來たのぢやつたが（暫くの間に涙に聲がくもり）數へて見れば今は相當の歳になつてゐる筈ぢや、幸に親子健在であるならば、此の品を永久にま見えぬ父の片身だ、と渡してやつて下さるまいか。

安惠　安惠走り寄つて受取る。

朝衡　必らずお渡し申します。

三人　ではお主達、隨分途上を注意なさい。お健在をお祈り致します。

三人は振り返りながら老僕に連れられて正面に去る。

日全く暮れる。

仲麿は張り切つた哀別の情、破裂したやうに臺に駈け上つて見送る。

どこからか壯嚴な樂の音が聞えて來る。

仲麿はかけて上手の中段の岩上に立つて見送る、更に舟の進むにつれて上段の岩頭へ駈け昇つて見送る。

正面海の彼方に大きな月が靜かに昇る。

老僕正面より上つて來る。

老僕は下から岩頭を見上げて泣く。

林　御推察申上げます。

朝衡　もう舟は見えずなつた。

老僕のすゝり泣く聲が靜けさを破つて聞える。

朝衡（悲痛な聲で）、青海原、ふりさけ見れば春日なる、三笠の山に出でし月かも……

と唱ふ。

樂の音と老僕の泣く聲とが憐れに響く。

——幕——

浪花座五月興行上演

金平化生討（ぴらけしやうたづ）

一幕三場

金平本から着想した荒唐無稽の舞踊劇

立案　鎌谷來水

作章　鎌谷慶次

登場人物

阪田兵庫頭公平　澤田正二郎
物見役の河童　丸茂三郎
幽靈に化けた古狐　久松喜世子
美人に粧ふた女怪（四人？）
多くの妖怪
三上山で退治られた蜈蚣の精
鉢叩きの骸骨僧　六人

第一景　寺の裏庭

舞臺面　朧夜にほの白き梨花と、點在せる繪卒塔婆を繪畫風に描いた背景に、青い照明を使つて春愁の氣分を漂はす。

僧六人（黑染衣を纏ひ、頭には骸骨の作り物を冠る）三人宛差向ひ合つて、舞臺の中央に約二間の間隔を保ち二列縱隊を作る、其裡上手先頭の僧は大瓢簞を、下手の先頭は敲鉦を他は稍小型の瓢簞を打鳴らし、一齊に鉢叩きをやる

〈善き光ぞと影たのむ、世の光ぞと頼むちやのきよの佛のきよひよん、御寺たつふねきよひよん、會津の郷は陸奥あり、瓢簞ふくべに緒をつけて折り〳〵風の吹く時は、ひよひよらひよん、潮路の寒き山野にていどうと打鳴して、

三界を家と走り廻る鉢叩きが、精々樂にかけて後生を願はゞ、などか佛にならざらん。

皆投げやるやうに中止する。

僧一　何が佛、何の佛、あゝ（嘆息）娑婆にある時は、名僧だのヤレ善知識だと煽て上げられ、つい自惚れが到頭こんな慘めな姿にして了つた。

僧二　世間から自分の器量や德を買被らされたのが身の終り。

僧三　あゝア（嘆息）この古寺の化生共を一番封じてやらうと、大それたお切匙を何故したのであらう。

僧四　來る僧も〳〵、骨までしやぶられ魂は浮ばれず。

僧五　毎夜々々化物共のお伽に鉢叩きをやらねばならぬ。

皆顏を見合せ。

僧皆　末世だなア（首をうなだれる）

僧六　誰ぞ變化を退治て、我等の苦患を助けて呉れる（張つて）滅法界强い人間はなア。

頷き合ひ。

僧皆　現はれまいか？。

僧二　オヽそれで思ひ出した、後住跡絶たこの寺に今宵珍らしく泊つた者がある。

僧三　また生噛りな法力を振廻して、命も一緒に棒に振る仲間であらう。

僧二　イヤ見るからに筋骨逞しい髭武者で、懸値のない豪傑らしい。

僧四　そんな者に得てして見懸倒しが多い。

僧五　さう冷評したものでもあるまい、佛頼んで地獄に陷た我々より、モ少し氣の利いた人間かも知れぬ。

僧六　結局、力のある人間が出なければ、どの場合でも纏りがつかぬ。

僧一　あゝさうとも！〳〵、お互の樣に團栗の背競べでは、世の中の邪魔にこそなれ一向益ない話、まア鉢叩きが分相應であらう、どりや始めやうか。

また鉢叩きになる。

〈それ一代教主釋迦如來の說法は、華嚴阿嚴方等般若、法華涅槃法相律宗なんどゝ云へる小難かしき事ども、我等がやうな愚痴無智鈍なる者は思ひも依らぬ彼方の門ではひよん、ひよひよんのひよん、此方の門ではたん、たゝんのたん、たん〳〵からりころりと打鳴らして願ふ後生は茶筌召せ、茶筌召せ、佛法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり柳はみどり花は紅の、いろ〳〵なれば急いで後生を願ふべし……

この唄の切れぬ間に、骸骨の僧等は忽然と消失せる、後は陰慘な氣分漲り、一陣の夜嵐。

竹本〈さても其後、鼎惡には智劍を揮ひ、破邪には剛勇を俟つとかや、茲に右大將源の頼よし公の四天王、阪田兵庫頭公平とて、三國無双の强者あり、主君に暇給はりて、毛脛に委かす旅衣、きのふは波濤を凌ぎつゝ、今日は山野に訪るゝ。

よろしく。

木がしら。

背景を引き割る

第二景　同じく金堂

舞臺面　正面の中央奥深き所に須彌壇あり、大日、藥師、彌陀の三如來の座像並ぶ、堂の周圍は壁を回らし下手に鎌倉戸あり、須彌壇の前方には四本の柱相當の間隔を取つて横に並び其上に桁をわたす、屋根裏よりは天蓋下り、尙前に護摩壇と禮盤あり、横には蒲團に乘れる大木魚、いづれも荒朽ちて無慘な狀を呈し、既に妖味籠れるが如き情景。

護摩壇には公平寛々と臥り居る（扮裝は金平本の挿畫を參酌、尙妖怪も在來のを採らず、成るべく諧謔的にして怪奇な假面や隈等の創作を希望する。

竹本の續き〈春さへ知らず荒朽ちて、蜘蛛の網結ぶ金堂に、月洩る宿の夢破れ。〉

公平眼を覺して大欠伸

公平眼を覺す。

公平　隙洩る風に熱睡も破れた（邊り見廻し）ウム幸ひ茲に大木魚、これを枕にどりや今一ト休み。

猿臂を延ばしてズル〳〵と引寄せ頭をのせると、突然木魚が悲鳴をあげ

木魚　痛い〳〵。

公平不審顏、尻を木魚に見せて居た小怪、クルリと筋斗返つて正體を現はす、公平首筋引捉へて。

公平　われは何だ。

木魚　アいたゝゝモ少し緩めて呉れ〳〵、出し抜けに枕にしられて溜るものか、己れは此化物等の物見役で河童の伜だ。

公平　何だ河童だ？　河童のくせに尻を出すとは鈍な小童だ。

輕く突くと下手へ轉がり、忌々しさうな表情。

木魚　笑つてゐやがる、嚙もかア！什うだ怖からう。

種々な身振り。

公平　馬鹿に可愛い、イヤ怖い〳〵モツトやれ〳〵。

木魚　コリヤ河童嬲りするな。

〈夜の帳りに化物芝居、かつぱひやろは三番叟、暗に一聲烏啼き。〉

側なる錫杖を持つて滑稽な三番叟を踊り、下手の田樂返しの壁へ消へる。

公平　アハヽヽこりや飛んだ眠氣ざましだわい。

〈不思議やな、風腥く更くる夜に、髪はおどろに振亂し、姿も冥々朧々と、妄執晴れぬ魂魄の、たゆたき眼許凄まじく。

須彌壇の下から煙硝の煙と共に幽靈現はれる。

幽靈　恨めしや。

公平　イヤ様々なものが出るわい。

幽靈　此奴、眼を廻さぬナ、恨めしやア、これでもかア。

種々凄さうな表情する。公平はニヤリと笑ふ計りで幽靈すつかりテレる。

幽靈　イデこの上は……

公平　共に冥途へと云ふのか。

先を越されて幽靈グツとセリフに詰り、手持無沙汰に公平の襟髮掴んで宙に引上げやうと氣張るが重くて一向上らず、公平良い加減に嬲つて置

いて肩を振り拂ふと、幽靈よろめいて前にこけかゝる、其弱腰を蹴るとヘナ〳〵と向ふでへたばる。

幽靈　キャア！。

また立上つて。

幽靈　恨めしい。

公平　何が恨めしい？

幽靈　エヽ、それがその何時も恨めしいだけで充分きゝめが有つたので、その後のセリフはまだ考へては居りません。

公平　フン一體貴樣は何だ？

幽靈　ヘイ、實は狐の化けたので。

公平　何？狐、仲々の凄腕だジタバタするな先刻の河童の樣に陽氣に踊れ。

幽靈面喰ひ乍らも嫌な表情。

公平　嫌だと云ふのか？

幽靈　イヤ演ります〳〵、おつかない眼玉だ悲しや〳〵。

幽靈紋切型の格好をする、ドロ〳〵の太鼓。

公平　馬鹿ッ。

幽靈　ヘイ。

一喝に飛上る拍子、陽氣な踊りとなる。

濱風に、ついふら〳〵と夕涼み、恨みつらみもなきがらの、さまよひ出でたる氣紛れに、何んと答へもコレサ迷ふぞや、地獄の苦しみ扨て置いて、いま鐵拳の憂目をば、助け給へと計りにて其處ら邊りに穴あれば消へて失せ度き風情なり。

公平　エイ、面倒だ。

幽靈の首を引張ると、スツポリ拔ける。

幽靈　くわい〳〵。

狐の啼聲を立てゝ上手の壁に消へ失せる。

公平　狐の首では小づけにもならぬわい。

手に殘つた狐の首を投げ捨てる途端四つの柱の陰より、美女四人酒宴の道具を携へて現はれる。

夢にだに、みめうるはしき手弱女の、情盛りの色含み、徒ら臥しの辛氣らし殿御戀しく進み寄り。

申しお客樣、旅寢のうさを慰めに、打連れお伽に參りました。

公平　イヤ化物も、かう酒落ると話せるわい

あれ憎らしい、仇口は止めにして幸ひ持參のさゝ一つ。

一の女と二の女、酌をしやうと土器を公平に渡す。

公平　ヲットその心配無用々々、書間酒屋で一石入の大瓶を四つ五つ空にし、少しは醉も殘つてゐる、然しあとひき上戸の癖として腰に下げたこのふくべ、ドリヤ手酌と出かけようか。

四斗俵大の瓢簞を宙釣させ、公平が如何も輕々と持ち上げるやうに見せて、先づ土器に酒を注いで一杯呑干すが、其器の小さいのに嫌らず後ろに投捨ると、須彌壇のキンに當る其音に氣づき、キンを女に運ばせ夫れに酒を移して兩手で持ち添へ。

公平　コリヤ手頃の。

盃傾けゴツクゴク、咽喉が鳴るは瀧呑みに、側なる女は興さまし。

さつても大きい酒袋、什ちがお化かオ

、怖はや。
女達いづれも驚く、公平些か陶然となつて。

公平　エーイよい氣持だ、サア女共看せい〳〵。

四人の女踊る。

〈八俣の大蛇もナア、酒と女についい騙された、ソレエ、そさま計りはナゼ術がない。

〈鈴鹿の鬼神もナア、千手の手管に命を捨てる、ソレエ、そさま計りはナゼ術がない。

公平　ヤンヤ〳〵。

公平愉快がつて手を叩く、その音のすざましさに女共膽を潰す。

女二　テモ類拔けのお侍、お前は人か？お仲間か？

公平　ウム知れた事、己れは人間だが、化物にも緣がある、さらば身の上語らうかい。

公平の物語後に踊りとなる。

〈わしが親父は山姥の、腹から生れた公時で、またお袋も人ならぬ、琵琶の湖水に三千年、住むてふ大蛇の化身とや三上の山に蟠る、むかでの爲めに龍宮の、親類眷族淩はるゝ、母は殘りて秀郷の、力を籍りて退治しが、其執念のやむなくも、萬代池に身を遁れ、鬼女の胤なる父親と、結ぶ契りに孕りて、龍女の腹に五とせを、過して生れしこの。

公平　公平だい。

〈つらは怖いがはらわた佛、惡い奴なら腕立せうぞ、富士の擂鉢コロリと起し夜叉や羅刹は愚かなことよ、第六天の魔王まで、チョイと片手で掴み込み、擂粉木取つてすり潰し、鬼の泣味噌朝餉の馳走、また酒戰なら名取者、八斗なみ〳〵南京鉢で、二つ三つは咽喉もとヒヤリ、五つ六つで舌舐めずり、少し醉ふのが八九杯、焚喰どんせ李白もおぢやれ、これ程强い荒武者も、女ばかりは苦手でござる、すね木の松に藤かづら、乙に綿んで迷惑な、髮毛に大象繫ぐも定よ、仇な眼許で勇士もコロリ。

この踊の最中、眼に觸れぬ怪物が公平の五體に纏ひついて邪魔する、公平も種々その表情あり、面倒だと振拂ひ蹴飛ばし或ひは掴んで投げるとその都度喜劇映畫伴奏の擬音を用ひヒユウ！トンの音を立てゝ壁或ひは屋根裏等に胴體をメリ込んだ儘委を現はす、また四人の女は一人々々首をブン擲ると頭が胴體にメリ込んで逃げ失せる。

公平は其儘踊り草馴れて護摩壇へ大の字に寢る、と、天蓋よりは變化飛び降り、佛像は筋斗返つて化生となり、柱の蔭、壁の中、屋根裏等あらゆる處より妖怪飛出す、現はれた十數の化物は公平の周圍を取卷いて踊る

〈とつかけべい、我等は變化の先手の衆鬼火振り立て夜討がけ、狸の打出す攻め鼓、牙を光らす狼や、爪を研くは古猫貉、初陣の武者にもゝんがア。

〈鬨の聲には、いで喰らう。

化物一齊に叫ぶ。

化物　いで喰らう。

公平この聲に眼をさます。

〈金鼓の響は家鳴震動、火矢に代る妖火

の閃めき修羅の巷ぞ恐ろしき。

今まで化物共を齒牙にかけなかつた公平も、遂に癇癪を起して大いに暴れる、鐵拳を振ふ毎に擬音を使つてヒユウ！といふ凄い唸りを立て、また四股を踏むと五人位一度にヒツクリ返へる、此處でリズム化された立廻りとなるが、其裡に四本の柱の上手より、第一と第二、第三と第四の柱の間に、觀客の眼に紛はしい色に塗つた鐵棒を七尺位の高さで横にわたしこれに縋つて妖怪が双方で機械體操的曲技を見せ、最後に大車輪を演じ口から仕掛けた煙火を吹く、また宙乘りを利用して怪物二四を公平が事もなげに引提げて桁に首釣させたり、上より環のついた綱を二つ七尺斗りの處にまで下げ、二個の妖怪が環に飛びつき背をグツと持上げ、四肢を環に集め括り猿の形になると同時に、公平は其背に下から兩手をかけて、二つの化生を軽々と差上げてゐるやうに見せ、公平がエイツと氣合諸共に投げると環を手放し双方に飛降りてコロがる、我ひは屋根裏より土蜘蛛の精が糸を傳つて下り、繰り出す千筋の糸を綯ふて綱を作り公平を縛らうとするなど、種々なる技巧を弄し、ユーモアとケレンと殺陣と舞踊とグロテスクな色彩の交錯に、痛快極る荒唐無稽を現出させ、結局化物は鎧袖一觸にケシ飛んで了ふ。

〈またも現はす怪異の姿、地軸も拉がん音を立て、虚空に向つて吐く息は、炎となつて燃へ上り、瞋恚の眼爛々と。花道より大むかで現はる。先頭に立つ者、むかでの胴丸を冠り、そのあとは十數人小腰に連なつて胴體となる〉

〈我を知らずや、その昔三上の山に年ふりし、蜈蚣の怨靈なり。

〈汝の母に我命、縮められし其恨み、觀念せよと打かゝり、鬼一口に喰まんとす。

公平　ウアハヽヽヽ、ヤア猪口才な敵呼り、いで來い。

〈と身を構へ、無手のあしらひ総横無盡むかでも公平と戰ひフラ〳〵にされる。

〈さしもの蜈蚣も足許亂れよろぼひ〳〵倒れ伏すされど、凝つたる怨念に、隙を覗ひ公平が、身體を無殘や十重廿重公平プツと噴笑し。親の讓りの金剛力、いでこれ見よ。

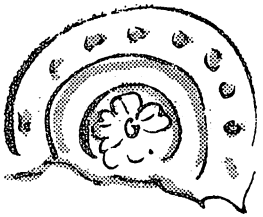
公平

〈と、五體に湧出る怪力は、蛇に卷かれし山雉の羽叩き見するが如くにて。遂にむかでは公平の身體をグル〳〵卷きつけるが、ウンと公平の一ト力みに胴體はズダ〳〵になり八方に飛散る。

〈蜈蚣の胴體其儘に、微塵となつて飛び散れば、ヤア遁がすなと辯めく妖怪、唯一ト振りの太刀風に、討亡ぼせしその有様、天晴めいよの武夫と、貴賤上下押なべて感ぜぬ者こそなかりけれ。

隱れて居た殘りの化物公平の周圍を再び取卷く、公平始めて大太刀を拔いてグルリ一ト振り、妖怪一齊に佛仆れ、公平大太刀を擔いで大見得を切り足踏み鳴らすと、凄まじい地響に堂中動搖して器物は轉げ落ちる：

——幕——



大麦蒔雪

國分寺惡僧眼

（中座五月興行上演）

時　天平時代
處　奈良の都
人　石川の沙彌麿　我童
大伴の國足　延若
玄昉僧正　壽三郎
奈保人　大吉
赤麿長三郎
櫻兒扇雀
吉備下道の眞備
秦阿曾彦
玄俊
阿波比女
大宮人、僧、侍童、巷の男女
賣られ行く奴、尼僧等

第一　御笠の森

舞臺面　山藤のまつはつた老樹のもとに臥牛のやうな巖がある周圍は鬱蒼たる、深林の色に包まれ地上は散り重なつた枯葉の間から春草が萠出てゐる。

巖の上に半結跏の姿勢をとつて櫻兒が行を修めてゐる。

かすかに啼鳥の聲。

やがて老樹の後から石川の沙彌麿が現はれる朽葉を踏む人の氣勢に櫻兒の行は障げられる。

沙彌麿　あなたはこんな森の中で何をしてゐるのです。

櫻兒　行をして居ます。尼になる爲めに。

沙彌麿　私も以前同じ行をやつたことがありますよ、だが淨行などを修めた所で何が得られると思ふのです。（巖の一方にかける）

櫻兒　自分も行をしたと云ひながら、なぜ人の行の障げをするのです。おのきなさい、私の淨行が汚れます。

沙彌麿　はゝゝゝ、あんたは正直な虚女だ。だが、本統の所を云ふとこの頃の佛法流行出家流行にかぶれてゐるのだ。

櫻兒　（怒る）何ですと。

沙彌麿　まアそんな怒らなくつてもいゝ。ねエ櫻兒。

櫻兒　どうして私の名なんぞ

知つてゐるのです。

沙彌麿　自分の戀しい處女の名も知らないでどうするのです。

櫻兒　おのきなさい、あつちへ行つて下さい

沙彌麿　のけならのきますがね、まア暫らく髮にゐさせて下さい、私は人間のしなければならない本統の行をあんたに教へてあげる、ねエ櫻兒あんたは何んだと思ふ、その行が、それは戀と云ふものですよ。

櫻兒　あなたは惡魔のやうです、石川の沙彌麿よりもまだ〳〵恐ろしい大惡魔です。

沙彌麿　石川の沙彌麿を知つてゐるんですか

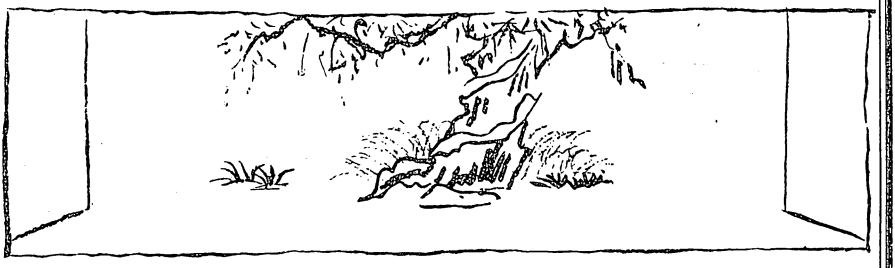
（ほゝ笑む）

櫻兒　尊い御寺であらうが大臣のお屋敷であらうが勝手放題に荒し廻はるばかりか大膽にも石川の沙彌麿と名を名乘つて行くといふ大泥坊、都に住むものは誰でも知つてゐます。

沙彌麿　だが沙彌麿もあんたの信仰してゐるあの僧正ほどの惡黨ぢやありませんよ。

櫻兒　玄昉僧正樣のことをまア勿體ない、佛罰を、冥罰を知らないのですか。

沙彌麿　冥罰、その冥罰の當るものが即ち玄



坊さ、はゝゝゝ。

櫻兒は去らうとする、立閉がつて。

お待ち私がその譯を云つてあげる。

櫻兒　いゝえ、澤山です。

沙彌麿　いくら聞くまいと思つても天の聲は自然と耳にはいらずにはゐない、そも〳〵玄昉といふ奴は國賊さ(驚き去らうとする櫻兒を遮つて)なぜかといへば、身は佛徒でありながら國の政に嘴をいれて自分の邪魔になるものはどし〳〵やつつける善人を惡人にしたり忠臣を逆賊にしたり。

櫻兒　よして下さいまし、そんなことがお上へ聞へたら。

沙彌麿　私の首が飛ぶといふのでせう。

櫻兒　大變なことになります。

沙彌麿　あの坊主のことなら斬らさずには置かないでせう、だがさう易々と首を斬られる沙彌麿ぢやない

櫻兒　え、沙彌麿ですと。

沙彌麿　はゝゝゝ、今あんたが私につけてくれた名ぢやありませんか。

櫻兒　あゝ、私は恐ろしい。

沙彌麿　戀されるのが恐ろしいとは、あなたはまだつばなの歌垣にも出たことはないのですか、ねエ櫻兒肩に手をかける。

櫻兒　(戰いて)やつぱり、やつぱり惡魔……

振はらうと、茂みの中へ逸散に逃げ去る。

沙彌麿はいとしげに見送る。

下手から玄昉の弟子玄俊が出る。

沙彌麿と顔見合せ、互に異しむ意。

沙彌麿は下手へ去る。

玄俊　櫻兒　櫻兒はゐないのか。

四邊を見廻しながら呼ぶ。

——暗轉——

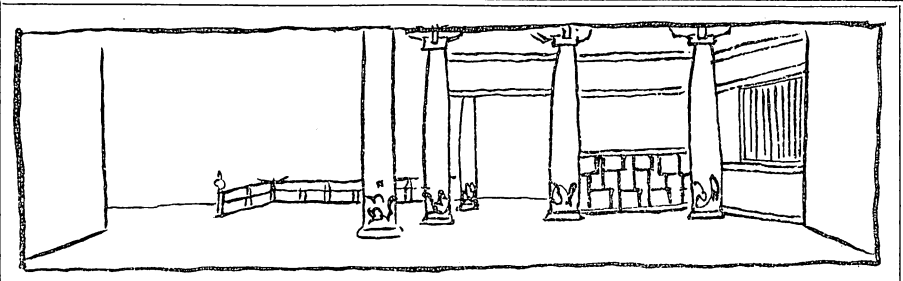
第二　玄昉の丈室

舞臺面　蘊々と立つ丸柱、上手寄りに一箇の机と二脚の榻、その側面に鳥毛で織りなされた屏風を立つ、上手側面の奥から水の如き燈光が斜めに机上を照らす。

玄昉僧正と中宮亮下道の眞備とが對座してゐる。

眞備　御坊のいはれる通り、あの廣嗣は藤原一門の憎まれ者には違ひなかつたが、さて謀叛の逆罪に問はれて筑紫で誅に伏した、それが御坊の指し金と分つて見ると、迚がに藤原一統の氣持はよくない、そこで人心轉換の爲めに精々緩和策を講じる必要が起つて來ると私は思ふのだが。

玄昉　私もそこを思へばこそ、久しく怠り勝ちになつ



てゐる諸國の國分寺造營を再興させ始めたのだ、人心の轉換には佛法を盛んにして三寶歸依の心をふるひ興させるに限るどんな人間でも現世を厭ひ來世の祥福を願ふ所謂得脫成佛の心が起つて見ろ、政治上の爭ひ心などは忽ち消滅してしまう。

眞備　國分寺建立の御沙汰が出た時、私も成程御坊の計策だなと思つた。然し一面にかうした轉換策を講じると共に、他の一方には現世の利益といふことで人の心を惹つける方法も必要ではなからうか、それには今度十年振りで遣唐使と共に歸朝した留學生の處置なども考へて見ねばなるまい。

玄昉　お身は大伴の國足のことをいふのであらう。

眞備　その通り、あの男は藤原の廣嗣の推薦によつて留學生となつたのだから、廣嗣謀叛の眞相が分つたら勢ひ御坊を敵と見るべき立場になる。

玄昉　あの男なら既に手配してある、追つけ爰へ來る筈だ。

眞備　遣かにぬかりがないのう。

二人は微笑する。

玄昉　あの男は貴公や私が十九年間の修業を積んで唐から歸つたと同じ道を踏んで新に歸朝した所謂秀才だ、廣嗣のことがないとしても、是非とも味方につけねばならぬ有力な人物だ、然し私は先づ第一にあの男の心を試して見やうと思ふ。

眞備　どう試して見る。

玄昉　最初は要路の手でわざと冷遇させる、するとあの男は屹度不平に思ふだらう、その時始めて私の名を以て拔擢してやるのだ。

眞備　いさゝか策を弄し過るやうな嫌もあるが、然し案外妙策かも知れぬ。

玄昉　貴公も私も唐から歸朝した當時はどうであつたか學び得た唐の智識や學問を如何に日本の爲めに役立てやうかと心が逸るにつけて見るもの聞もの悉くが因循姑息で一として改革を要しないものはなかつた、國足なぞもその通り、今の心は意氣天を衝く慨があるだらう、その出鼻を挫かれる、そして私に救ひ上げられて、初めて驥足をのぶべき素地が與へられるとなつたら、彼も恐らく恩に感じて貴公や私に悅服せずにはゐまいと思ふ。

奏の阿曾彥が出る。

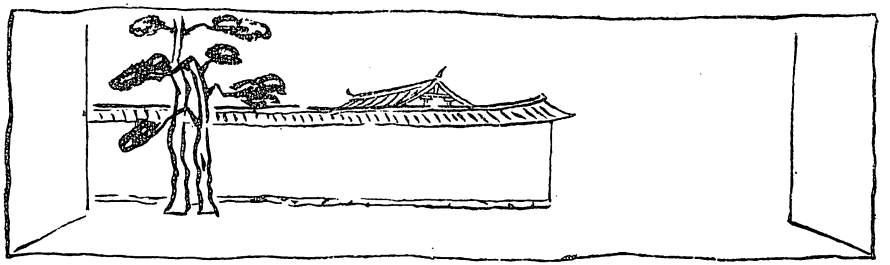
阿曾彥　大伴の國足を連れて參りました。

玄昉　これへ通してくれ。

阿曾彥　承知いたしました。

眞備　私が爰にゐては妙でない、暫らく次へ遠慮しやう。

玄昉が鈴をふると、一方から侍童が出る。



眞備はそれに導かれて上手へ去り、阿曾彦は下手へ去る。

程なく大伴の國足が出て玄昉を禮拜する。

玄昉も禮を返す。

玄昉　今日大政官から任官の沙汰があつたと聞いてゐたが。

國足　はい、從七位の下に叙せられ圖書寮の寫經司を拜命致しました。

玄昉　（わざと意外らしく）寫經司に、十年の學德を積んで新に歸朝した國家有爲の人物を寫經所の司に任じるとは要路の方々は何と思ふてゐられるのか。

國足　布衣の一青年が歸朝早々官位を賜はる上に佛緣深い寫經司の役目を仰つかりましてこの上の喜びはございません。

玄昉　私は佛徒の身で天下の政道に嘴を容れるすべもないが、かういふ誤つた御沙汰に對しては……然し一旦仰せ出された以上は如何ともし難い、まア不平であらふが暫らくはこの儘忍ぶがよい。

國足　決して不平なぞはございません。

玄昉　時に唐朝は相變らず盛であらうな。

國足　隆昌を極めて居ります。

玄昉　新歸朝の貴公の眼に日の本の現狀はどう見えるな。

國足　まだ何一つ見ることも、聞く遑もございませんので。

玄昉　然し廣嗣殿のことは聞いたであらう。

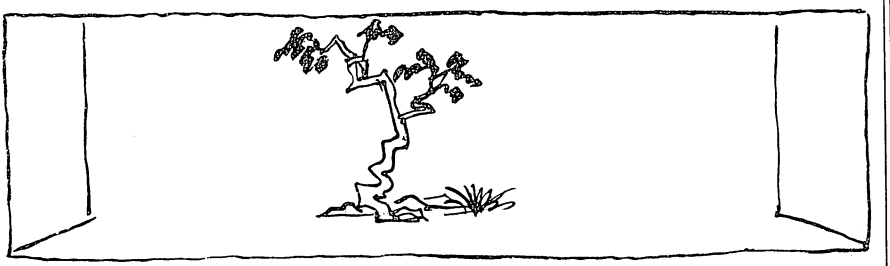
國足　謀叛の罪により筑紫に於いて誅せられたと云ふことは承はりました。

玄昉　廣嗣殿は同じ藤原一門の權勢爭ひの犧牲になられたのだ、然かも表面は私と下道の眞備殿を彈劾したことに端を發してゐる、如何にも私と廣嗣殿とは意見を異にしてゐた、丁度新らしき學問と智慧とを得て歸朝した貴公の心に、日本の現狀が慊足らず思はれると同じく、先例古格に狎む人々と意見の相違するは是非もない、貴公も今その胸中に藏する天下の經倫を忌憚なく口外したとすれば、私や眞備殿と同じく直ちに人々の彈劾を蒙ることは火を觀るよりも明かな。

國足　天下の經倫などとは以ての外で私は唯長安の都に文人墨客と交り、いさゝか文學詩歌を學び得たゞけでございますから、寫經司は分にかなふたこの上もない役目だと喜んで居りまする、幸に僧正の御庇護を以て追々榮達の道が開けまするなら、この上の仕合せはございません。

玄昉　大伴は代々兵馬の家であるが、貴公は文學を修めて來たのか。

國足　彼地に於ては專ら杜甫先生に就いて詩學を學ん



で參りましたが、これからは佛道に志を寄せ謹んで僧正の御敎化を仰ぎたいと存じます。

玄昉は疑ひの眼を向ける。

國足は如何にも小心らしい態度。

玄昉　本夜はこれで別れやう。

國足　お引見下さいまして忝ふ存じまする。

拍手禮拜する。

玄昉が鈴を振る。

と弟子僧が出る。

國足はそれに導かれて去る。

上手から眞備他方から阿曾彦が出る。

眞備　更に鋒鋩を露はさぬ所が曲者だぞ。

玄昉　なアに、今の學徒はあんなものだ。

阿曾彦　出世の爲めには變節や豹變は當前のことですからなア。

玄俊が出る。

玄俊　仰せの通り連れて參りました。

眞備　誰を連れて來たのか。

玄俊　はい、あの修道中の女でございますが

眞備　はゝゝゝ、相變らずだな、では私達はお暇しやう。

眞備と阿曾彦は下手へ去る。

下手から櫻兒が出る、僧正の足下に蹲居して禮拜し法衣の裾を戴く。

玄昉　お前は悟の道に入りたいか。

櫻兒　はい。

玄昉　衆生を敎化する立派な尼になりたいか。

櫻兒　はい、僧正樣。

玄昉　では、どのやうなことでも堅く信じて決して疑はぬな。

櫻兒　はい、如來樣のお諭しと堅う信じまして。

玄昉　お前は先づ女としてのすべてを知らなければならない。

櫻兒は再び禮拜して法衣の裾を戴く。

玄昉はその手を取つてぢつと見る。

お前は天女のやうな處女だな。

屏風の蔭(玄昉の後)から沙彌麿が窺ふ。

物凄い伎樂の假面をかぶり異樣の立扮をしてゐる。

櫻兒が眼ざとく認めて呼ぶ。

櫻兒　あツ、僧正樣。

玄昉　何者だ。

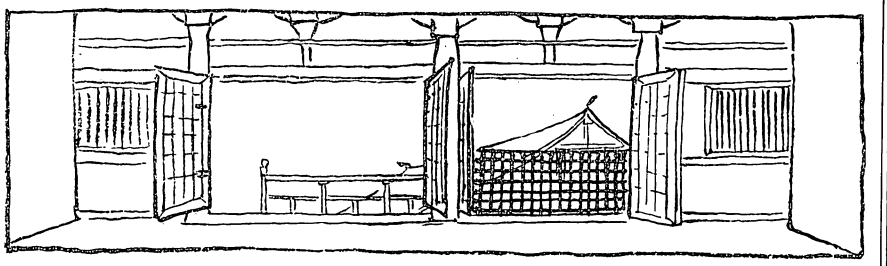
沙彌麿　女をたばかる賣僧め。

斬つてかゝる。

玄昉は激しく鈴をふる。左右から僧や官人が大勢出て、沙彌麿を捕へやうとする。

沙彌麿は几上の經卷を取つて、上手の須彌壇(見えず)に向つて投げる燈消える。

——暗轉——



第三　都大路

舞臺面　正面一直線に朱塗の柱、碧色の窓を持つた白壁の塀、その前に溝川を繞らす、二三の松の木立。

僧、尼、優婆塞、優婆夷、衞府の官人、都の男女、などが徂徠ふ、皆口々に經文を唱へながら歩む。

上手から玄俊と番頭二名に護られて、寺奴の赤磨その他男女十數名が出る。

それを退ふて赤磨の父奈保人と阿波比女が出る。

阿波比女　赤磨殿。

赤磨　阿波比めか。

奈保人　悴。

赤磨　お父さん。

赤磨は列を離れて三人取縋つて泣く。

玄俊　行かぬか。退け（引立てる）

奈保人　待つて下さいまし、今別れては迚もこの世で悴に逢うことは出來ませぬ。

赤磨　お父さん、どうぞ達者で暮して下さいまし、行く所もあらうに、遠い筑紫へ賣られるとは、これも前世の宿業と諦めるより外はありません、阿波比女お前との約束ももうこれ切り、私は死ぬまでお前のことを。

阿波比女　私も奴に身を賣つて、お前と一緒に行きます。

赤磨　飛んでもないことを、お前には親もあれば兄弟もある。

阿波比女　でも、お前に別れて生きてゐる氣はありません。

赤磨　あゝ、阿波比女。

玄俊　行け、今更らしく何をめそ〳〵泣くのだ、生れながらに奴の境涯にゐる者が賣渡されるに不思議はないではないか。

奈保人　それはさうでも親子別れ〳〵に賣られるとはこれが泣かずにゐられますものか。

赤磨　お父さん諦めて下さい、大臣から御寺へ寄進された私達は國分寺造營の用が濟んだら、また外へ賣られると云ふことは初めから分つてゐました。私達は人間に生れて人間ぢやない、諦めてゐます〳〵。

玄俊　えゝ、面倒な奴だ、引摺つて行け。

一番僧等は苛酷に赤磨を引立てる。

一行は歩み出す。

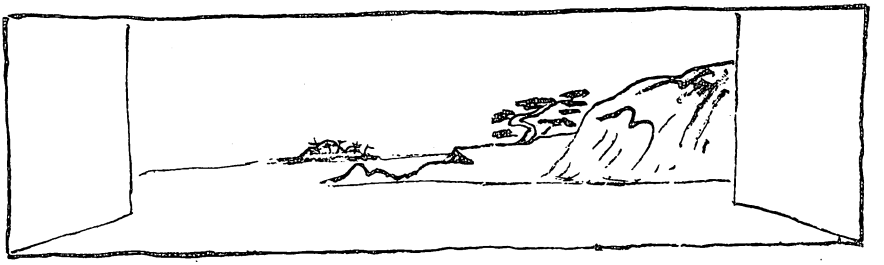
赤磨　お父さん。

奈保人　悴。

一行は下手へ去る。

奈保人は泣倒れる。

阿波比女はそれを勞はつてゐたが、堪りかね



て赤磨の跡を追ふ。

阿波比女　赤磨どの〳〵。

下手へ去る。

下手から沙彌磨が出る。僧形、業病を疾むでゐるらしく深く面を包み腰を弓形に曲ぐ、胸に頭陀袋をかけ、國分寺塔堂建立勸進の旗を持つてゐる。

沙彌磨　お老人どうなされた（奈保人を抱起してやる）

奈保人　可愛いたつた一人の悴が、筑紫の太宰府の防人の奴にやられてしまひました。

沙彌磨　お前方は奴の境涯か。

奈保人　はい、たとへ奴の境涯でも親子一緒なら喜んでどんな辛い働きでも致しますのに、この歳で悴を引離されては　（泣く）

沙彌磨は頭陀袋から首飾の玉、金、釵、鏡、錦などを取出して渡す。

沙彌磨　これで息子と自分の體を買戻すがよろしい。

奈保人　え、親子の體を、でもこれはお堂建立の。

沙彌磨　そんなことを心配せずとも早く行きなされ。

奈保人　如來樣か、觀音菩薩樣の御化身か有難ふござります〳〵。（拜む）

沙彌磨　早く行かぬと、老人の足では追つけませんぞ

奈保人　悴……悴……

下手へ走り去る。

沙彌磨は笑ましげに見送る。

大勢の男女が通りかゝる。

國分寺塔堂建立勸進：善男子善女人、謹んで三寶に歸依し淨財を奉襄して現當未來の福樂を享けられよ、奇妙頂禮〳〵、國分寺塔堂建立勸進。

道行く男女は恭しく禮拜してはさま〳〵の品を喜捨して行く。

やがて皆ちり〳〵に去る。

沙彌磨は袋の重さを量つて嘲笑ひ、曲つた腰を延ばす。

人の氣勢に驚いてまた以前の姿勢に歸りとぼ〳〵と去らふとする。

下手から國足と阿曾彦が出る。

阿曾彦　では今の話は僧正に申上げてよろしいな、後になつて違背をするやうなことはありますまいな。

國足　そんなことがあつてどう致しませう、今も申す通り、私は僧正を無二の力とたのんで居ります、僧正の仰せとならばどんな御用でも、命をかけて仕遂げて御覽に入れます。

阿曾彦　それを聞かれたら、嘸御滿足なさるでせう、では私はこれから直に内道場へ參つて、僧正にお目にかゝつて參ります。

阿曾彦は下手へ引返へす。

國足は見送つて暗に冷笑する。

法師の佇立に心付いてさり氣なく行きかける。

沙彌麿　國分寺塔堂建立勸進、奉賽をおすゝめ申します。

國足　見らるゝ通り途次で何も喜捨するものがありませんから。（行きかける）

沙彌麿　では、私の方からよい人占を差上げやう。

國足　ふう、人占ですと。

沙彌麿　今夜三更の鐘が鳴る時、勝間田の池の畔に立たせられい、あなたは世に又とない寶が得られる、世に又とない寶が。

沙彌麿は下手へ去る。

國足は不審氣に見送る。

御垣の内から喨々たる舞樂の音が洩れる。

——暗轉——

第四　勝間田の池

舞臺面　わずかに堤の一部と一本の木立を見得るのみで闇黑の舞臺。（黑幕）

鐘の音が鳴響き、上手から國足が出る。

一方の暗の中から以前の僧形をした沙彌麿が出る。

沙彌麿　人占を疑はずによくおいでなされたな。

國足　最前の法師か。

沙彌麿は法衣と冠物を脱ぐ。

沙彌麿　無上の寶はお身の胸元にかう近づくわ。

隱し持つた刀で刺さうとするのを引外す。

國足　卑怯者、名を名のれ。

沙彌麿　十年以前、難波の濱邊に袂を分つた石川の沙彌麿を忘れたか。

國足　何、沙彌麿か。

沙彌麿　恩人の仇にへつらう人非人め。

斬りかゝるを交して、利腕を捉へ互ひに暗にすかして面を見合はす。

國足　ではこの頃都を騒がすと聞く、神變不思議な盜賊は同名異人と思ひの外、おのれであつたのか。

沙彌麿　如何にもおれだ、主を失ひ、親を殺され、天涯無住の盜賊となつても故主の爲めに仇を報ゆる心は失はぬぞ、それにおのれは權勢におもねつて廣嗣公の恩義を忘れるとは何事だ、親友のよしみに石川の沙彌麿が成敗の刃を加へてやる、有難く思つて往生しろ。

烈しく斬りかける。

國足　大伴の國足は權勢におもねる當世男と貴樣にも見へたか。

沙彌麿　何だと。

國足　人占は當つた、國足は安心と云ふ何より寶を得た、沙彌麿、今こそ俺の本心を打ち明けやう、近く來い。

沙彌麿　國足、では貴樣は？

國足　あくそくとして榮達を漁ると見せ。暮夜頻りに權門を潛るのも内道場の奥深くかくれて天下を荼毒する玄昉めの奸惡を發くためだ。

間近に水鳥の羽音。

二人は四邊に眼を配る。

淋しい啼鳥の聲。

更に近よつて額を鳩める。

——暗轉——

第五　國分寺の寢殿

舞臺面　正面に内部より見たる開戸の出入、左右は半蔀をおろし、その外に廻廊と階段がある體、庭をへだてゝ七重の塔の下層部が見へる、　晴れたる日……

僧尼の來集を報らす太鼓の音、大勢の比丘と比丘尼が廻廊を下手から上手へ通りすぎる、上手から玄昉が八人の侍童を從へて出る。

下手から玄俊と阿曾彦が出る。

玄昉　今、來集の合圖があつたやうだな。

玄俊　はい、然しまだおよろしうムいます。

正面から櫻兒が出る。

櫻兒　僧正樣。

玄昉　櫻兒か、けふの開眼供養を拜みにまゐつたのか。

櫻兒　いえ、あなたにお禮を申しにまゐりました、僧正樣、あなたは悟りの第一義は女としての總てを知りつくす事だとお敎へ下さいました、そうして私をその女にして下さいました。

阿曾彦　これ、僧正はけふの導師でゐらせられるこんな所で何を申すのだ。

欄兒　唯お禮を申してゐるのでございます。

（玄昉に）然し僧正樣、私にはもう一つ知らなければならない一番大切なものが殘つて居りまする。

玄昉　それは　…

櫻兒　（思ひきつた態度で）戀でございます、そのことを悟つたのも、やつぱり僧正樣のお蔭と申さねばなりますまい、厚くお禮を申上げます、では御機嫌よろしう。

と行きかける。

玄昉　待て、何處へ行く。

櫻兒　一番大切な修業に參ります。

玄昉　ならぬ。

二人に目配せする。

玄俊　櫻兒（立塞がる、阿曾彦は手を捉へる）

櫻兒　體は捕へても心はとらへることは出來ますまい。

阿曾彦　來い。

二人して下手へ引立て去る、廻廊から國足が出る、その後から女裝した沙彌麿が出て廻廊に佇立む、國足は殿内に進む。

國足　導師、藤原の大臣から女性をお使ひに遣はされましてございます。

玄昉　これへ。

國足　はつ。

國足は殿内へ導く。

沙彌麿は蹲いて玄昉を禮拜する。

玄昉　お使ひの御口上は　……

沙彌麿　お文を給はつてございます。

文を渡す、玄昉は開き見て驚く。

玄昉　斬奸狀　……

沙彌麿は突如に躍りかゝつて隱し持つたる短劍で刺す、侍童は逃げ去る

沙彌麿　石川の沙彌麿が廣嗣公の怨みを晴らすのだ。

玄昉　おのれ。

突放す、國足も斬りつける。

國足　おのれもか。

國足　國賊、思ひ知れ。

玄昉　玄昉を國賊などゝは事理を辨へぬたわけものめ。

罵りながら落入る。

下手から櫻兒が逃げて出る、それを追ふて玄俊と阿曾彦が出る。

三人は死骸を見て驚く沙彌麿と國足は二人を斬り倒す。

國足　沙彌麿早く。

沙彌麿　よし、櫻兒。

櫻兒　おゝ、あなたは

大勢が寢殿に近づく氣勢。

沙彌麿が向ふとするを遮つて國足は入口に立つて叫ぶ。

國足　曲者が僧正をあやめて裏手へ逃げ去つた、曲者を追へ／＼。

廻廊を下手へ走せ去る。

沙彌麿　櫻兒。

同時に沙彌麿は櫻兒の手を取つて寢殿の上手へ走せ去る。——暗轉——

第六　國境の山

舞臺面　山上の坦、後ろに連峰の頂を望む黎明の光が爽かに照らす。

旅姿をした奈保人、赤磨、阿波比女の三人がそれ〳〵荷物を置いて憩んでゐる。

赤磨　けふは好い天氣だな。

奈保人　全く、いゝ天氣だ。

阿波比女　何と云ふ幸先のよい門出でせう。私達の行末も屹度仕合せに違いありませんよ。

赤磨　さうとも、あの湖の近江の國へ行つて樂しく暮すのだ。

奈保人　親子夫婦、三人が本當に樂しくな。

上手から國足、沙彌磨、櫻兒の三人が出る。

國足　いよ〳〵愛が國界だ、これで袂を分つことにしやう。

沙彌磨　名殘りに暫く話さうではないか。

奈保人　あなた方も旅へお出でなさるのでございますかね。

沙彌磨　おゝ、お前方は。（ぢつと見る）

奈保人　左樣でございますか、安穩なよい土地を探して近江の國へ住まふと思ひまして

沙彌磨　都は住み飽きたのだな。

赤磨　怖ろしくなつたのでございます、不思議と御佛のお助けを蒙らなかつたら、私達三人は今夜どうなつてしまつてゐたか、それを思ふと身の毛がよだつやうだ。

奈保人　全くなア、あなた方も信心を怠つてはなりませんぞ、私達の今度のことが何よりの證據でございます、功德のためにお話しますがなこの伜がすんでに銃柴へ奴に賣渡される所を日頃信仰する觀音樣が澤山の財物をお惠み下すつたので伜も私も奴の境涯からこの體を買ひ戻すことが出來てこの迚り樂しい旅に出られるといふ次第、これも皆、信心のおかげでございます。

赤磨　お父さん、私も一目でいゝからその觀音樣の御代身を拜みたかつた。

阿波比女　どうぞしてもう一度お姿をお示し下さらないものでせうか。

奈保人　私ももう一度拜んでとつくりお禮が申上げたいと思ふよ、それは〳〵貧しさうな老僧の姿に化しておいで遊ばした、慥しか國分寺建立の旗をお持ちなされてな、南無觀世音菩薩樣〳〵。

沙彌磨　目のあたり、御佛の姿を見るとは、お前方は前世でよく〳〵善根を積んだものと見える。

奈保人　本當にさうでムいますよ、だが伜、そろ〳〵出かけやうか、すつかり夜が明けきつて仕舞つた。

赤磨　さうしませう、ではお先へ御免下さいまし。

三人は勞り合ひながら下手へ去る。

沙彌磨　全く、仕合せな親子夫婦だ。

國足　さういふ二人も、これから眞實の仕合せものになるのだ。

沙彌磨　貴樣には榮達といふ仕合せが手を擴げて待つてゐる、然し櫻兒は二度と淨行なぞは思ひ出したくもないだらう。

櫻兒　いゝえ、淨行は私に一番いゝものを授けてくれました。

沙彌磨　何を……

國足　問ふまでもない、戀といふ寶さ。

沙彌磨　櫻兒。

櫻兒　あなた。

そつと沙彌磨の手をとつて、さすがに恥かしさうな態度。

國足と、沙彌磨は晴々として笑ふ。

——幕——

編輯後記

朝郎生

◇電報を打つやら速達を飛ばすやら電話をかけるやら自動車で駈けづり廻るやら、まるで眼から花火の出るやうな忙がしい思ひをして漸つとのことで豫定通りの原稿が集る、それを片つ端から印刷所へ送つてやれ／＼と息をつく間もなく各座の初日は迫るし思はぬ行違ひや手ぬかりから雜誌はおくれる一方で氣ばかり焦るのだが、僕の身體に製版屋も印刷機械も据えつけてないのだからどうにも仕方がない。兎に角曲りなりにも雜誌が出來上つたとする、が出來上つて見ると、始めて氣のつかぬ個所や手落ちの所が又眼について苛々する。僕は益々痩せて行く一方だ。

◇百二三十頁の雜誌で、何んの樣だ。と嗤ひ給ふ勿れ、是れでも僕は僕のベストを傾けてゐるのだ。

◇お前の編輯後記と言へば、泣聲やお世辭ばかりで見つともない。と思告してくれた男がある、けれども僕は金輪際神かけて必ずお世辭を言つてる心算りではない（泣言は並べてる）御存じの通り他の雜誌と違つて初日の間に合はさなければならない雜誌だ。恩も義理もない人にわざ／＼貴重な時間を潰して頂いた原稿である。それでゐて原稿なんか、無駄口でも辨言るやうに安々と書けるだらう、とでも思はれさうな賴み方をして、それでも怒らないで間に合はせて下さる諸家の御厚情を思ふと、全く神樣か佛樣かのやうに御光がさして一生恩に着たい氣がする。嘘だと思ふなら、一度僕の眞似をしてみるがよい。

◇本輯の表紙は、日本畫壇の權威山口草平氏に揮豪して頂いた。錦繪もいゝが、肉筆も又異つた趣きがあつていゝと思ふ。

◇「權太の性根」の延若丈には、其他に丈の權太の型といふ御玉稿を頂いた。川尻清潭氏の六代目の「いがみの權太」と比較對照して讀むのも面白いと思つたが十六頁以上の紙面を割いても足りない位の尨大な御原稿なので、殘念乍ら掲載することが出來なかつた。何れ機會を見て是非諸氏の御眼にかけるつもりである。

◇今度讀者諸氏の御希望に依り樂書帳を設けることゝした（樂書帳とは所謂讀者通信のこと）もつと早く氣がついてゐたのだが、今日まで遂忙がしさに取まぎれて果せなかつた次第、兎に角「道頓堀」は讀者諸氏の雜誌である。諸氏の頁を設けた以上御自由に御勝手に使つて頂きたい。但し規定は必ず實行して頂きたい。

◇最後に「年極め讀者」の募集をしたが今の所豫定人員の三分の一にも滿たぬので、當選者の發表は見合して更に募集することにした。本誌としては懸賞なしでも定價三十錢は安いと思つてゐるのだ、此際勇敢にどし／＼申込んで頂きたい。

昭和三年五月一日發行

月刊雜誌『道頓堀』第三年第二十輯

□誌代は前金でお拂ひを願ます。

□郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。

□御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

定價 金參拾錢（郵費錢五厘）

昭和三年四月廿八日印刷
昭和三年五月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹合名會社

編輯兼發行者 鳥江銕也

印刷者 大阪市東區船越町二丁目三〇 山上貞一

印刷所 大阪市東區船越町二丁目三〇 中央堂印刷所

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹合名社內
發行所 道頓堀編輯部
電話（一二四〇番）（六六八五番）

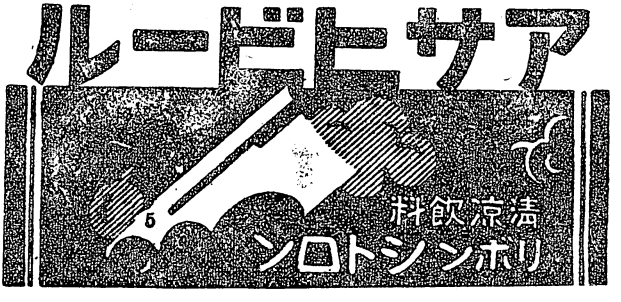
爽やかな初夏の氣分!!
いみじき情緒・はつらつたる演技
御家族揃っての御觀劇
樂しい集團的の御觀劇
には
→是非當所を御利用下さい。

大阪市南區久左衞門町八(松竹合名社內)
松竹觀劇案內所
電話南(一二四〇番 六六八五番)

中座 辨天座 樂天地
浪花座 松竹座 春日座
角座 朝日座

京都松竹經營各劇場
神戸松竹經營各劇場

◇御申越次第即時參上御相談申上げます。



プラトン社出版の二大雑誌と新刊書

月刊雜誌 クラク ¥0.50

娯樂雜誌として誌界に高く聳えてゐるクラク

豊かなる藝術味と輕きユーモアに潤へるクラク

創作は勿論探偵小説に映畫に演劇に活氣横溢せるクラクは紳士淑女の好伴侶である

三上於菟吉著 長篇小説 首都

美貌と才氣に惠まれたる

近代兒を繞る戀愛情史

内容

キユラソウ（時代の子　美　妻　蜜　蜂）

妖（花　毒　情　男）

花を踏んで進む（罪に甦へる女　刺　青）

新しき薔薇（花　粉　婦　笑　美　哀　傷）

普及版　定價五拾錢

月刊雜誌 女性 ¥0.70

女性は婦人雜誌界の權威であつて最も優れた品位と體裁を具へ時代にふさはしい明るい雜誌である

文壇大家の傑作揃——

新時代に適應せる知識の豊庫

婦人修養の一大明鏡

鈴木泉三郎著 火あぶり

新劇招來の烽火!!

才氣潑溂にして近代的感覺に根ざしたる舞臺技巧と、あくまで豊艶眞摯なる筆致を以て雄々しくも新劇招來の烽火を翳し多くの仕事を殘して夭折した天才戯曲家鈴木泉三郎氏こそ未來の劇壇を暗示し次の時代の劇を建設したと云ふべきである

普及版　定價五十錢

東京　プラトン社　大阪

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和三年四月廿八日印刷
昭和三年五月一日發行

金參拾錢（郵税一錢五厘）